
さよはじ はじさよ

猫海月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよはじ はじさよ

【Nコード】

N4413Q

【作者名】

猫海月

【あらすじ】

「雪の降るホワイトデー…ですか」

「へえ…素敵じゃない。そうと決まれば今日は宴会と行きましょう。理由はもちろん！」

今は大きな奇跡を起こした、小さな魔法使いを称えましょうか。

吸血鬼とメイドと幽霊で色々遊んだりだらけたりが本編

基本ほのぼの日常たまに殺伐です

旅行に行こう！ 温泉は戦いです（前書き）

はい、始めました新シリーズ

今回も例によって例のごとく魔法をあまり使わないのにファンタジーを名乗ってます

何が何でもファンタジーです

対して変わりませんが最初ということで注意書きがいくつか

1 近作は前作、クラゲって可愛いですよ！のかなり後の世界観になっていますが読んでなくとも基本的には問題はないと思います
読んでいただけると嬉しいです。きゃっほーいとか言いたくなります

2 基本的に作者の頭は湧いてます、生暖かい目でお付き合いください

3 基本的に短い内容ですがたまにいつもよりも長い話があります
その場合は前書きに一言入れるので時間を捨ててもいいと考える方はお付き合いください

何が長いだ長くなーよという方はごめんなさい、作者に文才が無いせいです

4 作者が書きたいときに書きたいところで書いてるせいで時系列がばらばらになってます、基本1話完結なので問題は無いですが、あらかじめご了承ください

そんなこんなで注意書きもつらつらと書いたところで！

人物表！

霞日 カスガ エウナ

吸血鬼 ぼんきゅっぼん ついに苗字が出たよ！

霞日 カスガ メリー

幽霊 意外とある 別に結婚とかはしていない

叶夢 カナエ ユメ

メイド ペたペた

それでは、お付き合いいただければ幸い

旅行に行こう！ 温泉は戦いです

私も温泉に入ろうとしたら、周りをきよろきよろと見渡しながら外へと出るメリーが見えた。何してるのかしら？

始まりは数日前、私が海の大百科とか言う本のクラゲの欄を読んでいたらユメが反応した。どうも彼女はクラゲは知っていても、それが海の生物だということはまるつきり知らなかったらしい。

何でもお土産なんかで見かけたのを気に入ったとか何とか…。さらに信じられないことにうちのメイドは海というものを今まで見たことがないとのこと。

ということで善は急げの言葉のとおり、今は海の近くのお馴染みの温泉宿に旅行中なのである。ちなみに今の季節は夏で旅館は大繁盛なのだけれど…よくとれたわね。

なんとなくメリーの後を背後霊のごとく着いていくと、彼女はそこそと藪の中へと入っていった。霊の後を追いかける霊…想像するとシユールね。

「こんなところで何をしてるのかしら？」

「ひい！」

うずくまって何かをしている彼女の銀色ポニーテールの髪に声を掛けると、彼女は驚いたように飛び上がった。手に持ってるのは…カメラ？

「ちちちち違うんです、エウナさん！これはあのですね…」

私の方を振り向くとメリーは両手を振り回す。彼女が手を振り回

すたびにカメラに付いてるストラップがぺちぺちと周りにあたるあたる。危ないわねえ…

「へえ、何が違うのかしら？」

正直何故慌てているのかわからないが、面白そうなので乗ってみる。

「いえ、あの…コレはですね…決してユメさんのお風呂姿を盗撮しようとしているわけではなく…ただあそこにある樂園を記録という形でこの世に残そうとですね…」

何も言わずに黙ってみていたら何をしようか勝手に話し始めた。

盗撮…ね、バカらしい。

「そ、それならがんばりなさい」

「へ？」

「何よ？」

「えっとお仕置きはないんですか？」

「へえ…お仕置きしてほしいの？」

「い、いえっ！そんなことは決して！」

私がメリーに微笑むと、彼女は青ざめた表情で首をすごい勢いで横に振った。…残念ね。

このままここに居ても何もすることもないので、温泉に入ろうと旅館へと足を向ける。

どうせ盗撮なんて出来ないでしょうし。

「ああ、メリー」

一応言って置こうと振り向くとまたカメラを弄っている彼女に話しかける。

「は、はい！何でしょうか！？」

「あなたの体を案じて言っておくけれど、盗撮なんてやめたほうがいいわよ？」

「…えーと？」

「その辺り、畏だらけだから」

そういつと私は小石を拾って投げる。すると、『ぶっん』とした音がし丸太が小石の落ちた辺り目掛けて振り子のように飛び出してきた。

「…わお」

メリーはその様子を眼を丸くして見つめている。

「こういうこと、まあ…がんばりなさいね。私はユメとお風呂に入るから…ちょっと、離しなさいよ」

私がまだ驚いているメリーにそう告げて旅館のほうへと歩き始めると、メリーに服のすそを掴まれた。

「…」

「…」

無言で見詰め合う私とメリー、はたから見たらまるで告白シーンの様でもあったでしょう。もしくは果し合いか。まあ、私にとっては戻ればどちらでもいいのだけれど。

「エウナさんは…」
「何よ」

先に沈黙を破ったのはメリーだった。私はというと、いかに服を傷めずにこの手を取り外すかを考えるのに夢中になっている。手を引きちぎるのは血が付いてダメだし…

「エウナさんは…ユメさんとよくお風呂に入るんですか？」
「そうだけど…？それが…って泣かないですよ！」

私の言葉を聞くとすごい形相で涙を流すメリー。ちょっと…いやかなり怖い。

「私まだ一度も入ったことないのに！」

「…頼めばいいじゃない？」

「それが出来たら…それが出来たらこんなことしてないんです！」

メリーはそう叫ぶと露天風呂となっている温泉の方へと走り出した。ちょ、だから危ないって！

案の定発動する罨、罨、罨。地面から突然出来る穴や飛び出す槍、降り注ぐ矢の雨、なぜか飛んでくる金たらい、振り子のように飛んでくる丸太や足元に設置されているトラバサミ…等など。…何かひとつ罨じゃないようなものがあつた気がするけれど…当たると痛いね。

メリーはその罨の嵐があるときは避け、ある時は受け止め、ある時は自力で外して放り投げながら、じりじりとしかし確実に露天風呂へと近づく。

「あっ…」

思わず声が漏れる。

彼女が飛んで着地した瞬間、まるで狙い済ましたかのように槍が飛び出した。それを彼女は強引に体をひねることでかわしたが、完全に避けることは出来ず、その手に持っているカメラが槍に貫かれた。

壊れたカメラをしばし呆然とした様子で見つめる私とメリー。しかしメリーは「ふっ」と笑うとポケットから何かを取り出した。あれは…インスタントカメラ！？

新たに手に入れた戦力^{カメラ}を手に、メリーはまた罠の中へと挑み始める。

何が彼女をそこまで急かすのだろうか。決して盗撮のためではない。そう、コレは罠との戦いなのだ！

盗撮はあくまでおまけ。いわばクリアした後のボーナスに等しい。今大切とされるのは、あの罠の中を突破したというその事実のみ！

「危ない！」

私は無意識に叫びながら走り出すと、トラバサミに引っかかって動けないメリーを狙って飛んで来た丸太を粉碎した。

「私が甘かったわ…」

「エウナさん…」

「あなたがそこまで本気だったとは思わなかった…手を貸すわよ、メリー。準備はいいわね？」

「…はい！」

一人では困難な道も二人なら乗り越えられる！さあ、一緒に行き

ましよう、メリー！

私たちは二人で協力し合いながら罫の嵐を乗り越えていく。中には連鎖的に発動する凶悪なものもあったが、私の力とメリーの機転、この両方が合わさった私たちにもはや敵はない！…はずだった。

「お二人とも、そんなところで何をしているのですか？」

声をした方を見上げると、露天風呂の壁から白髪の少女…ユメが顔だけを出してこちらを見ていた。

「…」

私たちは無言で顔を見合すと、そのまま後ろに数歩下がり綺麗に土下座をする。その一連の流れは少しの乱れもなく、綺麗にシンク口している。

（メリー、私たち…シンク口でも食べていけるわね）

（そうですね…エウナさん。もしも財政難になったらそれも選択肢に入れましょう）

土下座の姿勢で眼だけで会話して現実逃避する私とメリー。

「それで、お二人は何をしているのですか？」

（どうする…ここで間違うと色々と拙いわよ）

（…ここは私に任せてください）

（大丈夫なの…？）

（はい、任せてください！）

「こ、これはですね！ユメさん…ぐふっ！」

メリーは必死にそういいながら立ち上がるが丸太の直撃を受けて吹っ飛ぶ。…私たちは忘れていたのだ、ここが罠だらけの死地であったことを。

嘘、嘘でしょう？いくときは二人一緒だってさっき誓い合ったじゃない！

「メリイイイイ！ぐふっ！」

私も動揺していたのだろう、罠に掛かった彼女へと近寄ろうと立ち上がって丸太の直撃を受けた。…私たちは忘れていたのだ、ここが罠だらけの死地であったことを。

とりあえず四つんばいのままメリーの元へと近寄る。

「エ…ウナ…さん…」

「大丈夫！大丈夫だから！」

「ごめんな…さい…近い…まもなくて…」

「いいから…いいから喋らないでメリー！」

「ぐふ…」

「メリイイイイ！」

メリーと私は迫真の演技で場を乗り切ろうとする。そう、すべてはユメを騙すための演技なのである。

ここまですれば後は状況に流されて私たちのしたことは…

「それで、お二人はお芝居をするためにそこにいるのですか？」

「…」

…騙せなかった。

（メリー、私たち…役者でも食べていけるわね）
（そうですね…エウナさん。もしも財政難になったらそれも選択肢に入れましょう）

倒れた振り続けるメリーと目で会話して再び現実逃避を始める私たち。

「聞こえてますか？」

「き、聞こえてるわよ！」

「そうですか。では、お二人はボクにお芝居を見せてくれるためにそこにいるんですか？」

（ど、どうします…この分だと次はないですよ？）

（…ここは私に任せて）

（大丈夫なんですか…？相手は手ごわいですよ…？）

（ええ、何とかするしかないわ！）

「あー、ユメ。私たちはね…」

私は立ち上がりながらユメのほうを見る。…今はユメの無表情が怖い。大丈夫、私は出来る子…大丈夫。

「はい、何でしょうか？」

「あなたとお風呂に入ろうと思っここに居るのよ！」

そこで『びしい！』とユメに指を突きつける。…決まったわね。すると足元でメリーが小さく「あちゃー」といつているのが聞こえた。

…私はしばらくその姿勢のまま動かず、ユメの様子を伺う。

「そうですか、それではそんなところで倒れておらず早くこちらに来てください」

そういい残すとユメはお風呂場へと消えていった。

その後にはもう白髪に無表情の少女の姿はなく、壁から見える湯気だけが見えた。

「エウナさん…やりましたね！」

「ええ、やったわメリー！」

私たちはお互いに見つめあうと抱きしめあう。私たちは無事やり遂げた！

そして、抱きついたどさくさに紛れて胸に顔を埋めて来るメリーを殴り飛ばすと、私はユメの元へと歩き始めた。

後ろで吹っ飛んだメリーが罫を次々と発動させている音が聞こえたけれど…自業自得ね。

□ □ □ □

私は湯船に浸かると月を見上げる。はあー…ごくらくごくらく。

「それではメリーさま、そこに座ってください」

「あいあいさー」

「うんしょ…力加減とかは大丈夫でしょうか？」

「…は、はい…大丈夫です」

その後ろでユメがメリーの体を洗う声が聞こえてくる。…くわば

らくわばら。

「はひん!？」

「…? どうかありませんか? 顔が赤いですが」

「い、いえ、なんでもないです…」

……何も聞こえない、何も聞こえない。

「あつ、んっ!」

「メリーさま、そんなに動かないでください、洗いにくいです」

「え、あ、はい…ごめんなさい」

後ろから聞こえるメリーの嬌声を意図的に無視しながら私は満点の空を見上げる。温泉に浸かりながら星を見上げる、風流ね!。

…正直風流ってどういう意味なのかわからないけれども、本ではこういったときに使っていたような気がする。

「はあ…はあ…」

「それでは、次は前を洗うのでこちらを向いてください」

「え!?! い、いや! 前は自分で洗いますから!」

「半端なのはいけません、ボクに任せてください」

「え…でも…」

「ダメですか…?」

「…お願いします」

少しずつ大きくなっていくメリーの喘ぎ声を聞きながら私は現実逃避を始める。

…私も一度、ユメに洗ってもらったことがある。
旅をしているときにマッサージで稼いだこともあったというユメ

の力加減は最高で、それでも不器用なのか何処かぎこちなく動く指は、本人が無邪気に触ってくるのもあって色々と拙い。非常に拙い。正直言つて一度嵌ると抜け出せなさそうである。

そのようなことがあってから一度も、私はユメに体を洗わせた事はない。ユメは断られるたびに少し不満そうだが、私が断ると素直に引いた。

ふふ… ついにあの子の感情がわかるようになったのよ。なんとなくだけで。

やがて、ユメに体を洗われるのと同時に色々なものを失ったメリーの嬌声が収まると、私の現実逃避も終わった。さあ、次はわが身だ。気合を入れないと…

「それでは次にエウナさま…」

「私は自分で洗うからいいわ」

腰が抜けて立てずに居るメリーを横目にそう言う。

「そうですか…」

少し顔をうつむかせて小さな声で言うユメ。…ダメよ私！ここで妥協しては！ここは心を鬼にして断るのよ！

「ええ、せっかくの誘いだけれど悪いわね」

俯くユメの姿に罪悪感を感じながらも洗い場へと向かう。ごめんなさいユメ。でもわかって、私たち妖怪には譲れないものがあるの。

「…エウナさま」

「…何？」

これはヤバイ！気をつけろ！と心の中で誰かが言っているが、この状況でどうしろっていうのよ！

「昔洗ったとき、何か気に障ることをしたのが原因なんでしょうかな？」

呟くようにポツリと言うユメ。…ダメよ私！ここで妥協しては！ここは心を鬼にするのよ！

「…体を洗って頂戴」

無理でした。

「…いいのですか？」

「ええ、お願いするわ」

嬉しそうにしゅわしゅわと泡立たせるユメの前に座りながら、私は空を仰いだ。ああ、私はどのくらい耐えられるのかしら…

横ではメリーが未だ荒い息をしながら倒れている。

旅行に行こう！ 温泉は戦いです（後書き）

いくら時系列無視だからっていきなり旅行とかバカなの？死ぬの？とか思わないでください・・・

作者が日数間違えたとか言うドジが原因です・・・ごめんなさい
バレンタインまであと2週間だと思って準備してたら3週間あることに投稿時気づいて作者なみだ目

彼女たちがどうなったのか、何をしていたのかはご想像にお任せします

それでは、少しでも楽しんでいただけたなら幸いです

以下ご意見募集

✂

長め回書き上げて予約投稿しました
一度に投稿することにします

作者の頭は大丈夫です（前書き）

本当は1話になるはずだったこの話
来週次回作とか宣言したから…宣言するから！

気を取り直して人物表

カスガ
霞日 エウナ

吸血鬼 屋敷の主人 日が霞むで霞日

カスガ
霞日 メリー

幽霊 料理担当とか屋敷の管理人 語呂が悪いとか言わない

カナエ
叶 ユメ
夢

メイドさん 家事とか色々 雇われました、ぱちぱちぱちー

作者の頭は大丈夫です

「ですから、物の重さなんてその時々で変わるものです」

そういうとユメは、足場に乗りながら背伸びして棚へと本を入れ始めた。

「…そういうものなのかしらね」
「そういうものなのです」

私は何もすることがないので、棚に次々と本を入れていく彼女の背中をぼーっと見ている。その様子は、まるで小さな子供ががんばっているようで自然と頬が緩む。

始まりはなんてことはない、ただの疑問。

□ □ □ □

いつもテラスに居るのも芸がないという言うことで、今日は寝室のベツトで読書をしていた。別に起きるのがおっくうだった訳ではない…断じてない。

ただ起きて隣の丸机を見ると、そこにはまるで私に読んでほしいかのごとく本が置いてあるではないか。

それなら、もう読むしかないでしょう？つまり動くのがおっくうだった訳ではない、断じてない。

何々…？死亡フラグのさしすせそ？へえ…どこかで見たことあるような内容ね。

私がしばらくの間、何処かで読んだことあるような内容の本を読んでいると、トビラが開いて部屋の中へと誰かが入ってきた。

誰が入ってきたのか興味があつたので顔をあげると、そこには小さい体をした黒髪黒目のメイド服姿の少女が、その両手に数十冊の本を抱えて入ってきた。

ぎりぎりドアに通るように積み上げられた本は今にも崩れそうで、小さい彼女の体をさらに小さく見せていた。というより、あれ絶対前見えてないわよね…

「そんなに抱えてると落とすわよ？」

あまりにもふらふらと動いて危なっかしいので声を掛ける。…そういえばこの子、両手が塞がってるのにどうやって扉を開けたのかしら。

「ジエンガは得意なので大丈夫です」

私が目の前の体の本で隠されている未知なる生物に対して思いを馳せていると、本から感情の起伏のない舌っ足らずな声が返ってきた。いや、実際に出てるのは本の向こう側なのだけれど…

「そつ、ならいいけど…」

それにしても、この小さな体がどうやってただこれだけの本を運べるのかしらね？

「あなた随分力があるのね？」

悩んだら聞くに限る。…ということで、ゆっくりと棚の近くの机に本を置いてあるユメに聞いてみる。

「なんてことはありません、物の重さなど状況次第で変わるもので

すから」

「…つまり？」

私がそう聞くとユメは体をこちらへと向けた。それにしても無表情ね、みんなで仕込んでいつか笑わせてみよう。まずは…

「例えば、ある人が死ねば世界の危機が救われるとします」

私がそんなことを考えているとユメが説明を始めた。いきなり壮大な話ね…自分で振つといてなんだけれど長くなるのかしら？

「そうすると、その人の命の重さは他の人よりも軽くなるということとです」

説明はそれでおしまいとばかりにこちらに背を向けるユメ。お、思ったより短かったわね…別にいいのだけれど、少しさびしい気も「ですから、物の重さなんてその時々で変わるものです」

そういうとユメは、足場に乗りながら背伸びして棚へと本を入れ始めた。

「…そういうものなのかしらね」

「そういうものなのです」

私は何もすることがないので、棚に次々と本を入れていく彼女の背中をぼーっと見ている。その様子は、まるで小さな子供ががんばっているようで自然と頬が緩む。

そうは言ったものの…なるほど、まったくわからん。…というより説明になってないわよね？なんだか上手くはぐらかされた気がする。

はぐらかされてなんとなくむしゃくしゃしたので、ユメの後ろにすばやく近づくと抱きしめてみる。ちっちゃくてやわらかくてあったかいわね、抱き枕にちょうどよさそう。

「エウナさま、どうなさいましたか？」

「あなた、私の抱き枕にならない？」

「エウナさまがそう望むのでしたら」

ユメは抵抗ひとつせずに抱かれている。ふむ…反応が薄いよね。

「そう、それじゃ今夜よろしくね」

名残惜しいが、これ以上抱きついていると離れたくなくなりそうなので離れると読書に戻る。

□ □ □ □

あの後、本に書いてあった死亡フラグのあいいうえおが本当に死亡フラグなのかどうか悩んでいると、食事になった。

いつもと対して変わらない食事が済んだらお茶会になるらしく、いつものテラスへと向かっていた。

テラスへと向かう通路の途中、目の前から巨大なイノシシが足をこちらへと向けてゆっくりとこちらにきているのが見えた。…たぶん誰かに抱えられてるんでしょう、大きすぎて体が見えないけれども。

どんな怪力の持ち主がイノシシを運んでいるのか興味があったので見ると…メイド服を着ていた。

「あんた何て物はんこんでるのよ！」

「…？イノシシですが？」

ユメに向かつて思わず叫ぶ。お、落ち着くのも私、今大切なのはイノシシではない。今大事なのは…

「…随分と力持ちなのね？」

どうやって持つてるのかの方法である。だってこのイノシシ、私と同じくらいの大きさだし。

「なんてことはありません、物の重さなど状況次第で変わるものですから」

そう…なんてこともないのね…

「いや、状況自体で変わるってレベルじゃないでしょう、コレは」納得できなかった。ちなみに普通のユメは洗濯物を持つのでさえるよるよるとするほどである。こんなイノシシ持てるはずなのに…まさか、偽者！？

「そんなことはありません。吸血鬼でさえもが状況次第で人間一人を倒すために数秒でロードローラーを抱え、上空から落としたという話もあります」

それができたのは吸血鬼だからだ、真面目な顔で何を他種族のことを語っている。

「あなたは人でしょう…」

「そんなことはありません、その吸血鬼はロードローラーを持ってきた拳句に敗北しましたから」

何がどう、そんなこともないのだろうか？…というより、そこまでの努力をして負けたのかその吸血鬼は…

「窮鼠猫を噛む、というものです。どんなに弱くても追い詰められると強者に打ち勝つこともある。最強という言葉は絶対の勝利にはつながらないと言ったことですね」

ふむ、そういえば最強の吸血鬼とか言われてたあいつはどうしてなのかしらね？最近噂を聞かないのだけれど…まあ、あいつが簡単に死ぬとは思わないし何処かで生きてるでしょう。

「ところでエウナさま、窮鼠猫を噛むですが、窮鼠猫を甘噛みとすると…どこと無く卑猥な感じがしますね？」

卑猥な感じがしますね？じゃないバカメイドどの辺が卑猥なのよ…私があきれている間にもバカは続ける。

「いったいネズミは猫に何をされてるのでしょうか…」

ふむ、そう言われるとどこと無く…いやいや、待て、これ以上は私の精神が危ない。理論武装しなければ…

ふぁーん

「そんな理論武装りろんぶひで大丈夫か？」

頭の中で黒いスーツを着たメリーが聞いてくる。

「大丈夫だ、問題ない」

私はその問いに笑顔で答えると、意識を現実に戻しユメの話へと耳を傾けた。

以下理論武装は装備とお読みください

「つまり窮地に瀕したネズミは甘噛みという一発逆転の手段に出たのですね」

くっ…

「そのネズミの攻撃に対して猫は反応せざるを得ないのでしょね、一発逆転の甘噛み、効果は抜群だったわけです。ですが猫もただでやられるわけには行きません、自身よりも早くネズミを落とそうと」

ユメの一言一言で理論武装が砕かれていき、私の視界が桃色に染まっていく。私は武器として素数を数えていたのだが、1は素数に入らないという驚愕の事実に気づき、頼りにしていたそれも砕かれた。

<神は言っている、これ以上は書けぬと>

最後の理論武装が砕かれる瞬間、どこからかそのような声が聞こえたかと思うと、私はまた黒いスーツを着たメリーの前に立っていた。

ふぁーん

『そんな理論武装で大丈夫か？』

私の目の前で黒いスーツを着たメリーが聞いてくるので笑顔で返す。

『一番いい理論「エウナさま、聞いてますか？」』

私がそう答えようとした瞬間、目の前のユメがそう聞いてくる。

「ちゃんと聞いてなければダメですよ、では最初から…窮地に瀕したネズミは甘噛みという一発逆転の手段に出たのです」

「え？あ、はい」

どうやら時間が巻き戻ったと思ったのは私の脳内だけだったようだ。そしてまただんだんと視界が桃色へと変わっていく。まずい！話題を変えねば！あ、あれは…チョコレート！？

「それでもやはりネズミの悪あがき、猫は「そ、そういえばユメはバレンタインチョコはどうするのかしら？」」

桃色に変わっていく視界の中、時空を越えて乙女パワーが私へと降り注いだ。そう、そろそろバレンタインである。

「…ばれんたいんちよこ？」

どうやら話題変えは成功したらしい、ありがとう！乙女パワー！

「知らないの？バレンタインデーといって好きなにチョコレートを渡す習慣があるのよ」

本当はお世話になった人も含まれていた気がするがうる覚えなのではないで置いた。

「それは存じませんでした…ばれんたいんですか…」

「ええ、詳しくはメリーや柚香にでも聞いてみなさい、色々知っているはずよ。特にメリーはこういうのに詳しくそうね」

…詳しいはずよね？毎年渡して来てたような気がするし。

「ふむ…ばれんたいんですか」

「どうするのかわかったのだけれど、その様子じゃ決めてないのね？まあ、深い意味はないから気にしないで頂戴。それじゃ私はお茶会に行つて来るわ」

うわ言の用にバレンタインと呟くユメにそう捲くし立てるとその場を去る。それにしてもこの子、バレンタインって上手く発音できないのね。

…少しだけ期待してたのは口に出さしないで置こう。

そう心に誓うと私はイノシシを抱えて何かを考えているユメをおいて、テラスへと歩き出した。

作者の頭は大丈夫です（後書き）

作者の頭は平気です

本気出せば猫とネズミでつらつらと書けそうでしたがさすがに自重

平気ですってば！

私より前に同じ窮鼠猫を甘噛みで投稿している方が居ますが、同時に同じネタで書いただけです

別にネタを盗んだりしてません。してませんってば！いや本当に

それでは、少しでも楽しんでいただけたら幸いです

バレンタインってチョコレート安くなって素敵ですよ（前書き）

1日早いですがバレンタインネタ

チョコレート・・・おいしいですよ

ということ人物表（、、）ノ

カスガ
霞日 エウナ

吸血鬼 金髪ロングの赤目 今日は白ドレス お酒はまあまあ

カスガ
霞日 メリー

幽霊 銀髪サイドポニーの碧目 紅い浴衣 お酒は大好き

カナエ ユメ
叶 夢

メイドさん 白髪黒目 メイド服 お酒はドウダロウ？

ユウカ
柚香

人間 栗色の髪をロングをリボンで束ね 苗字なんて以下略 恋する乙女パワーですべてを粉碎したり

タバミネ スウカ
束嶺 雛歌

人間 起伏の乏しい体系 私わ忙しいんだからね！とのこと 窮鼠

猫を甘噛み 友情出演

バレンタインってチョココレート安くなって素敵ですよ

もうしばらくすれば夕焼けかという不安定な空の下、メイド服の少女が大きなかばんを持って街の中を歩いていて。かばんの中にはあふれんばかりに詰められたチョココレートの包み紙と1冊の本。

少女の白い髪は肩のところで切りそろえているが、耳を隠している両サイドの髪だけは長く胸ほどまである。また少女の顔はかわいらしいのだが、いかんせん無表情なのでまるで人形のようなのである。

「お、今帰るかい？」

その少女が酒屋の前を通り過ぎようとしたとき、酒屋の店主が気軽にそうに少女…ユメへとその声を掛けた。

「はい、もう用事は済んだので」

ユメの方も店主の方と知り合いなのか、店主の声に立ち止まると応答する。

「バレンタインか…どうだい？チョココレートに合ういい酒があるんだが、どうだい？」

ユメは不思議そうに首をかしげると

「なぜボクがばれんたいんだと思ったのですか？」

「そりゃこの時期にそんなにチョコを買ってたら誰だって気づくさ。それで、酒はどうだい？」

「なるほど。お酒はお断りします、それではまた」

ユメは無表情のままぺこりとお辞儀をすると、これで会話は終わりとばかりに歩き始めた。

「ちよっ…ちよつと待ってくれよ」

店主は立ち去ろうとするユメにあわてて声を掛けて止めると

「チョコの良い渡し方があるんだが、興味は無いかい？」

「ちょこの良い渡しかた…ですか？」

その言葉に興味が出たのだろうか、ユメはまた立ち止まると店主のほうを振り向いた。

「ああ、今ならこのチョコに合う酒とセツ」買います」「

ユメは最後まで聞かずに財布を取り出すと店の中へと入って行った。

「それで、良い渡しかたとは？」

「あ、ああ…実はな…（省略）というものなんだが」
「なるほど…そういう渡し方が良いんですか」

ユメは店主の言葉にいちいち頷くと、手に持っている手帳に何かを書き込みお辞儀をした。

「大変有意義なお話ありがとうございました」
「いやいや、こちらこそ毎度あ…ぐふっ」

店主がそう言うってお辞儀をしようとすると、店の奥から女性が飛

び出し店主に向かって飛び蹴りを放った。

「あなた！またユメちゃんに変なこと教えて！」

「ま、まで！大体アレはお前がしたことじゃ……ごほっ」

「少し、黙れ」

女性は倒れている店主に踵落としを決めるとそのままユメの方を向いて

「ユメさん？あんましこの人の言うことをあまり真に受けちゃダメですよ？」

「はい、とても勉強になりました」

「あなたのせいでもたユメちゃんに変なこと覚えたじゃない！」

「それでは私はコレで」

そう言うユメは酒屋から断続的に響く打撃音から遠ざかっていった。

結構長い間話していたのだろう、あたりはすでに暗くなっており、街灯が帰る彼女のことを照らしていた。

□ □ □ □

「おろ？珍しいですねー」

何の気なしにキッチンに行ってみると、そこには持っている本と目の前のチヨコの山とを何度も交互に見るユメさんが居るではないか。料理ができない彼女がキッチンにいるなんて本当に珍しい。

どれどれ？持つてくる本は……誰にでも作れるバレンタインチョコ！ですか。ありきたりな名前ですね……ふむふむなるほど！ピキーンとききました。

「何かお困りですか？私でよければ助けになりますけれど？」

ピーンと来たので声を掛けてみる。つまり！チョコレートを作りたいってことですね！

「メリーさま…実は…この部分の意味がよくわからなくて」

「ふむふむどれどれー？」

彼女の指し示すところを見てみるとそこに書いてあったのは…

「えっと…湯煎…ですか？」

「はい、残念ながらボクには湯煎というものが何なのかかわからず…」

…湯煎がわからなかったんですか。ま、まあみじん切りがわからないと言われるよりはマシですね。この本にみじん切りは載ってないですが。

「湯煎って言うのはお湯で容器の中の物を温めるってことなんですよー」

「はぁ…容器の中を…ですか」

やっぱりわからないですか、しょうがないですね。

私はうつむいて容器の中容器の中と呟くユメさんへと微笑むと

「よかったら一緒に作りましょうかー」

「よろしいのですか？」

「はい、一人よりも一緒に作るほうが楽しいですよー」

ユメさんはしばらく考えると、お願いしますと言ってお辞儀をし

た。

さてさて…ここからが大変です…。

くチョココレート製作中ぐ(ゝω<)ノシく

「…後はそれを型に入れて完成です」

「はい」

ユメさんはゆっくりと慎重に型へと9回目となるチョココレートを流し込む。その姿に私も自然と緊張する。無理もない、さつきチョコレートをぶちまけたのがこの工程だからだ。

バレンタインチョコ作りは予想以上に困難だった。何をしても普段が無表情ゆえにわかりづらいが、ユメさんは非常にドジである。道を歩けば転ぶほどではないが、肝心なところで何処かずれているのである。それはもう、湯煎のお湯に手をつ込むわ、チョコレートを刻めばチョコが何処かへと吹っ飛び、チョコを湯煎で溶かせばボールを吹っ飛ばすほど。

そんなことが今まで続いている、これで緊張しないほうが無理というもの。本人はすごい真面目でそこが可愛いんですけどねー。

私が背伸びしながら一生懸命チョココレートを型に流し込むユメの姿に悶えてる間に作業は終わっただけらしい。

「できました」

「よくできましたねー」

思わず彼女を抱きしめると頭をなでなでする。はう…至福です。

「メリーさま、この後は？」

「うふふー」

「…メリーさま？」

…はっ！私としたことが…いけないけない。

「は、はい！この後はですねー、冷蔵庫で冷やして固めると完成です」

「なるほど」

そう言うとユメさんはゆっくりと冷蔵庫にチョコレートを入れると、ぱたんと扉を閉めた。そしてそのまま冷蔵庫の方を見つめたままびくりとも動かない。

「あ、あのユメさん？どうしたんですか？」

「はい、バレンタイン当日までここで見張っていようかと」

「…ずっとですか？」

「ずっとです。ばれんたいん数日前から当日までは一瞬たりとも気を抜いてはいけないと聞きました」

「…ユメさん、誰にそんなことを聞いたんですか？」

「柚香さまです」

柚香ちゃん…苦勞してるんですね…

思わず彼女の今までのバレンタインに涙が出そうになったが今はそれどころではない。

「ユメさん？ずっと見張ってなくてもいいんですよ？」

「ですが…大切なちよこなので」

「このお屋敷にはユメさんのチョコをとろっつて人は居ませんし来ませんよ？」

彼女に向かってゆっくりとわかりやすいように話しかける。

「メリーさまの分もあるのですが…」

「よし！私が責任を持って守りましょう！ですからユメさんはゆっくり休んでください」

「…よろしいのですか？」

「はい、任せてくださいな」

私はそう言つてユメさんを自室へと戻らせると、冷蔵庫にあらん限りの防備をすると封印した。

「ふふ…私へのチョコ…私へのチョコ…」

よし、お姉ちゃん張り切っちゃうぞー！

□ □ □ □

バレンタイン当日の満月の夜、屋敷のテラスにて一人の女性が本を読んでいる。

少しの風が、赤いドレスを着た女性の金色の髪を月明かりを反射させながらさらさらとゆれている。

女性はそんなことも気にしていないようではらり、ぱらりページをめくっていた。

「つまらないわね…」

私はそう呟きながらも本から視線をはずすことはない。他にするものがないのだからしょうがない。

ユメはというと紅茶を入れるや否や電話をすることで行ってしまった。…一応は暇だという私のためにこの本を持ってきては来たのだが。

「深海の生物大百科なんかでどうしろっていのよ…」

視線の先では見たこともない生物が説明付きで載っていた。しかしここは山の中、深海どころか海すらも縁が薄い場所である。そんなものを渡されれば思わず声も漏れるもの。

しかし他にするものもないので機械的にページをめくっていると、突然後ろから腕を回された。

「私メリーさん、今あなたの後ろに居るの」

私の後ろから声がする。そりゃ抱きついてるんだから後ろに居るわよね。

「…メリー、何してるの？」

「ちよつとエウナさん成分の補給を」

「何よそれ…」

こいつは人を栄養素が何かと間違えているのかしら…

いちいち後ろを向いて相手をするのも癪なので視線を本から外さずに応答する。うわ…これホントに生物なのかしら。

しばらくの間その姿勢のままに読みつづけていると、メリーは離れてここにきた用件を告げた。

「ご飯ができたので食堂までどうぞどうぞー」

「はじめからそう言いなさいよ」

「なんと！今日はバレンタインなのでフォンデショコラです！私が十分に愛をこめて作りましたからおいしいですよー」

「ああ、今日バレンタインだったのね」

「反応薄っ！」

適当にメリーの相手をしながら本を置くと立ち上がる。いつものことだけれど意外と律儀よねこの子。わざわざ本人が来なくても渡す方法なんていくらでもあると思うのだけれど。

「そういえばユメさんはどこですか？姿が見えないですが…ぐおおお！」

メリーはそういいながらスカートの中なんかを覗き込んで来る。当然殴った。

「ユメなら雛歌のところに電話中よ。たぶん途中で会っんじゃない？」

うずくまっているメリーに冷ややかにそう告げると食堂へと歩き始める。

すると電話が終わったらしいユメがこちらへと向かってきているのが見える。

「エウナさま、紅茶のお代わりでしょうか？」

「食事よ。どうせだし一緒に行きましょう？」

「かしこまりました」

ユメはそういってお辞儀をすると私の後ろからついてくる。

「何のお話だったんですかー？」

歩きはじめてすぐ、復活したらしいメリーがユメのほうへと話しかけていた。もう立ち直ったのか…強めにしとけばよかったわね…

「はい、雛歌さまの思い人に彼女ができたらしくその話を少々」

「ほー、そりや大変ですねー」

「後は窮鼠猫を甘噛み等を」

「ふむふむ」

「まて、あんた他人に何教えてるのよ」

「ですから、窮鼠猫を甘噛みについてを」

思わずため息をつく。この子たまには見た目どおりの行動を取ってはくれないのかしら… いや、掃除とか洗濯のときとかは足場を使ったり背伸びをしていて十分子供みたいなのだけねど…

私がそんなことを嘆いている後ろで二人は楽しそうに話し続けた。

□ □ □ □

「ああ…気持ち悪い…」

あの後、食堂でチョコに合うとか言うお酒をユメが持ってきた。このお酒が思いのほか美味しく、またメリーの作ったフォンデショコラとあまりにも合ったのが原因か、飲みすぎたらしい。

気がついたら酒瓶がいくつか転がっている光景は少し恐怖を誘うものね。

そんなことを思いながら少し膨らんでいるように見えるベットの布団をめくると、そこには一系まとわぬ姿のユメが無表情でこちらを見上げていた。

「お待ちしており…」

思わず布団を元に戻すと深呼吸をする。ああ、私酔ってるのね…だからあんな幻覚を…

深呼吸も終わるともう一度布団をめくる。

「お待ちして…」

私は布団を戻すとドアから出ると食堂へと向かった。

「ありゃ？エウナさん、お酒ならまだありますよー？」

「要らないわよ…」

食堂ではメリーが一人でお酒を飲んでいた。どれだけ飲むのよこの子は…

「ふむふむ、お酒じゃないとしたらどうしましたか？てつきりもう寝に行ったものだと思ってましたが」

「ええ、少し酔いが酷いみたいだから水を一杯もらえない？」

私はメリーがどうぞー、といいながら渡してくる水を飲み干す。

ああ、美味しいわ。

「ありがとうございます。それじゃもう寝るわ。お休みなさい」

「あいあいさー、おやすみなさいー」

水を飲んで少し鮮明になった視界のまま寝室へと戻る。これでも幻覚は見ないわね。

「お待ちしておりました」

「…」

何をやってるんだこの変態メイドは…

寝室に戻ってベットをめくるとそこにはさっきと変わらずユメがいた。ただし、一糸まとわぬ状態というわけでは無いようで、サラ

シと下着、そして首にリボンを巻いたという姿で。

どう見ても変態である。特にリボンがきれいなちょうちよ結びになっているところとか何を考えているのかわからない。その表情は少しも恥ずかしがっておらずいつもどおりの無表情なのがものすごくシニールである。

「あなた、何、してるの？」

ゆつくりと、沸きあがる怒りを抑えながら聞いてみる。なんで人のベットに脱いで入ってるんだこいつは…私か！？酔った私がそう言ったのか！？

「はい、エウナさまに渡したいものがありましてこうしてお待ちしております」

どうやら私ではないらしい…が、それよりもまずは

「私は外にいるからまずは服を着なさい、話はそこからよ」
「かしこまりました」

部屋に入って改めて服を着たユメと向き合う。だから何であなたは私のベットに入ってるの…

「それで、渡したいものって？」

ユメの頭でゆれているナイトキャップのぼんぼんに目移りしながらも聞いてみる。

「はい、こちらになります」

そう言うつとユメはベットから抜け出すとラッピングされた箱を手渡してきた。結局出るのね？つまりベットに入ってることに意味なんてなかったのね！？

「人肌で暖めておきました」

「人の心の中を読まないで頂戴…ところでこれは？」

ユメは一言はい、というつと

「ばれんたいんちよこです」

ふむ、バレンタインチョコね。なるほど、チョコレートね。

「ありがと、用件はこれだけ？」

「はい、それではエウナさま、おやすみなさい」

私は顔がにやけない様に注意しながらユメを部屋から出すと、チョコレートを棚へと大切にしまうとカーテンを閉める。

ユメのバレンタインチョコ…いつ食べようかしら…

ベットへと入ると思わす顔がにやけるが誰も見てないからセーフだろう。

お返し…何にしようかしらね。

闇に染まっていく意識の中でそんなことをぼんやりと考えた。

バレンタインってチョコレート安くなって素敵ですよ（後書き）

作者は作る方がいいが渡す相手が家族と友人以外居なかった
自作で食べるの美味しいです

恋人なんて… 恋人なんて…

雛歌さんはこちらから友情出演です

<http://ncode.syosetu.com/n04888q/>

ちよくちよく出てくる誤字チェックしてくれてる友人です
世界観が違うのは電話越しということでした

それでは、バレンタインネタ楽しんでいただけたら幸いです

そのとき彼女は、鬼になる（前書き）

バレンタインネタ追加

元々短編でしたが世界観が一緒なのでこっちになりました

短編時の名前はお友達がきゅり回は甘くないといったのでむしろくしゃして書いたです
消されてますが

ということ人物表

柚香ユウカ

人間 少女 恋する乙女パワーは無敵です

霞日カスガ シュン

人間 想い人 エウナとかとの関係は別の話で

A子

友人 A

B子

友人 B

そのとき彼女は、鬼になる

「えっと…湯煎で溶かして…容器に流しいれる？」

誰にでも作れるバレンタインチョコ！、という本を片手に細心の注意でチョコを溶かす。

そう、バレンタイン！2月14日！1年の中でチョコの売り上げが最高になるあの日のことである。企業の戦略？そんな関係ない！2月14日、それは恋する乙女にとっては聖戦となる日である！もちろん、この私も例外ではなく両想い（だったらいいなー）の彼のことを想いながら戦いに必須の物資チョコレートを作っているのである。事の始まりは1週間ほど前、まだチョコチョコという空気はないが、どこことなくバレンタイン関連の話が少女たちの話題に上ってくる頃…

（以下回想）

（ぽわわわーん）

「そっぴや、ゆずゆずはバレンタインチョコ誰に送るん？」

学校から私の友人のA子とB子（名前が思いつかなかったわけじゃないよ！）と帰っていると、思い出したようにA子が話しかけてきた。

「えっ、あの、その…」

「馬鹿ねA子、柚香にはもう本命の人が居るじゃない！」

「えっ…い、いやちが…」

「へえー、やつぱり春之助に送るんかー」

「あの…だから…」

「ついにゆずゆずの恋も実るのね…楽しみだわー」

『で、チヨコはもう作つたの?』

「あの…まだ…です」

そこで二人は示し合わせたように同時に聞いた。その後も、私は何度か弁解しようとしたのだが、聞き入れてもらえない事は無く、二人は勝手に盛り上がっていった。…なんで私の想い日との事を知っているんだろう?

『そんなの見てればわかるじゃない』

さいですか。

「あの…」

「となるとですな、まずはシュンを捕まえることからですな?」

「うむうむ! そうであるうな! あの春之助のこと、バレンタイなど関係なしに帰るに決まっておる!」

「だから…話を…」

「ふっ…となると、まずは…?」

「ふっ…ですな」

「あっ! まっ…」

そのまま二人で笑い会々と彼女たちは何処かに走り去っていった。方や運動も魔術も万能というスーパーマン(注 女の子です)、方やスポーツこそしてないが戦闘科をの彼女たちのことである。戦いどころか運動、と名の付くものがすこぶるダメな私が

追いつけるはずも無く…

「…行っちゃった」

仕方ないので一人になった道をとぼとぼと歩く。ああ…陽光が暖かい。今はおひさまだけが私の味方。そういえば彼もおひさまの様な匂いだっけ…。そんなことを思い出すと顔が熱くなった。

それにしてもバレンタインか、去年も一昨年もチョコだけは作ったのだけれど…そう、チョコだけは作ったのである。

彼女たちの言っている様に私には想い人が居る（見ればわかるらしい、ガッテム！）。今年から一緒のクラスになった男子で、必修授業はサボるわ、たまに学校に出てもすぐに帰るわ、で最初の頃は少し恐いと感じたのを覚えている。

そんな彼をどうして好きになったのかと言うと…以下略…といったことがあったから…（ここは回想です、回想の中に回想を入れないでください。筆者が死にます。）

そんな事があってから、私は過ぎていく毎日の中、無意識に視界の中で彼を探していることに気がついた。そのことに気づいたとき、私は自分が恋しているのを自覚したのである。キヤー。

～回想終了～

はっ…ふと湯煎に掛けているボールを見るとチョコレートは完全に溶けた様で、どろどろとした状態になっていた。

は、早く用意しておいた型に…あう！足ぶつけた！

スローモーションの様に倒れていく視界、飛んでいくボール。そのとき、自分の中で何かが切れた。次の瞬間、私は床に手を着きながら綺麗に前転をするとチョコの入ったボールを無事キャッチ！バレンタイン数日前、恋する乙女は超人にもなるのである。この程度

…造作も無い！はうっ！壁に頭ぶつけた！

じんじんと痛む足と頭を気遣いながらも、チョコの無事を確認するとほっと胸を下ろす。早速、慎重にハート型の入れ物にチョコを流し込み冷蔵庫で固める。聖戦まであと数日、何があってもこのチョコは守らなければならないのである。

ここからバレンタイデーまで、少女のチョコレートを守るための壮大な戦いが始まるのだが、時間が押しているのでここでは割愛する。

乗り切った…私は乗り切ったのである…

何の陰謀か策略かわからないが、本命チョコを襲う連続した事件の数々。無事チョコを守りきり、バレンタインデーを迎えたとき、少女は真っ白な灰となっていた。

…真っ白な灰になりすぎて寝坊をし、少女が起きて携帯で時刻を確認すると夕方5時になっていた。え？夕方5時！？

目の前の時刻を信じることができずに、何度も携帯を閉じたり開いたりするが、5時は5時、このとき少女が時間を操れたなら間違いなく使っていたであろう。

あまりにも高速で閉じたり開いたりを繰り返すので携帯のアンテナがその風圧に耐え切れずに吹っ飛んだ。好きだったぜ…お前のこと…、吹っ飛んだアンテナが携帯へと告げた。いい…やつだったよ…それがあんなことに。と後に携帯は語った。

だがしかし、こういうときこそ冷静になるべきである。もしかすると通学路のどこかで彼との運命的な出会いがあるかもしれないではないか！そう思いなおすと少女は靴を履き、家を飛び出した。ポジティブである。だがしかし、着替えを忘れて居るので服装はパジャマのみである。

走りながらも時間が戻るかも知れないので、携帯をパカパカすることだけは忘れない（ちなみに筆者は暇なときとかによくします、

意外とやめられません）。何度も言うが、5時は5時である。時間は戻らない。あ、5分過ぎてる。

携帯をパカパカとしていると少女はあることに気づいた。A子からのメールのようである。本文は

『放課後 学校 教室二テ 待ち人 アリ スグ、キタリシ』

なぜ片言？だが重要なのはタイトルの部分、そこには少女の愛しの彼の名前が載っていた！

少女は走った。わき目も振らずに走った。銀行の前辺りで、ヘルメットを被った黒いライダースーツ姿の人を轢いた気がするが、それも気にせずに走った。パジャマのままです。

今宵はバレンタイン、チョコを渡すためならば恋する乙女は鬼にもなる。

余談であるが、彼女は翌日の新聞の『銀行強盗逮捕！捕まえたのは謎のパジャマ姿！』という見出しが載っていることを知り卒倒するのだが、それはまた別の話である。

キキーン

学校の前に着くと少女は急ブレーキを掛けた。…おおそ人体が発してはいけないような音が少女の靴から鳴り響いているが、気にしてはならない。また、止まりきれずに学校の門が少し壊れているが、気にしてはならない。今の少女は鬼なのである。

さすがに切れている息を整えとも校舎を見上げると、残っている生徒は居ないようで、ぽつんと夕日に照らされた校舎があるだけであつた。

確か…教室にいるって…

ちなみにそんなことはドコにも書いてはいない。少女の第六感が時空を飛び越え、少女へとそう告げるのである。

なぜか手に持っていた櫛で髪を整えながら教室まで登ると、深く息を呑むと扉を開けた。

この少女、もはや何でもアリである。だが、今宵はバレンタイン、さらに乙女パワーのみなぎっている少女にとって、その程度は造作も無いこと。だが、未だに己の服装には気づく気配はない。

教室の中を見渡すと、ところどころ古びた机が夕日に照らされているだけであり、乙女パワーによって人間離れしている少女の瞳でも、目的の人を見つけることは出来なかった。

当然…ですね。

時計を見るともう5時30分である。忙しい彼がそんな時間まで残っているとは思えない。それでも、もしや？と思ったのだが、どうやら居ないようだ。

結局今年も渡せなかったな…

「まったく…何時まで待たせるんだ」

見るからに落胆した様子で扉を閉めると。突然後ろから声を掛けられた。

「えっ…？」

間違いない…この声は彼の…

どきどきと鼓動する心臓を押さえながらゆっくりと振り向くと、そこには愛しの彼が居た。

「あ…あのっ…！その…！」

渡して言わなきゃ、好きでしたと、付き合ってくださいと。言わなきゃ！

がんばれ少女！恋する乙女パワーは今臨界点まで達している！

「っ！？お前平気か？顔真っ赤だぞ！」

「あ、あのこれ…！」

そういいながらチョコを差しだそうとすると、彼に突然体を抱きとめられた。どうやら乙女パワーの出しすぎで倒れたらしい。

「へ？わっ…あわわわわわわわわ」

「いいから黙ってる！一番近いのは…」
「たく、寮まで連れてくしかないか…」

少女の前には彼の顔、彼からはまるでおひさまのような匂い…。

「うにゅう…」

「っておい！寝るな！おいっ！」

そのときの少女の顔はとても安らかであった。

ん…？ここはドコ…？えっと…私は確か…

がばつと目が覚める。見渡すと見知らぬけれども知っている部屋、女子寮…？

鮮明になつていく意識の中で、倒れる前の記憶を思い出すとぽんと火がついたように赤面する。

「わわわわわたし…なななななんてこと…」

「起きたか、ということは体は大丈夫だな？」

突然台所がある方から声がしたのでビクッとしてそちらを見ると、そこには彼の後姿があった。

「あ…あの…」

「まったく…体調が悪いなら無理するなよな、用があるのなら別に明日でも…」

今年のバレンタインは今日いっぱい、明日ではダメなのである。
あわあわとしながら隣の時計を見ると12時を回っている。あれ…バレンタイン…終わってる？

信じられないものを見るように時計を見つめていると、突然目の前にれんげが差し出された。

「ほら、お粥、食えるな？」

少女再びあわあわタイム突入、これはすなわちあーんということであり、つまり恋人同士のするようなそういうことである。それにしてもこの男に羞恥心という文字は無いのだろうか？

お粥を全て食べ終えるまで少女の羞恥心やら乙女パワーやらがあーん攻撃に耐えたのは、もはや奇跡とも言える。味はわからなさそうだが、幸せそうである。

「食べたならさっさと寝ろよ、俺は別のところで寝てくるから」

あ、制服はそこな。そういつて部屋の隅を手で示すと、彼は扉から出ようとする。どうやら自分は他で寝るのでここで一泊していけということらしい。変なところだけ用意周到な男である。

「あ、あのっ…！」

そこまで大きくない少女の声、それでも少女にとっては精一杯の大きさの声。言わなきゃ！彼が出て行く前に！

「ん？何だ？」

「あ、あの…チヨコ」

「何だつて？」

肝心なところを聞き逃す男である。さっきのあーんといい、自分の部屋に止めるといい、狙っているのではあるまいな？

「あ、ありがとうございます…」

そんな程度気にするな、そういつて笑うと彼はドアから出て行った。

「結局…チヨコ…渡せなかったな…」

暗闇の中おひさまの匂いのする布団にもぐりながら呟く。

でも、チヨコを渡すよりもいい体験できたな…

少女はさっきまでのことを思い出すと顔を赤らめ、彼の布団を顔まで引き上げる。

どうやら今日は少女にとって眠れない夜になりそうである。

余談であるが、彼の部屋から出てきた少女を同寮の男子が発見し、大騒ぎになるのだが、友人であるA子とB子の持っていた証拠によって事なきを得た。

その証拠を見て少女があわあわしたのは言うまでもない話。

そのとき彼女は、鬼になる（後書き）

バレンタインですから2つ投稿してもいいですよね！
ごめんなさい短編をまた投稿するとかしてごめんなさい

柚香さんが惚れた理由に関しては次の長編辺り？

あなたの夢はなんですか？ 現実編（前書き）

初の長め回だよ！

2分割だよ！

書いてる間作者は死にそうだったよ！

長編というほどは長くないから名称に困ったよ！

長め回です

いつもとは考えられない長さなので見苦しい点もあるでしょうがお見逃してください

ということとで人物表

登場人物表♪

霞日 カスガ エウナ

吸血鬼 肉体労働担当 主

霞日 カスガ メリー

幽霊 考え担当

叶 カナエ 夢 ユメ

メイド 担当は特に無し

柚香 ユウカ

人間 女子校生 依頼主

霞日 カスガ シュン

人間 エウナとは育て育てられの関係

会長 いいんちよ

生徒会長 我輩は会長である、名前はまだない

ジェントルマン

主にポンコツ

最後までお付き合いいただけたら幸いです

あなたの夢はなんですか？ 現実編

「今日という今日は許せません！」

「うるっさいわね…敵として来たんだからばこぼこにしても何の問題もないでしょう」

「あれは和解のジェントルマンかも知れないじゃないですか！花束も持っていましたし！」

「和解するやつが爆発する花束を持ってるわけないでしょう」

「爆発する前に壊したじゃないですか！」

「結果オーライね、ポンコツはいつまで経ってもポンコツだったと」

もう日付も変わろうかという時間、ある屋敷の庭にて二人の女性が言い合っていた。片方の女性は金色の長い髪に純白のドレス、もう一人の少女は緑色の浴衣に身を包み、少女の動きにあわせるようにサイドポニーに結んでいる銀色の髪がまるで抗議をしているかのように、揺れている。

言い合う二人の近くには爆発したのだろうか、まだもくもくと黒い煙と炎を立ち上らせているドラム缶のような何か。そしてそのドラム間の傍で黒髪でメイド服の少女がいいあう二人を面白そうに眺めていた。まあ、少女の表情は終始無表情なので本当に面白がっているのかどうかはわからないのだけれど。

「もう…許しません！」

「やる気？なら相手するわよ」

言い合いもそろそろ実力行使になったのだろうか、浴衣姿の少女がどこからか大きな斧を取り出すとドレス姿の女性へと向けた。ところで戦いがもし居たら頭は禿げてますよね…不毛って言いますし、女性の方はまるでめんどくさそうに少女のほうを睨むだけで、構

えてはいない。

「エウナさま」

「何？今ちよつと忙しいんだけど」

メイド服の少女から言われる言葉に、エウナは目の前の少女…ユメから視線を外さずにそう応えた。

「はい、ですが…お客様が来ました」

「客？」

「お客さんですか？」

二人はほぼ同時にそう言うつとユメが指し示すほうを見た。

「え…えと…あう…」

二人の視線の先にはまるで萎縮するようにしている制服姿の少女の姿があつた。少女は栗色の長い髪を水色のリボンで束ねており、あうあうとしている姿はまるで小動物のようである。

□ □ □ □

「どうぞ、粗茶ですが」

「え…あつ、はい！ありがとうございます」

目の前の少女はユメの出す湯飲みに驚いたようにして返事をした。…ところで何で出すのが紅茶じゃなくて緑茶なのかしら？明らかにこの屋敷洋風なのだけれど…。

話があるといった少女を応接室へと案内すると彼女は屋敷の中が珍しいのか興味深さそうに周りを見渡していた。

早く！話を振って！このままだと進まないから！

「…それで？こんな時間に何のよう？」

こうして見つめているといつまで経っても話が進まないのだからから振ってみる。天の声が聞こえてきたからじゃない、断じてない。

「え…？あの…ごめんなさい」

「いや、あやまられても…」

そう言う彼女はうつむいてしまった。困ったわね…本当にこんなとこまで何しに来たのかしらこの子。

実際この屋敷がある場所は簡単に来るようなところではない、歩くと片道1時間以上とか普通に掛かるし…こんなところ歩いて下りしてるのは我が家のメイドくらいだろう。

そんなことを考えているとメリーがケーキを持ってきてテーブルへとおいた。緑茶なのにケーキなのね…

「ダメですよー、エウナさんは強面なんですからそんなに睨んだら」

「誰が強面よ誰が」

「エウナさん」

「ほづ…殴られたいみたいね…」

「それが拳を振りぬいてる人の言うことですか！」

ちっ、避けやがった。まあ、それはおいといて。

「私はエウナ、この屋敷の主よ。…とりあえず名前くらい聞かせて

くれないかしら？」

「エウナさんの愛人の、メリーさんですよー」

愛人って何…まあ、このくらい信じる人なんて。

「あ…愛人さん…？」

「信じてるじゃない…あなた嘘ついてるんじゃないわよ！」

「ま、まさか信じる人がいるとは思わず…」

「エウナさまの愛人のユメです」

『あなたはメイドでしょう！』

ユメの発言に二人で叫ぶと思わず頭を抱える。何を言ってるんだこいつは。無表情だからほんとつぽく聞こえるのがまた紛らわしい。

「これでこちらの自己紹介は全部、あなたは？」

いつまでも頭を抱えていても始まらないので話を進める。正直これ以上長引かせると何をするかわからない…

「あ、はい…えと…その…柚香…です」

どうやらそれで自己紹介は終わりらしい。ま、まあ名前がわかっただけでも前進…よね？

「それで、私に話って？」

「え、えと…私の学校で…」

く話し中く

「…つまり？」

まったくわからなかった。もつとはきはきとは言わないけれどつかえずには言えないのかしら…

「つまり学校に事件があるから解決してほしい、ということですね」

言っていたことを頭の中で整理しているとユメが話を纏めてくれた。なるほど、そういうことだったのか。

「警察行け」

「え…？」

「ダメですよー、話を聞くなりそんなこと言っちゃー。せっかくエウナさんのところに來たんですから！」

… いったい私にどうしろと？

「事件がおきたんでしょ？なら警察に行くのが一番手っ取り早いじゃない。何で私のところに来るのよ」

「嫌ですねー、自分で考えない人って…ユメさんはこんな人になっちゃダメですよー？」

「はい、こんな人にならないように誠心誠意気をつけます」

「…喧嘩売ってる？売ってるわね？」

「どうどう…ほらー、エウナさんがそんなこというから柚香さんが怖がってますよー」

メリーに窘められて握っていた拳を解く。覚えてなさいよ。

「…なんで私のところに来たのかしら？」

「えと、クラスの男の人が…」

…なるほど、よくわからない。

「とりあえず今日はもう遅いから泊まっていきなさい、家族に連絡はできるわね？」

「あの…いいわね？」

なにやら言っている彼女に押し切ると会話を切り上げた。このまままだいつまで経っても終わらない気がしたから。明日は休日よね？確か。

「ユメ、部屋の準備は？」

「すぐにできます」

「メリー、お風呂お願い」

「あいあいさー」

柚香はというと指示を出し終わると連絡していたのか、携帯をしまい何かいいたそうにこちらを向いていた。

「あの…」

「何？」

「いいんですか…？」

「今日はもう遅いし明日ゆっくり話しましょう。その上であなたの頼みを聞くかどうか決めるわ」

「あ、ありがとうございます」

そう言うつと柚香はお辞儀をするとユメについていった。

「そうと決まったらもう寝なさい。お風呂はもうすぐ沸くから」

応接室を立ち去る彼女の後姿にそう声を掛けると冷えた緑茶を啜

る。明日ね…後でユメにどんな話だったのか聞いておこう。

↓以下ユメから聞いた事件の概要↓

学校の生徒が次々と寝込んでおり、学校に来ている生徒はもうほとんど居らず、彼女の友人も寝込んでしまっているとかそんな話らしい。

寝込んでしまった人はまるで夢を見ているかの用に安静にしているが、何もしていないのに突然傷が出来たり、突如血を吐くといった奇怪な死に方をするとか何とか。

傷がなくとも体がかなり衰弱をしている人もおりかなり拙い状態らしい。

警察は事件性ありと見て捜査をしているが難航、ほとんど当てにはならないとか。

私ののところに来たのは普段は学校に來ていないクラスメートの男子が何があつたのかを聞くと、解決したいならここに行けという話をされ、藁にもすがる思いで来たとか。

まったく…私にどうしろって言うのよ。

□ □ □ □

私たちの乗っている車のヘッドライトが暗い山道を切り裂いていく。すでに日は暮れており、辺りは闇が支配し始める時刻。

「それにしてもよく受ける気になりましたねー」

運転をしているメリーがなんともなしに話しかけてくる。

「受ける気って…どういう意味よ？」

「エウナさんならてつきり断るんじゃないかって思ってたんですが」

だって面倒でしょう？とメリーはこちらに笑いかけて来た。…一応言っておくが現在彼女は山道を運転中である。そんな状況で隣を見ればどうなるか…

「ちょっと前！前！」

「ん？おわわわわ！」

道を逸れて素敵な世界にダイブしそうになった車が慌てて現実へと帰還する。危なく別の世界の住民と出会ったところだった。私はまだ他世界へと旅立つ予定はないわよ。まあ、今後もないでしょうけれども。

「まあ、正直なところかなり面倒ではあるわね」

特にすることもないので、私の膝の上で寝言を言っているユメの黒髪を撫でながら話を続ける。…寝言を言うときも表情ひとつ動かさないこの子はいったいどんな夢を見るのかしらね。

「んう…エウナさま…」

「よく眠ってます？」

「ええ、ぐっすり。あとのくらい？」

「そうですねー今は大体半分くらいでしょうかー」

半分ってことは後30分程度ね。…それにしても車での移動時間と徒歩の移動時間がほとんど変わらない山道も変だけれど、主の膝枕で眠るメイドも十分変よね…

あどけない少女の様に眠るユメを眺めながらそんなことを考える。

いや、この子の見た目はどこからどう見ても少女なのだけれど。普段から表情というものを見たことがないからあまり見た目相応に見えないのよね…

「それにしてもエウナさん、面倒なのに受けたんですか？」

しばらく車のエンジン音と寝息だけが車内に響いていたが、メリーから終わったと思っていた会話がまた始まった。メリーの話がこちらこちらに飛ぶのはよくあることなので、特に気にすることはせず対応する。

ああ…眠くなってきた。吸血鬼らしくもない早起きなんてして彼女を送ったせいか、体が非常にだるい。そういえば話をしに来たあの子、名前なんて言っただけ…小動物チックでユメにやたら意識が飛んでいたのは覚えてるのだけれど。

「まあ見てみるくらいならいいんじゃないの…？…眠い、着いたら起こして頂戴」

私の言葉に彼女は何て言ったのだろうか。おそらくわかったとかその辺りの言葉を言ったのだろっけれど、薄れていく意識の中では判断がつかなかった。そういえば私は何で彼女の願いを聞いたのだろっ…。

□ □ □ □

「エウナさま、起きましたか？」

「ん…」

ユメの言葉にゆっくりと意識を蘇らせると、なんだか体が上下に揺られている感覚が心地よく意識がまた眠りに付きそうになる。

寝ぼけ眼で辺りを見渡すとどうやら並木道をゆつくりと移動しているらしく、次の生命のために裸になっっている木たちが並んでいるのが見えた。そしてなぜか私の目の前に見える黒髪の少女の後頭部。ふむう…？

「はい、メリーさまは車を置いてくるとのことですよ」

きよろきよろとしている私に何かを感じたのかユメが説明してくれる。ふむ、メリーは車をね…

「ところで体が上下に動いているようなんだけど何か乗り物にでも乗ってるの？」

「はい、乗り心地はいかがでしょうか？」

乗り心地… 乗り心地…

「悪くないわね」

「ありがとうございます」

なんだか体があつたかいし柔らかいしで本当にいい乗り心地ね…ん？あつたかくてやわらかい？

そこまで認識した辺りで周りの木よりも一足お先に意識が活動を始める。

まだ頭が動いてないわね…よし、まとめましょう。目の前にあるのはユメの後頭部で視界は上下に揺れている、速度はそれほど速くなく歩く程度り速さ、私の体は何か柔らかくてあつたかいものに触れており、お尻には誰かの手。ここから導き出される答えはすなわち！

「…ユメ？」

「何でしょうか？」

「何で私を背負ってるの？」

そう、間違いなく背負われているのである。つまりおんぶである。特に大事なことはない。

「エウナさまが到着した段階でもまだお目覚めにならず、そのまま起こすのも申し訳なく思い、ボクがおんぶして現場へと向かうという事になりました」

「そこは起こしてほしかったわね…」

「はい、次があれば善処します」

思わず呟く。まあ私が起きなかったのが原因だから良いのだけだ。問題があるとしたら。

「まあ、ありがとう…ところでユメ？」

「何でしょうか？」

「いつまで私を背負っているつもりなのかしら？」

そう、問題があるとしたら私がまだ背負われているという事実である。もう起きたのだから背負わなくても自分で歩ける訳で…というかこの状況は色々とまずい。

実のところ我が家の財政はほとんどが貢物に頼っているところがある。もちろん他にも手段はあるけれども…一番は貢物であろう。

街の人は貢物をする、代わりに私はお祭りの時や有事のときに守ったり手伝ったりといったことをする、持ちつ持たれずの関係が昔から続いているわけで…

つまり街の人から見ると私は多かれ少なかれ慕われており、また昔ほどではないが畏怖の対象なのである。その私が小さいメイドに背負われてるなんて状況を見られた日には…私が積み上げてきた大

切なものが崩れるのである。主にイメージとか、カリスマとか。その他もろもろが。それは出来るだけ避けたい事態である。いやホントに。

私がそんなことを考えている間にも視界はゆっくりと進んでいる。って！

「いや降ろしなさいよ！」

「…なぜでしょうか？」

なぜ？なぜといったか！？私が聞きたいわよ！というよりさっきの私の質問スルーしたわねこの子

「いや、私もう歩けるし」

「はあ…？そうですか」

「…つまりあなたは降ろす気がないと言うことね？」
「……」

そんなやり取りをしている間にも私の足は地に付くことなく視界はゆっくりと進んでいる。そう、そういうつもりなの

「ところでエウナさん、カチカチ山という話はご存知でしょうか？」

実力行使まであと数秒というところでユメが話を振ってくる。

「…？ええ、知ってるわよ」

カチカチ山…確か狸が燃える話だったわよね？

「一応説明しますが。カチカチ山という山でタヌキは老婆を背負います」

あれ？そんな良い話だっけ？

「その後背負われた老婆はタヌキに食べられてしまうというお話です」

…ぜんぜん良い話じゃなかった。

「…性的な意味ではないですよ？」

「知ってるわよ！」

「スケベ…」

「待ちなさい！どうしてそうなったの！？」

何を言い出すのかと思えばこのメイドは…

「ところでエウナさま」

「何よ？」

「カチカチ山に例えるとボクがタヌキでエウナさまが老婆ですね」

「…まあそうなるわね」

「つまりエウナさまはボクに食べられなければいけないということですね？」

「…ここはカチカチ山じゃないしあなたはタヌキでもないでしょう」

私が老婆かどうかは置いておく。人間観算にするととくに死んでるレベルだし。

「…お肉な意味ではないですよ？」

「知ってるわよ！」

ちよっと待って…肉的な意味じゃないってことはつまり？

「…スケベ」

「待ちなさい！どうしてそうなったのか説明を！」

「エウナさま、残念ながら性的な意味でもありません」

ユメは悲しそうに首を横に振りながらそう言った。こいつは…
私がこのやるせない怒りをどこにかしよつとしている間にも視界はゆっくりと進んでいく。って！

「早く降ろしなさいよ！」

「…ちっ」

「ちっ」て何よ「ちっ」って！気が付けばもう学校見えてるじゃないの！

「エウナさま、あまり暴れないください…揉みますよ？」

「揉むって何よ！とにかく降ろしなさい！」

まずい、非常にまずい。今までは時間帯もあつて誰にも見つからなかったからよかったものの…学校に着いたら確実に見つかる！依頼にきたあの子とか居るし！

「…お前ら何してんだ？」

「これはシュンさまに柚香さま、こんばんわ」

「あ、あの…こんばんわ」

見ると学校の校門で待っていたらしい、制服姿のシュンと柚香がこちらを怪訝そうに見ていた。終わった…。私の大切な何かが終わった…

□ □ □ □

「死にたい…」

「おお…これはこれは」

「見ただけで何かわかるのか？」

「まだなんともいえないですが…とりあえずは誰か学校に詳しい人と校内を案内してもらえませんか？」

「ああ、わかった」

ユメから降ろされた私は一人うずくまって校庭に一人「の」の字を書いて呟いていた。

「やっぱりシユン君がけしかけたんですかー」

「ああ、のんびりとは出来なさそうだったからな、姉さんたちを動かすのが解決に一番手っ取り早いだろ。…それで事件についてはどのくらい知ってるんだ」

私の隣ではいつの間にか居たメリーとシユンがなにやら熱心に話しており、その内容をユメが片手の手帳にメモを取っている。

「死にたい…」

「あ、あの…大丈夫ですか？」

あまりにも私の姿が惨めだったのか柚香が心配した表情で話しかけてくる。ああ、私の心配してくれるのはあなただけよ…。でも今は何よりも…

「今は放っておいて頂戴…」

「え、あの、でも…」

「柚香さん、エウナさんを心配してくれるのはいいですけど今は放

っておいてあげてください…見られていろいろとショックなんですから」

「はい…」

こちらに気づいたメリーが柚香を遠ざけてくれる。ところで…

「メリー…」

「はい、何でしょうか…」

メリーを呼ぶと彼女はまるで労わる様に私の背中をさする。

「あなた…見てたのね」

「はい…先回りしてたんまりと堪能させてもらいましい！」

私は背中をさするメリーの手を掴むと思いつきりねじ上げる。

「痛い！痛いです！折れちゃう！折れちゃうから！」

「そう…見てたのに何もなかったと…」

「ま、待ってください！何もなかったわけでは！動かないで！痛いですから！」

メリーの手を捻じ曲げたままゆっくりとユメたちの方を向くと柚香が悲鳴を上げた。

「ひ…」

「ねえ…私たち少しお話してくるから待っていてくれない…？」

「は、はい！」

「いい返事ね…それじゃちょっと行ってくるわ…」

そっぴい残すとゆっくりと校舎裏の方へとメリーを引っ張ってい

く。…五月蠅いわね、黙らせるものは…

「…それじゃ帰ってくるまで話の続きをするか」
「はい」

「あ、あの？」

「ん？何だ？」

「あのままで…いいんですか？」

「ああ、アレね。いつものことだから気にするな」

「そ、そうなんですか…」

「それで犠牲者なんだが…」

□ □ □ □

メリーとの肉体言語はなしあいから戻った後、とりあえず学校内を探索する
と言うことになって見て回ってはいるけれど…

「見事に誰も居ないわね…」

すでに一般教室はあらかた見て回ったが生徒どころか教師すら居ない。大抵は部活、とか残業、とかで残ってるものだと思うのだけれど違うのかしら？

「確かにだーれも残ってませんねー」

メリーも不思議そうに辺りをきょろきょろと見渡すと隣に居る柚香に聞いてたりしている。

「何でも放課後残っちゃいけないとかで…」

「ほえー…何か理由があるんでしょうかねー？」

「ごめんなさい、そこまでは私も…」

ふむ、残っちゃいけない…ね。

「…校内で行方不明が出たんだよ」

色々と理由を考えているとシユンがポツリと呟いた。

「行方不明者？」

「ああ、少し前に生徒が5人と教師が1人放課後に連続で居なくなつてな。それで放課後はほとんどの生徒が帰ってるんだ」

とはいっても今は休校状態なんだが。そういつて自嘲気味に笑うシユン。その姿は何処かさびしげな気もするけれども…私の気のせい？

それにしても休校だったのね、知らなかった。ユメもメリーも学校の現状は知っているのか特に反応しない。…次からは話をちゃんと聞いてよう。

ん？でもそうなるん？

「何であんたら制服なわけ？」

「何でつてそりゃ、学校で私服だと目立つんだよ」

「ほえー…そうなんですかー。ということは柚香ちゃんもおんなじりゅー？」

「えー!?あの…は、はい」

そうか…私服だと目立つのか。それにしてもこの子噓が下手ね…苦勞しそうだね。

「あ、あのっ！そろそろ生徒会室です」

私が柚香の将来に思いを馳せていると、慌てた様に指差して言った。見ると哀愁漂うドアの上にはかすれた文字で生徒会室と書いてあるプレートが張ってある。∴人居るの？

「∴人、居るんですか？」

「た、たぶん∴」

「うちの部室の前で何してるんだ∴？」

私たちが誰が突撃するかで話し合っていると、後ろから声が掛けられた。後ろを振り向くと、そこには制服をきちつと着ているめがね姿の短い茶髪の少年が居た。

「おおー、いいんちょ。相変わらず不健康そうな顔してるな」

「誰かと思えばシュンか。相変わらず辛気臭い顔してるな。あと会長だ、委員長じゃない」

そういつてシュンは後ろの少年と腕を組み合った。無駄に息が合ってるのね∴

委員長、基会長は腕を振りほどくと怪訝そうにこちらを向くと

「それでうちに何か用ですか？」

警戒されてるわね。まあ部外者が部室の前に居たら誰でも同じ反応か。ちなみに柚香はいつの間にか私の後ろに隠れる様にしている。こら、服を引っ張らないの。ユメも参加しない！

「簡単な用なんです。いいんちょさんにいくつが質問がありましたー」

私が後ろ手で静かな戦いをしている間にもメリーが話を続けており。

「なるほどー、有意義なお話ありがとうございます」

「いえ、捜査に協力できたなら幸いです」

質問も終わったのだろう、お互いに例をして会長は去っていった。何を言っただのかまったく聞いてなかった。ああ、そういえば。

「ああ、君」

「…？」

なんとなく声を掛けて呼び止めると。

「体、早く良くなるといいわね」

「…ありがとうございます」

そう言つと彼はそのまま振り向かず階段を下りていった。

「どう？有意義な話は聞いた？」

魔法関係の実践授業をするという特別校舎へと移動している最中、メリーに聞いてみる。後ろではシュンとユメが柚香に特別校舎とは何なのかという説明をされている。…シュン、あなたここの生徒でしょう。

「んー、微妙ですねー…いいinchよさん嘘を付くのが上手いんですから…そういえば、最後になんであんなことを聞いたんですか？」

「最後？」

「体がどうとかってー」

ああ、アレね。

「特に理由はないわよ。ただ彼から消毒液の匂いがしたから」

「消毒液？」

「そう、あの病院特有のあの匂い」

「ふむう…」

「何か閃いた？」

「んー、考え中ー」

そのまま黙り込むメリー。話し相手が居なくなっていることがなくなった私は、渡り廊下の窓ガラスから月が見えないかどうかがんばってみる事にした。

無理ね…今日は寒いからさぞきれいな満月が見えると思うのだけ
れど…

□ □ □ □

「ここで最後…です」

そういいながら柚香は鍵を使って特別校舎の一室を開ける。

「ここで最後なんですか？向こうにまだ部屋がありましたけど…」

「あそこは…開かないんです」

「ほうほう、開かないとな？」

「はい、何でかはわからないんですがどうやっても開けられなくて…開かずの教室とか呼ばれてるんです」

開かずの扉という言葉をつれしそうに聞くメリー、なにやら嫌な

予感がした…

「ねえエウナさ「ほら、ここで最後なんだからさっさと調べるわよ」

何か言いかけた彼女の言葉をさえぎってせかす。教室内は机と教壇、それに黒板があるくらいで一般校舎の教室とほとんど変わらない。唯一違いがあるとしたらドアの上の部分に鳥居のような記号が付いてるだけ。…どの辺が特別なのかしらね？

「これは…」

「どうしたの？ユメ」

「はい、ロッカーの中からこのような物が」

ユメが取り出したのは一体の人形だった。人形は覆面のようなものを被っており、片手にはハンマーのようなものを持っている…何、これ。

「人形ですか」

「どうでしょうか？」

「ん、んー…特に関係もなさそうですし置いておいていいんじゃないでしょうか？」

「わかりました」

そう言うつとユメは黒板横の棚の上に人形を置いた。え？何でそこに置くの？ロッカーに戻せば良いじゃない。いや、向きとかどうでもいいから、お願いだからわざわざこっちに向くように置かないで…。

ユメは置いた人形を満足そうにして見るとさらにクラゲの人形を隣に…

「ちょっと待ちなさい」

「何か？」

「あなたその人形どこから出したの!？」

「…? ロッカーですが…」

「クラゲのほうよ!」

「頭の上にありましたか…?」

え? 頭の上?

周りを見渡すとメリーたちが可愛そうなものを見る眼でこつちを見ていた。え? 私が気づかなかっただけ?

「エウナさん…」

メリーが悲しそうに顔を伏せて近づいてくる。

「メリー…」

「あなた疲れてるんですよ…」

「…」

どうやら私が気づかなかっただけらしい…

「さてと…ここも収穫なしだったがどうする?」

場の空気を変えるようにシュンがメリーに言った。

「そうですねー…とりあえず開かずの教室というものに行ってみましょうか」

「ん? あそこは開かないんじゃないのか?」

「まあまあ、物は試しですよ」

そう言うとメリーたちは部屋から出て行く。

「エウナさま、置いていかれますよ？」

「あ、ええ、今行くわ」

軽く放心していた私はユメの言葉に意識を取り戻すと慌ててメリーたちの後を追う。

「開かないの？」

「ですねー、何か魔術が掛かってるみたいです」

私がドアの前に付いてメリーに話しかけると彼女はドアを叩いたり引っ張ったりと色々試しながら、そう答えた。

「そう、ならしょうがないわね」

そう言うとはきはきびすを返す。うん、残念だけれど開かないんならしょうがない。本当に残念ね。

「ねえ、エウナさん」

「…何？」

「ちよーっとお願いがあるんですが」

嫌な、予感がした。

「お願い中」

私はメリーのお願いを聞くために開かずの教室の前に立つと拳を振りかぶる。はあ…結局はこうなるのね…

「がつっーんとやつちゃってください」

「シユン、危ないからユメと柚香連れて離れてなさい」

「おうよ」

近くに立っているシユンにそう言っただけで遠ざけると目の前のドアをぶち破る。破った衝撃でドアが木屑となって周りに飛び散る。飛び散る。…離れさせてよかったわね。近くで見たいと言っただけで騒いでいるバカのことには知らないけれど。

「開けたわよ？」

「おうふ…」

メリーは木屑があたったのだろっ、頭を抑えて蹲っていた。

「開けたわよ？」

「は、はいい！」

彼女のことを見下ろしてもう一度言っただけで身の危険を感じたのかビクツとして立ち上がった。…離れればよかったのに。特にいわけなかつたけども。

その後ドアのところから中を覗き込むが…

「何にもないですねー」

見事に何もなかった。それはもう徹底的に教団や机どころか黒板すらもなく窓から一般校舎と月が見えるだけだった。へえ…ここ一番眺めがいいのね。

メリーは諦めきれないのか中に入ると壁を叩いたりしている。私はなんとなくすることもないので彼女の隣で壁とスキンシップを取っているユメに抱きついてみる。…無反応なのね。

「むむ？」

「どうかした？」

「ん、んー… シュン君」

メリーは私の質問には答えずにシュンのほうへと向くと

「私とエウナさんは少しここで調べますから、ユメさんと柚香ちゃん
とで隣の教室で待っていてくれますか？」

「… ああ、わかった」

シュンはメリーの表情から何かを感じたのか柚香とおとなしく出
て行く。… この位置からだ彼女の表情が見えないわね。

とりあえずユメもシュンと一緒にいらしいので開放すると、こちらを
向くと一礼して立ち去っていった。

「それで、どうしたの？」

「エウナさん… この壁、お願いできますか？」

メリーはいつになく真剣な顔をして壁を指差す。

「… ええ、わかったわ」

私も特に理由は聞かずにメリーの指差したところを叩くと、壁に
パラパラとコンクリートのかけらを零しながら穴が開いた。そして
中からのぞいてきたのは… 骨？

「… これは？」

「たぶんですが… 人柱です」

人柱、災害なんかで壊されないように生きたまま埋められる人のことだったかしら…

「でも、今の時代に人柱だなんて…」

「…この校舎は旧校舎をそのまま流用してるらしいんです。ですからここが経ったのは…」

かなり昔、と。

「それで？」

「せっかくですからこの人に話を聞いてみます。人柱なら神様に近い位置に居ますから」

「そんなこと出来るの？」

私がそう聞くとメリーは仮にも幽霊ですからねーと言って笑った。…そういえばそうだったわね。普通の人とほとんど変わらないから忘れてたわ。

「そう、何か手伝うことは？」

「今は…ないですね…終わったら呼ぶんで皆でお祈りでもしましよ
う」

私はその言葉に返事をする、メリーを残してユメたちの居る教室へと向かった。

教室ではユメがどこから出したコップでジャグリングを見せており、柚香はそれに夢中になっている。好都合ね。

「話は終わったのか？」

シユンの隣に行くと小声で聞いてきた。

「ええ、メリーはもう少しすることがあるらしいわ」
「そうか」

そう言うつとシユンもユメのほうへと視線を戻した。：私も見てみたけどアレは人間業じゃないわね。途中からユメ本人も回っていたし。

□ □ □ □

気が付くと周りは真っ暗闇、その中で出口のようにぼっかりと白い扉が見える。：呼ばれてる？。

『ダメですよ、エウナさん』

どこからか少女の声がする。

『永遠に見える夢なんて無いんですから、行っちゃダメですよ』

でも…呼ばれて…

『あそこがどんなに幸せな世界でもそれは幻想なんです。幸せだったころには戻れません』

あなたは…だれ？

何でだろう、私はこの声を知っている気がする。楽しかったあの日、いつまでも続くと思っていたあのころ。どうして今は思い出せないの？

『…思い出さなくてもいいですよ』

誰かの声が優しく私にそういう。でも…思い出さないと…あの子が…

『ほら、早く戻ってあげないと。メリーさんが泣いてますよ』

メリー…そうだ、メリーは…

『エウナさん、幸せですか？』

私は…

そこで私の意識は闇に閉ざされた。

□ □ □ □

体が揺らされて誰かが私のことを呼ぶ声がある。

「エウナさん！」

五月蠅いわね…少し眠らせて…

「眼を…開けてくださいよ！」

ああ、もうわかったわよ…

あまりに五月蠅いので眼を開けると目の前にメリーの泣き顔があった。

「メリー…？」

「っ！」

私が眼を開けるとメリーは私の胸に顔を押し付けて泣き始めた。
え？何？何で泣いてるの？

「ちょ、ちょつとメリー？」

声を出さずに私の胸で泣くメリー。私はというと、しょうがないので片手で彼女の背中をさすりながら声を掛ける。消毒液臭い…いたい何してたのよ。

「大丈夫、大丈夫だから…」

正直何が大丈夫なのか自分でもわからないのだが、他に掛ける言葉が無いのよね。私はそのまま数分間、彼女が泣き止むまでバカの一つ覚えのように大丈夫と言い続けた。

「…落ち着いた？」

「はい…」

泣きやんだはいいけど…メリーは沈んだ表情のままである。何、何なのこの状況は…誰か私に説明して…

「それで、どうしたの？」

居ない誰かに説明を求めてもしょうがないので自分で聞くと、メリーはゆっくりと話し始めた。

「寝ぼけた頭で必死に状況把握中」

「なるほど…」

纏めるところである。

メリーが戻ってくると私が廊下に倒れており、いくら呼んでも返事が無かったと。ふむ、別に廊下で寝る癖はないのだけれど…。

「ホントに…よかったです」

「あー、大丈夫だから泣かないの」

また泣きそうになるメリーを慌ててあやす。この子ったらいつの間にかこんなに泣き虫になったのかしら…

それにしても倒れていた、か…何も覚えてないわね。ユメが壁走りとかしていたのは覚えていたのだけれど…そこからの記憶がまったく無い。ん？そういえば他の子は？

慌てて周りを見渡すが、私とメリー以外には誰も居ない。なぜだろうか、嫌な予感がする。

「とりあえず教室に入りましょう？」

廊下にいないなら教室にいるだろう、と無理やり嫌な予感を押し込んで教室の扉を開ける。あれ？ここ閉まってたかしら？

そして中に見えたのは重なるようにして倒れて居る柚香とシュン、そして私の寝ていたドアの方に向かって倒れているユメの姿。え？何…これ？

良く見ると服は無事なのにシュンの背中血で染まってる。服はまったく傷ついていないのに…

これって…つまり…

「ユメ！」

思わずメイド服の少女に駆け寄ると名前を叫ぶが反応がない。嘘…でしょ？

隣ではメリーが私と同じくシユンと柚香の所に駆け寄っていた。

「嘘…この状況って…」

「これは…」

「メリー…嘘よね…？まさかユメたちが…」

私がすぐるようにそう聞くとメリーは悲しそうに俯いていた。

「ねえユメ、嘘だって言つてよ…冗談なんでしょう？」

「エウナさん…」

「起きて…起きなさいよ！今ならまだ許してあげるから…！ねえっ
てば！」

「エウナさん…落ち着いてください…」

落ち着け？この落ち着けというの！？何でこんな…！

「起きてよ…冗談なんでしょう…」

何で…私が…依頼を受けたから…？

「んう…」

「う…」

「シユン君！柚香ちゃん！」

「姉さんか…ということは…戻れたんだな」

メリーが叫んだほうを見るとシユンと柚香が薄く眼を開けていた。
シユンと柚香は起きた…ということは！？

私はユメのほうへと視線向けるが以前変わらずに瞳は閉じられた
ままであった。

その後、完全に意識を取り戻した二人の話とは違い、その後もユメが目覚めることは無く、彼女は意識不明で病院へと入院することとなった。

□ □ □ □

ぼつり、ぼつりと点滴が落ちている。その管は目の前の少女へと繋がっており、アレから3日経っても目を覚ましてないという現実をいやおうなく私に付き付けている。

黒い髪をした少女の顔はとても穏やかで、毒りんごを食べた白雪姫のよう。ただ違うのは彼女は眠っているだけで死んでいるのではないのだけれど…ねえ、白雪姫は毒りんごを吐き出して起きたけれど、あなたは何をしたら起きるのかしら？

私がユメの寝顔を眺めながらそんなことを考えていると、病室内へとメリーが入ってきた。

「シユン君と柚香ちゃんは無事退院できましたよー」

「そう…それは何よりね」

私はユメの頭を撫でながら対応する。ねえユメ、あなたの守った人は無事だったのよ。だから早く目を覚まして。

「相変わらず…ですか？」

「見てのとおりのよ」

「そうですか…」

そう呟くと彼女は私の隣まで来るとベッドのほうを見て黙り込み、病室内を沈黙が支配する。

「それでは…行って来ますね」

いったいどのくらいの間そうしていたのだろうか、私の隣にいる少女はぽつりとそういった。果たしてその言葉はどちらへと向けられたものなのかしらね。

「私も行くわ」

「ですが…」

「何か手がかりが掴めるかも知れないんでしょう？なら、私も行くわ」

「…わかりました」

あの時、メリーが人柱から聞いた話によると、すべての元凶はこの病院の一室であるらしい。

最後にユメの頭を一撫でするとメリーと一緒にエレベーターへと乗り込み8階へのボタンを押すと、静かな駆動音を鳴らしながら上へと上っていく。他に乘っている人は居らず、空間内に居るのは私たちだけ。

そしてどちらも会話はなく、ドアの上に805と書かれた部屋の前へと着いた。

「ここ？」

「はい、おそらくは…」

メリーに確認を取ると805号室のドアを開けると中へと入ると、立ちくらみでもしたかの様に視界が軽く歪む。なるほど…これは当たり前っぽいわね。

「お邪魔するわよ」

ベットで横になっていた長い黒髪の少女が突然入ってきた私たち

の方を見て少し驚いたようにこちらを見ている。彼女の体は痩せており、肌は青白くてあまり長くはなさそうな気配がする少女だった。少女のベットの横の棚には誰かが頻繁に訪れているのか真新しい花が生けてある。

「あなたたちは…?」

「初めましてこんばんわ、特にご迷惑でなければ貴女の夢についていくつか質問をしたいのですが」

メリーがそういうと少女は合点が言ったのだろつ。淡く微笑むとどうぞ、と先を促してきた。

「単刀直入に聞きます。学校で起きている事件はあなたが原因ですね?」

「事件…ああ、夢のことですね。はい、間違いなくあの夢は私が原因です」

「随分とあっさり認めるのね?」

「特に隠す必要もないですから」

くすくすとそう笑うと彼女は窓の外へと視線を向けた。今日は曇りだからさぞ素敵な景色が見えるんでしょうね。

「そうですか…それじゃ夢に他人を巻き込むのをやめてもらうことは出来ませんか?」

「それは無理です」

「どうしてですか?」

「私はただ夢を見ているだけですから、その夢に誰が入って来ようが誰が出ようが、私とは何の関係もないでしょう?それに…」

そして私の方へと視線を向けると。

「誰であろうと夢を見るも見ないもその人の自由じゃないですか。ふふ、それがあなたにとって大切な人だったとしても」

こいつ…！

「エウナさん！」

その言葉を聴いた瞬間、私の頭に血が上った感覚がして、私はメリーの制止の声も聞かずに彼女の首を掴んでいた。ほんの少し力を入れればこの細い首はへし折れるでしょうね。

「なら私が永遠に覚めない夢を見せてあげましょうか？」

「私を殺すと永遠に目覚めない可能性がありますか？」

「あなたを殺せば目覚める可能性もあるわ」

「ならやってみたらどうですか？」

私は首を掴んだままそういった彼女の微笑を睨みつける。

「大切な人が永遠の眠りに付くか、それとも目覚めるか、試してみるの自由ですよ」

「…」

「エウナさん…ダメですよ」

私は無言で彼女の首から手を離すとメリーのところまで戻る。

「へえ、意外と冷静なんですね」

私の後ろから挑発するような声がしたが、今度はメリーに腕を掴まれていて動くことが出来なかった。

「…最後にもう一度聞きますが、やめる気はないんですね？」

「やめるも何も、私は夢を見ているだけですから」

「…では、私たちは戻ることにします。質問に答えていただきありがとうございますね」

メリーはそういつて礼をすると、先に出ている私の方へと歩き始めた。

「ああ、忘れてました」

メリーが部屋のドアを閉めようとしたとき、思い出したかのようにそう言つて彼女の方へと視線を向けると

「協力者の名前、教えてもらえませんか？」

その質問に彼女はしばらく沈黙していたが

「協力者なんて居ません」

「そうですかー、それではコレで失礼しますね」

今度こそドアは閉じられ、病室へと戻ることになった。

□ □ □ □

彼女の部屋へと行った次の日、私は眠り続ける彼女だけを見つめていた。気が付くとメリーは何処かへと行っており、居るのは彼女と私の二人だけ。

「エウナさん…？」

「メリー…帰ったの？」

「はい、今戻りました」

「そう…」

そう呟くと私はまたユメの元へと視線を戻す。さつきから頭の中で繰り返されるのは彼女との会話。

「あなた、あの会話の中で何かわかったのでしょうか？」

「…はい」

「私は…何も出来ないのね」

ポツリと言葉が漏れる。私は何も出来なかったし、何もわからなかった。そう、何も…

「何も、出来ないわけじゃないですよ…」

私がうつむいていると、ふと後ろからメリーに抱きしめられる。

「エウナさんは…ユメさんのそばに居てください。それは、私には出来ないことですから…」

「メリー…」

「もし眼が覚めたとき、誰も居なかったら寂しいじゃないですか」

そこまで言うとメリーが離れた。

「ですから事件のことはババーンこの名探偵にお任せあれ！」

…この子ったら。私ったらホントにダメね…

「…事件のことは任せていいのね？」

振り向くとメリーに微笑みかける。

「はい、手はすべてそろいました！後は幕を下ろすだけです。ですから、エウナさんはユメさんのことをお願いしますね」

「そう…わかったわ。事件の解決は任せたわよ、探偵さん」

メリーは了解です、と言ってドアから出て行った。

メリーが出て行ってからどれくらいの時間が経ったのだろうか、窓のほうを見ると昨日とは違い、星空が病室内からも見えた。さてと…メリーを迎えに行つてあげますか。

□ □ □ □

特別校舎のある教室、ちょうどシュンたちが倒れたところでメリーが一人立っていた。

「女の子を待たせるなんてマナーがなくてないですよ」

「場所だけで時間を明記してないあんたが悪いんだろ」

メリーがそう言うと、教室のドアから茶髪にめがねの少年が入ってきた。

「やっぱりお見舞いに来てたのはあなただったんですね、いいんちよさん」

「会長だ…知ってて呼んだんじゃないのか？」

「なんとなく予想は付いてましたが…確証はなかったもので」

「だから看護婦づてに渡すなんていう回りくどい呼び方をしたのか…」

805号室の少女と話した後、メリーは看護士にいつもお見舞いに来る人にお礼の手紙書いたので自分の代わりに渡してほしい、と
いつて呼び出したのである。

「それで？俺をここに呼び出したのは何の用だ？」

「はい、ちよつとお願いがありました」

「…何だ？」

「ユメさんたちの意識を元に戻してはもらえませんか？」

「何かと思えば…それは「できますよね？協力者のあなたなら」」

少年の言葉をさえぎると、メリーはそう告げた。

「…何を言ってるかわからないな。いったい何の証拠があつてそんなことをいうんだ？」

「そう、そこなんですよ。正直のところ証拠らしい証拠はないんですよねー。だからこうしてお願いに来ているわけですが」

メリーはそこで切ると残念そうに首を振りながらも続ける。

「証拠はないですが、お願いは聞いてくれますよね？」

「だから俺は協力者なんかじゃ…」

「そうですか…彼女を守るためにはそれしかないんですが…残念です」

「…どういうことだ？」

その言葉を聞いた瞬間、少年の眼が鋭くなった。

メリーは少年の質問には答えずに歩きながら話しはじめる。

「あなたが彼女が人を殺すことがわかってまで協力をしていたのっ

て、病院の彼女に警察の捜査が行かないように守るためだったんでしょう？

見るからに病弱そうですね彼女、そんな子が警察の取調べなんてしたら…死にはしないでしようがかなりのストレスになるでしょうねー」

メリーはそこで区切ると一度止まり、少年のほうを見た。

「…それこそ、ただでさえ短い寿命が縮むほど」

そして自身を睨んでくる少年に楽しそうに笑いかけるとまた歩き始める。

「彼女が事件の原因がどうか、といった辺りは本人に聞いたら普通に答えてくれました。おそらくは彼女にとっては事件なんていうほどのことじゃないんでしょうね…事実、警察の人が取り調べに来ても彼女のやったことが犯罪になることはないでしょう。」

だって、彼女は夢を見ているだけなのですから。…もしくは、自身のことを隠さずに言うことで私たちの目的を達成させ、誰かを庇った…とか？

…まあ真実はどうであれ、そんな彼女も協力者のことについてはそんなものは居ない、とか言っただけで教えてくれなかったんですよねー」

「…そう言ったなら協力者なんて居ないんじゃないのか？」

「それはおかしいんですよ。彼女の夢は意識だけを取り込むものです。」

実際にシユン君やユメさん、柚香ちゃんを取り込まれたときはまるで眠っているようでした。

ですが…それでは行方不明になった人たちのことが説明できません

ん。

それにシュン君は中で行方不明になった先生の骨を見つけた、と言ったましたし、意識だけを幻想へと取り込むはずなのに、現の体までなくなるのは明らかにおかしいでしょう？

それで協力者が居ると思っただんです。

まあ、死体はまだ見つかってないですが…たぶん学校内を捜せば何処かからみつかると思いますねー、服は無事で体だけが傷つけられた死体が。…幸い今は冬ですからそれほど損傷は激しくはないでしょう。

それに、彼女が取り込む瞬間って体の意識が無い時だけなんだと思うんですが、違いますか？」

またも立ち止まり少年のほうを見るが、返事がないとわかるとまた歩き出して話し始めた。

「まあ、それはいいとしましょうか。

正直言って協力者が居るという事実だけが大事で彼女がどうやったかはそれほど大切ではないわけですから…

さて、協力者が居るとわかったら何故彼女は嘘を付いたんでしょうか？

たぶんですが、協力者さんを庇ったんでしょうね。

彼女のやったことは犯罪にはなりません、死体を隠したと言う行為は十分犯罪となります。

その結果、自分のことを思っただけでくれた協力者さんの人生がどうなるかは…想像が付くでしょうね。

この時点で彼女と協力者さんはかなり親しい間柄だと言うことがわかります。

さらにこれは看護師さんが言っていたことなんです、彼女にお見舞いに行く人ってほとんど居ないらしいですねー、それこそ家族すらも。

以上のことからあなたが彼女の協力者だということがわかりました。

ここまでで何か間違っているところがありますか？」

「間違いがひとつ、教師や生徒の連中を殺したのは俺だ。彼女は関係ない」

少年はメリーの言葉にふっと笑うとそう言った。

「ありやりや、そうでしたかー…」

てつきり彼女かと思いましたけど…あの空間に干渉したのはあなたでしたか…まあひとつ、と言うことは他はおおむねあっていることですね？」

「ああ、良く考えたな。それで？その情報を警察に言うか？
いっても意味はないよな。あるならとくにしているはずだから」

「はい、まず間違いなく警察に今の話をしても部外者の戯言と言うことで処理されるでしょう…ですが、あなたひとつ忘れてませんか？」

メリーは黒板の横に置いてあるクラゲのぬいぐるみを手に取ると少年のほうを見て

「シユン君たちは犠牲者なんですよ？」

「…」

「確かに、私やエウナさんが言ったのなら意味はないでしょう。ですが、シユン君たちはどうでしょうか？」

彼らは疑いようのない被害者です。…確かに虚言と取られる可能性はあります。

ですが、警察さんたちも捜査は難航している現状、被害者と言う人物から事件についての話がきたらどうでしょう？

それがどんな話であろうとも、聞いてくれる人は一人か二人は居るでしょうねー。

その結果、学校を捜査して学校内に漂う魔力から彼女へとたどり着く可能性は決して低くはありません。

正直なところ彼女の魔力はかなり特殊ですから、特定はあまり難しくはないでしょう。

それに実際に警察さんたちの捜査が難航している理由は調べる場所がわからない、という理由が強いらしいですから。

あとコレは知らないかもしれませんが、シュン君は警察の中で知り合いが居るらしいですよ？。それも捜査状況の愚痴を言うようなかなり親しい間柄の知り合いが」

少年はメリーの言うことを黙って聞いている。

「それで最初のお願いに戻るんですが…彼女を守るためにも聞いてくれますよね？

まあ、もしも今後もこの事件が続くようなら…ふふ、どうしましようね」

メリーはそこまで話すと、もう用は無いと言った風に少年へ笑いかけ、教室から外へと出た。

教室内で一人残された少年は、何かを考えているかのようにずっと動くことはなかった。

□ □ □ □

病院の駐車場で星空を見上げながらぼーっとしていると、見慣れた灰色の車が入ってくるのが見えた。

「お帰りなさい、メリー」

「ありゃりゃ、待っていてくれたんですかー？」

「あら、待っていないかったほうがよかった？」

「いえいえー、ありがたやありがたやー…ぐふ」

メリーはそう言うのと私に抱きついてくる。殴り飛ばした。

「こ、この感覚…久しぶりのような気が…」

「ほら、こんなところで寝ると風邪引くわよ。」

「あ、待ってくださいよー」

慌てて追いかけて来るメリーを待ってから、二人で並んで歩く。

「首尾はどうだった？」

「はいー、何とかかなりそうですねー」

「そう、それはよかった」

私はそう言うのとメリーの頭を撫でると、メリーは少しビクツとしながらもおとなしく撫でられている。

ずっと撫でているわけにも行かないので適当なところで手を外し、病室へと並んで歩いていると、メリーがポツリと話し始めた。

「実際のところ、まだ根本的な解決には…」

メリーがそこまで言った辺りで、空から何かが降ってきた。

ぐしゃり

肉のつぶれる音を出した何かはまるでトマトがつぶれたかの様に

赤い血を流している。落下の衝撃で手足は折れ曲がり、長い黒髪をしている頭は血を流しながら何処か虚空を見つめてた。これは…人？え？この子ってまさか…

「え…この人って…ってエウナさん！」

メリーが叫ぶのを背中に聞きながら走り始める。彼女が死んだってことはつまり…！

『私を殺すと永遠に目覚めない可能性がありますよ？』

脳内で彼女の言った言葉がよみがえる。ほんの昨日話した内容だ。まさか…嘘でしょう？

私はエレベーターの遅さにいらいらとしながら駆け下りるとユメの病室へと走りこむと叫んだ。

「ユメっ！」

…えつと？

「エウナさん…早いですよ…ってわわ！ユメさん、その髪どうしたんですか！」

あとから付いてきたメリーも驚いたようにそういう。

「これはエウナさまにメリーさま、そんなに急いでどうかなさいましたか？」

病室内ではユメがベットから倒れる前と対して変わらない様に半身を起こしてこちらの方を見ていた。ただ違いをあげるとしたら彼

女の真つ黒であつた髪は雪の様に真つ白となつていた。それはもう一本も残さず見事に白い。

あゝ…その髪の色はどうしたのかだとか、意外と元気そうねだとか、心配掛けるんじゃないだとか…色々な言葉が浮かんだがまずは…

「お帰りなさい、ユメ」

「はい、ただいま戻りました」

色々な質問よりも、まずは挨拶から始めることにしましょうか。

あなたの夢はなんですか？ 現実編（後書き）

ということ現実編です

何一つ解決して無くない？とかラストの展開速くない？とかは言わないでください…作者の能力不足です…

元々ひとつだったのですが今まで書いたことのない長さに作者がノックアウトしたので分かれました
コレだけで1週間掛かってるのにね…

無事投稿されてればこの後幻想編が入ります
入る予定です
入ってください

それでは、後少し事件にお付き合いください

あなたの夢は何ですか？ 幻想編（前書き）

はい、幻想編です

色々と辛かったです
本当に…

このお話しは現実編で倒れてた人たちが何を見ていたかのお話です。

ま、まさかこっちから読み始める人は…居ないよね？

ということ

人物表

カチエ
ユメ
叶 夢

メイド メイド要素0ですとも

ユウカ
柚香

人間 女子校生 依頼主

カスガ
霞日 シュン

人間 不幸な学生です ええ、本当に

病院の少女

病院に居たあの子です 名前はきつとない

覆面の男

ドラクエのガン。夕見たいのを想像してください ですが決して
ガ。ダタではないです 誰かわからない人は筋肉ムキムキのパンツ
1枚の男が覆面被ってるのを想像してください

ミ
ツ
キ
ク
ラ
ゲ

ふ
わ
ふ
わ

あなたの夢は何ですか？ 幻想編

気が付くと周りは真っ暗闇、その中で出口のようにぼっかりと白い扉が見える。…呼ばれてる？。

『ダメですよ、エウナさん』

どこからか少女の音がする。

『永遠に見える夢なんて無いんですから、行っちゃダメですよ』

でも…呼ばれて…

『あそこがどんなに幸せな世界でもそれは幻想なんです。幸せだったところには戻れません』

あなたは…だれ？

何でだろう、私はこの声を知っている気がする。楽しかったあの日、いつまでも続くと思っていたあのころ。どうして今は思い出せないの？

『…思い出さなくてもいいですよ』

誰かの声が優しく私にさういう。でも…思い出さないと…あの子が…

『ほら、早く戻ってあげないと。メリーさんが泣いてますよ』

メリー…そうだ、メリーは…

『エウナさん、幸せですか？』

私は…

そこで私の意識は闇に閉ざされた。

□ □ □ □

ここは…？

少女… 柚香がふと目を覚まして辺りを見渡すと、見慣れない教室。
えーと…

何かを思い出すかの様にしながら首をかしげる柚香。確か… ユメ
さんがジャグリングをして… アレはすごかった… 最後のほうと
か一緒に回転してましたし。

そこまで思いを巡らすと彼女は思考を止める。しっかりするんだ
柚香！今話を進行するのは君しか居ない！やめて！このままだとま
たグダグダ進行とか言われるー！

ユメさんちっちゃくて可愛かったなー… あんな妹が私にもほしい
です…。

しかしそんな神の焦りも関係なく柚香は別の方向へと思いを巡ら
せていく。… しょうがないので柚香が居る部屋を簡潔に説明してお
くことにしよう。

まず彼女が居るのは旧校舎の一室。ちょうど開かずの教室の隣の
教室である。つまり移動してないんだよ！

しかし彼女が見慣れないと思ったのも無理はないだろう。その教
室の壁は塗装がされておらず、むき出しになっているコンクリート

の灰色が覗いているのだから。

彼女の正面には何も書かれていない黒板、横に置いてあった人形がなくなっていることには気づいているのだろうか？

そして後ろにあるのは個人用ロッカー、ちょうど人を折りたたむと入りそうなサイズの。…関節外せてかばんの中に入れるようなびっくり人間でもない限りは無理だろうけど。

とそこまで解説し終わった辺りでちょうど柚香の回想も終わったので話を戻すことにする。

つと…いけないいけない…。そういえば他の人はどこに行ったのかな…？

とりあえず扉から顔だけを出して辺りを見渡してみる。右側は…部屋、と。左側は…暗い通路、と。…た、たぶん皆帰ってくるよね。そう思い直すと私は教室に戻る。見渡して気づいたけれど、どうも場所は変わってないみたい…？

気が付いたように窓の外を見ると、もう真っ暗で月明かりだけが照らしている。今、何時なんだろう？

携帯は…あつたあつた。え…何…これ？

携帯のディスプレイでは猫が丸時計を持っているが、なぜか針の部分だけが表示されておらず。さらに電波には圏外という無慈悲な字を表示している。

壊れちゃったのかな…

私は時刻を確認することは諦めて携帯を仕舞うと改めて回りを見渡す。

コンクリートが剥き出しとなっている教室内には机と椅子だけがぽつんと並んでおり、動くものは何も無い。

『少女は思いました。他の皆はどこに行ったのだろうか？と』

静かな教室を見つめていると、頭の中でA子が話していた怪談が浮上してくる。えっと…。

『そして少女は待ち続けましたが、他の友達は帰ってきませんでした。そう、少女は一人夜の学校に取り残されてしまったのです。』

そして、一人教室内で戸惑う少女の耳に誰かの足音が聞こえてきました…』

この状況って…

ギシ…ギシ

「ひ、ひい！」

廊下から誰かの足音が聞こえてくる。

その音に私はまるで金縛りにあったように廊下の方向から視線を動かせない。

『そして…』

「おー、やっと発見」

恐怖で固まる私の眼に飛び込んできたのは、何かを包んでいる学生服の上着をもって私に笑いかけている、ついさっきまで一緒に居た少年だった。

「ん…大丈夫か？」

「だ、だいじょうぶれひゅ」

「そ、そうか…とりあえず立てば？」

誰かに会えた安心感と緊張で呂律が回らない…ついでに腰が抜けて立てない。

私は少年に手を貸してもらって立たせてもらうと、目の前に居る黒髪の少年を改めて見つめる。えーと…確か…

「シユン…君？」

「ああ、そうだけど…その様子だと何も知らないみたいだな」

「は、はい…」

話を聞いてみると彼が気づいたのはこの階の別の教室で、誰も居ないことを不審に思った彼は1部屋ずつ確認しながら私のところまで来たらしい。

「そうか…起きたばかりで何も知らない、か」

シユン君はそう呟きながら何かを考えていて、何だか話しかけづらい様子。

「イチゴとレモン」

「へ…？」

私がぼけーっとシユン君の様子を見ていると突然話しかけられた。

「イチゴとレモン、どっちが好きだ？」

イチゴとレモン…何のことだろ？

でも、どちらかというと…

「イチゴ…？」

「俺に聞かれてもな…まあ、ほら」

そう言つとシュン君はポケットから何かを取り出した。えーと…
コレは…飴？

「こんなしかないけどな、まあ食べよ」

「え…あ、ありがとう」

私が受け取ると彼は黄色い飴を取り出すと、自分の口に入れた。
たぶんレモン味だね、アレ。

私も彼に習つて飴を頬張る。うん、イチゴ味。どことなく懐かしい味を舐めていると、照れ隠しなのか笑いながら話しかけてきた。

「昔、姉さんが何かあるとくれたんだ」

姉さんつて言うのはメリーさんのことだね？確か…

そのまま二人とも無言で飴を舐め続ける。何この状況。

男子生徒と放課後に二人つきり…お話だともう少しロマンチックな何かがありそうなんだけれどな…まあ、現実なんてこんなものか。

「それじゃ、俺はもう少し辺りを見てくるわ」

「え…あ、はい」

「そんな不安そうな顔するなつて。何かあればすぐ帰ってくるからさ」

…そんなに不安そうだったのかな？そりゃ少し…かなり一人でここにいるのは不安だけれど…。

私がそんなことを考えている間に、シュン君は笑いながら私の頭を一撫ですると彼は教室から出て行った。

私はというと特にすることもないので床に座って一人飴を舐める。
そしてふと彼が残っていた上着に目がとまる。

あ、そういえば…何が包んであるんだろう？
すっごい大切そうに持ってたけれど…

んー、と少し悩んだけれど、何も言われなかったからいいよね？
という結論が脳内会議で出た。

「それでは早速ご開帳ー…」

さびしいので呟きながら開けてみる。
中にあったのは白い…え？

「ひっ！」

喉から声にならない悲鳴が出る。

私はそのまま後ずさりしていくと、背中がロッカーに当たった感
覚がする。

かちゃん

隣で何かが開くような音がしたのでとっさにそちらを見る。
そこにあっただのは…

首がなく、全身が折りたたまれてロッカーに詰められた女生徒の
死体だった。

「いやあああああああああああああああああ！」

悲鳴が出る。何コレなんでこんなのがロッカーあるの…？

「おい！どうした！」

私が混乱していると廊下から誰かが走ってくる音がしてきて彼が帰ってきた。

骨を大切そうに抱えていた彼が…

「コレは…」

彼はロッカーの死体を見つけると眉をひそめる。その様子は見つかったやいけないものが見つかったかの様で…

「お、おい！危ないって！」

私はすぐに別の出口から出ると、少しでも遠くまで逃げるために走り出す。何…？何なのアレ…どうしてこんなところに…

一目散に廊下を走り抜けると、後ろを気にしながら階段を駆け下りる。

「きゃっ！」

後ろを気にしすぎたのが悪かったのだらう。私は最後の一段を踏み外してしまった。痛みを堪えてすぐさま後ろを確認するが、彼はまだ来ていない。

悪い方向に捻ったのか、じんじんと痛む足を庇いながらまた動き始める。逃げないと…早く、何処かに…

先ほどよりはゆっくりと、けれども出来るだけ早く動いていると、向こうの廊下から誰かが歩いてくるのが見えた。

その誰かは覆面を被っており、片手には大きなハンマーを持っている。

そして、覆面越しに私と目が合ったのを感じる。

「ひっ…」

覆面の男はゆっくりと腰に付いたナイフを取り出すが、逃げようとしても私の足は恐怖で張り付いたように動かない。

そのまま男は私に向かってナイフを振りかぶると…

「おい！なにぼーっとしてるんだ！」

声が出たかと思うと、私の目の前に誰かの腕が突然現れると私を投げ放たれたナイフから庇った。え…？

「早く逃げるぞ！走れるな！」

そのまま誰かに腕を引っ張られて階段を駆け下りる。誰かの腕にはナイフが刺さっており、上着が血で染まっている。

「あの…」

「喋るな！走れ！」

誰か…シュン君は混乱している私を引っ張ったまま教室へと入ると止まった。

「足、見せてみる…」

「血が…」

「いいから見せろ！」

私がそう呟いていると苛立った様に彼が怒鳴った。

「ひ…」

「あ…悪い…とりあえず、足見せてみる。折れてないか確認するか」

赤黒く晴れ上がっている私の足を見ながらシュン君は「大丈夫だな…」と呟くと腕に刺さっているナイフで上着を切り始めた。

「止血、習ったよな？」

「え…はい」

「頼む…一人じゃ出来ないから」

上着で作った包帯を差し出すシュン君。

そのまま彼の言うとおりに傷の処置をすると、彼は私の足に包帯を巻いていく。

「こんなものしかないけどないよりはマシだろうから」

そんな風に笑いかけながら彼は包帯を巻いていく。その様子を見ていると私に疑問が浮かんだ。

「どうして…？」

「ん？」

「どうして…あなたはそこまでの？」

私なんて…今まで接点なんかなかったのに…怪我までして…。
その思いは言葉に出なかった。彼が何だか困ったように笑うから…。

「あー…何でだろうな…」

そう言うと彼はポケットから飴を出すと私の口に入れた。さっき舐めたばかりのイチゴ味。

「俺もよくわかんないや」

自身にも飴を入れると、私に笑いかけた。そのときの彼の顔は私にはとても輝いて見えて…私は何でかわからないけれど、赤くなつた顔を逸らした。

「骨…」

「え？」

「骨…見たんだな」

「…うん」

そのままシユン君は無言になる。

「アレな…行方不明になつた教師のなんだ」

しばらく二人とも無言で居ると、静かに話し始めた。

「バカな教師でさ、自分の損なんて考えずに生徒のことばかり考えて…今回も行方不明になつた奴等のことを必死に探してたんだ。

その結果こんなところで死んでるなんてな」

「本当に…バカな教師だよ…」そう呟くとシユン君は顔を伏せた。私はその姿に何か声を掛けたくて…でも、言葉が見つからなくて…

「あの…」

「待て…誰か来る」

私が声を掛けようとすると、シユン君が小声で制止した。私も耳を澄ますと、小さくギシ…ギシ…と鳴る音がする。

「いいか、もしもあいつが出たら俺が囷になるからあんたは隙を見て逃げだせ…」

「で、でも…」

「足を怪我してるあんたよりは大丈夫さ」

彼は不安そうにしてる私を笑いながら撫でるとそう言った。そして真面目な顔になると、息を潜めて音のする方向に視線を向ける。

「いいな…」

私も祈りながらその方向を見つめる。…ここには来ないでください。

そんな私の祈りも届かず、やがて教室の前で足音が止まると、引き戸が開けられた…

「シユンさまに柚香さま、どうなさいましたか？」

そこには宙に浮いているクラゲと、メイド服に赤いコートを着た少女が驚いたような表情をしていた。この子って…

「ユメさん…？」

間違いなく少し前まで一緒に居た彼女である。

「と、とにかく早く入れ！」

ユメさんの中に入れると、シュン君が何も知らないという彼女に今まであったことを説明する。

「なるほど…それは大変でしたね」

彼女は最後まで聞くと、扉に何かを貼り付けた。

「何してるんだ？」

「簡易式の結界です。とりあえず作業中に邪魔が入られると困るので…シュンさま、手伝っていただけますか？」

「あ、ああ…」

…作業って何？

私がそんなことを悩んでいる間にも、シュン君はユメさんの指示でチョークをもって床に何かを書き始める。出来上がった形は…魔方阵？

「何をするの？」

「あなたたちを元の世界に戻すための準備です」

…えーと？

私の表情から何かを感じたのか、彼女は軽く微笑むと。

「詳しい説明は省きますが…今居る世界は夢の様なもので、この魔方阵はあなたたちを帰すためのものです」

「そんなことが出来るのか！？」

「はい、仮にも魔法使いだったこともありしたので」

驚いたように聞き返すシュン君に応えるユメさん。

「それで、戻るために大切なことがあるのですが…」
「何？」

私がそう聞くと、彼女はどこか戸惑うそぶりを見せる。何だろう？

「戻るためには、キスが必要なのです」
「へ…？」

思考が止まった。キスってアレだよね？恋人同士がしたり外国では挨拶程度に交わすアレ？

「はい、この魔方陣は一人用なので二人とも戻るためには体液の交換が必要なのです」

しかも深いほうだった。いや、いやいや…いきなりキスとか…そんな…しかも深いほうだ何て…。

見ればシュン君も硬直している。よかった…ノリノリだったらどうしようかと思った。

「何もないのはさすがにし辛いと思いますのでこんなものを用意しました」

彼女はそういうと水筒を取り出した。ここから導き出される答えは…！

「口移し…か？」

シュン君が出した。

「でもよろしいかと」

「そうか…」

何もよろしくない！よろしくないよユメさん！そしてシュン君も諦めない！そこはもつと粘ろうよ！

「あの…他に手段は…？」

「はい、体液が交換できるのであれば何でもいいですが…」

そこでいったん切ると、彼女は廊下の方に視線を向ける。

「あまり時間はないかと思います」

彼女がそう言い終わると扉に何かが叩きつけられる音がする。何でこんなタイミングで来るの！

「いや…あの…でも…」

それでも私が拒んでいると、シュン君が動いた。

「あー…悪い、先に謝っとくわ」

そう言っただけで彼は水筒に口をつけるとそのまま私にキスをした。

「ん…！？んう…」

ゆっくりと私の口へと流し込まれる水。

『失われし我が名の元に命ずる…』

その水を飲み込んでいくと、そんなような呪文が聞こえ、私の視界が白く染まっていく…

「別にマウスとユーマウスである必要はないのですが…」

白く染まっていく視界の中、ユメさんが困った顔でそう言った気がしたけれど、すぐに何も見えなくなった。

この後、無事に戻った私は彼を好きになっていくのだけれど、それはまた別のお話し。

ちなみに…私のファーストキスはレモン味でした。

□ □ □ □

月明かりの照らす病院の前に、クラゲを連れた一人の少女が立っている。黒髪の少女はメイド服の上に赤いコートを羽織っていて、片手には水晶のあしらわれた杖を持っている。

赤い少女は少しの間病院を見上げていたが、ゆっくりと病院内へと入っていった。

病院内では各部屋から幸せそうな声がしてくる。

ある部屋では誰かが恋人と過ごしていたり。ある部屋では大金持ちになっていた。また、別のある部屋では空を飛んでいた。そこには人それぞれの夢の形があった。

クラゲがその1つ1つに嬉しそうに触手を動かすが、少女は特に反応することもなく、ゆっくりと歩き続けている。

やがて、少女とクラゲはエレベーターへと入ると、ボタンを押す。ゆっくりとした動きで上へと上っていくエレベーター。

チンという軽い音がして8階へと付くと、少女はまたゆっくりと歩き始めた。

そこではもう幸せそうな声は聞こえなかった。

ある部屋では誰かに包丁を向けられていたり。ある部屋では借金に負われている。また別のある部屋では天候が悪くて今にも落ちそうになっている。

「夢の終わりは幸せじゃない…ですか」

その様子を見た少女がポツリと呟く。

そして、少女は805と書かれている部屋の前で止まると、中へと入っていった。中にあるのは空のベットと真新しい花の生けられた花瓶。

少女はその花瓶を少し見つめると、手に持った杖を立てる。

『…我が名の下に命ずる』

すると、その場に留まる杖の上にクラゲがふわりと止まった。

「それじゃ、後はお願いしますね」

少女は杖の上に居るクラゲにそう言うと、その場を後にして屋上へと向かった。

ぎい…とした音を立てて屋上への扉が開く。そこにいたのは宙に

浮かんでいる肌白な少女の姿。

「こんばんわ、いい月夜ですね」

その様子に特に驚くそぶりも見せずに、赤い少女はぺこり、とお辞儀をした。

「あなたは…？」

「はい、正直言って最初はどうしてもよかったです…この世界を壊しに来ました」

「そうですか…」

あなたにとって自由ってどういうものだと思いますか？」

「考えたこともないですね…」

幻想の中に作られる自由の世界だなんて、ボクには関係ない話です」

少女は問いに首を振りながら応えると、ゆっくりと動き出す。

「この世界が壊れたら、ほかの人が帰って来れないかもしれないですよ？」

少女はその問いに微笑むと

「言ったじゃないですか。ボクにとって他の人なんてどうでもよかったですよ。ただ…」

そこで切ると微笑みを消して宙に浮く少女を睨みつける。

「ただ…あなたはエウナさんを巻き込みました。」

ボクにとって理由なんてそれだけあれば十分です。それに…どう

せ壊れたら帰ってくるんでしょう?」

その言葉に宙を浮いている少女は面白そうに笑う。

「あなた面白いわね。正解、確かにこの世界を壊せば他の人たちは戻るわ。でも、ここを壊したとしても私を殺さない限りはまた別の世界が出来るわよ?」

「それとも、ここで私を殺す?」

「でしょうねー。まあ、それはそれで別にいいです。あなたを殺して止めるほどの興味もありません」

浮いている少女はその言葉を聞くと、怪訝そうに眉をひそめる。

「じゃあ、どうしてここに来たの?」

少女は病院の端まで歩くと振り向いて応えた。

「あなたに、ここでは出来ないことを教えてあげようと思ひまして」「出来ないことなんてありません。ここは私の作った世界ですから。ここなら…私は何だって出来ます」

「それがあるんですよー。今からお見せします」

「…何をするつもりですか?」

「簡単なことですよ。」

ところで、この世界がある限りあなたは自由でしょうけれど…あなたのせいで縛られている人も居るわけです」

くすり、と笑うと少女は後ろに一步踏み出した。当然、端に居る少女の姿は後ろへと倒れていく。

「その人をあなたはどうするんですか？」

ゆっくりと倒れながら少女はそう笑いかける。

そして少女は病院の屋上から落ちていく。
少女が地面に叩きつけられるのと同時に、夢を叶えることが出来る幻想の世界が音もなく崩れた。

□ □ □ □

「その人を、あなたはどうするんですか？」

そう言って赤い少女が落ちていき、私の目が覚めた。
目を覚ましてまず見えるのは病室の無機質な天井、横に視線を動かせば点滴と彼が定期的に持ってきてくれる花たち。

「縛っている…ですか」

花を見ながらポツリと呟く。どうするか？いいでしょう、開放してあげようじゃないですか。

…幸い、方法は彼女が示してくれましたから…後は実行するのみ。

彼女は病室でそう思い立つと、動かない体を動かして車椅子に乗り始めた。

□ □ □ □

病室で、白髪の少女が月の出ている外を眺めていると、窓の外から人が降ってきた。

その人が窓の外を通り過ぎるまでの数秒間、無表情のまま目で追う少女。

「それが、あなたの答えですか。
あなたは、強いんですね…」

自由が夢だった少女が過ぎ去った後、窓から見える月を見ながら
白髪の少女はさびしそうにポツリと呟いた。

そして外から誰かが走ってくる音が聞こえてくる。

「ユメっ！」

エウナが叫びながら部屋に入ってくると硬直する。

「エウナさん…早いですよ…ってわわ！ユメさん、その髪どうしたんですか！」

後からついてきたのだろう、メリーも入ってくると驚いたような
表情を浮かべる。

「これはエウナさまにメリーさま、そんなに急いでどうかなさいましたか？」

ユメは月から視線を外すとエウナのほうを見つめてそう言った。
エウナはその言葉になにやら悩んでいたが、やがてユメに笑いか
けると。

「お帰りなさい、ユメ」

「はい、ただいま戻りました」

ユメは無表情のまま、しかしどこか嬉しそうにそう応えた。

あなたの夢は何ですか？ 幻想編（後書き）

はい、無事長め回完結しましたゞ（>ω<）ノシ

意味不明という感想は受け付けておりません。ごめんなさい。

ということで柚香ちゃんがシュン君を好きになる話でした、それだけです。はい。

それでは、少しでも楽しんでいただけたら幸いです

果たして彼女はつけてい…（前書き）

唐突にぎゅてする話しが書きたくなりました

軽く前作とリンクしてますが気にしなくても大丈夫かと思います

ということ

登場人物表（、、）

エウナ

吸血鬼 真面目です

メリー

幽霊 変態ではない

カナエ ユメ
叶 夢

メイド あくまでも鬼ではない

カナエ ライム
叶 来夢

死人 夢との関係はそのうち

ミツキ

クラゲ いつもそばに

果たして彼女はつけてい…

屋敷のとある部屋のベット上にて、長い金髪の女性が月明かりに照らされながら本を読んでおり、女性の頭の上には白い狐のお面が乗っている。

「ああ、月がきれいな」

本を閉じると月を見上げ、誰ともなく呟く、その呟きに対する返事はもう返って来ることはないのだけれど…

「エウナさま助けてくださいー！」

月を見上げながら昔を懐かしんでいると、突然叫び声をあげながら少女が入って来た。

扉を蹴破るように入ってきたメイド服の少女は宙に浮かぶクラゲを連れ、髪は白のロングで両サイドの髪も長く少女の耳を隠している。

「ユメにメリー…新しい遊び？」

突如私の平穏を乱すかのように入ってきたユメは後ろからメリーに抱き付かれてる状況だった。かなり長い間引きずられているのだろう、メリーの足は擦り傷だらけになっており、ほんのり赤く染まっている。…無駄に見上げた根性ね。

「一度くっついたら離れない、ただひとつのメリーさん式テクノロ

ジー」

メリーはそう言うと、ユメの頭に自身のあごを乗つけた。はて、私の親友はいつから幽霊をやめてホイホイになったのかしらね？それはともかくとしてこのクラゲ…どうやって浮いてるのかしら。

「エウナ様…助けてくださいよー…」

宙に浮いている奇妙な物体に思いを馳せていると、ユメから本日二度目のSOSが発信された。しょうがないわね…

面倒だが私の平穩を取り戻すためにもここはがんばることにしよう。

「メリー、離れる気はある？」

ちょうど片手に読んでいた本で武力では何も解決しない！あくまでも平和的に解決しようではないか！という話が載っていたので一応実践してみる。

「ありません！」

「そう、しょうがないわね」

「あきらめはやつ！まっ、まっ！話を！」

「悲しいけれど、世の中話し合いだけじゃ何も解決しないのよ…」

平和交渉は3秒で破綻したのでくつついたら離れないらしいメリーを殴る。くつついたら離れない…ね。あら、いいサンドバックじゃない。

「いい…パンチです。あなたならきつと…世界が取れます…」

メリーはそれがわかっていのか一発目だけで離れる。ちっ、すぐに離れたか。どれだけ耐えるか楽しみにしていたのに。

「殴られる前に離れるって選択肢はないの？」

こいつが早く離ればこんな手間は…

「すぐに離れたらエウナさんの愛が受けられないじゃないですか！」
「そう…なら一番いいのをあげるわね」

ふふ、いいのよ？そんなにおびえなくとも。すぐに楽にしてあげるから。

「ちよっ！まった！は、話を…」

ふう、私の部屋に平穏が戻ったわ。さて、早速本の続きを…

「エウナさまー」

ユメはそう言うと私の背中に抱きついてくる。そうだった、まだコイツが居たんだった…ん？この感触？。

「ねえユメ」

「うに？なーに？」

「あなた…」

そこで言葉を切って集中する。この背中に当たる感覚、多分間違いないわね。

「胸が大きくなった？」

「ほえ！？」

「な、なんですとー！」

私がそう聞くとユメは驚いたようにして飛びのくと自身の胸の辺りに手をぺたぺた当てている。ところでメリー、あなたは寝ていいのよっ！くっ、あたらない！？

「ふっ！甘いですねエウナさん！今の私は神すらも超えてみせます！」

私の出す攻撃を次々と避けていくメリー、気のせいかその姿には残像すらも見える。

「それでエウナさん、ユメさんの胸が大きくなったと？」

メリーは拳を片手で受け止めながらそう聞く。あなたこんなに強かったっけ…？

私はこのまま殴り続けても無駄に疲れるだけと判断したので、メリーへの攻撃をやめるとユメのほうへと体を向けながら。

「ええ、なんだかいつもよりも胸のかんしょ…ぐっ！」

そこまで言ったところで私の体に衝撃が走った。え？何？

見るとユメが私にめり込むようにしながらお腹へとひじ打ちを決めており、私は何もわからないまま反射的に体をくの字に折り曲げる。

そしてそのまま彼女はきれいな曲線を描きながら私の首筋にハイキックを…

「見えた！え、あれ？ユメさんもしかしてつけ…」

ユメのハイキックをもらい薄れていく意識の中で私に見えたのは、床に倒れ付しながら狼狽しているメリーにすごい速さで駆け寄り、その体を蹴り上げているメイド服の少女であった。

□ □ □ □

「ここは…」

気がつくと私は一面のお花畑の中をゆっくりとした速度でを走っていた、そして私の後ろからこれまたゆっくりと追いかけてきているのは…来夢！？

「エウナさーん♪待ってくださいよー」

「うふふふー、追いついてみなさいー」

よくはわからないが追いかけてくるのだから逃げるしかないだろう。…一度やってみたかったのよね、こういうの。

「追いつきましたよー」

「あらあら、捕まっちゃったわね」

来夢は私に追いつくとすぐに抱きつくとうっくりと回り始めた。

「もう…離さないですよ」

来夢が回るのでつられて私も回っていく。まったく、いつまで経っても甘えん坊なのね。

初めはゆっくりと回っていた来夢も徐々に徐々にと速くなってい

く。それにつられて私も徐々に徐々にと早くなっていく。

やがて回転は来夢を軸としながらさらに早くなり、一緒に回っている私の体が宙へと浮き始めた。

「ちよ、ちよつと来夢！早くない？」

「これでいいんですよ」

回る景色の中で来夢に抗議するが…なるほど、これでいいのか。彼女がそういうのならいいんでしょうね。

「ところでエウナさん」

「ん？何？」

来夢が笑顔で聞いてくるので私も釣られて笑顔で返す。ああ、ずっとここに居たい。

「早くもこの世界に戻ってください！」

そう言つと彼女は笑顔のまま突如私の体を離れた。え？ちよつと？何を！？

当然、宙に浮くほどの高速回転をしていた私は盛大に回転しながら宙へと投げ飛ばされる。

そして私は地面に叩きつけられて意識が…

□ □ □ □

「はっ！」

すごい衝撃が起きた気がして飛び起きる。今のはいったい！？私の見渡す視界にまず入ってくるのは倒れているメリー、そして

まだ飲み掛けの紅茶と本の乗っているテーブルとベット、後は本棚くらい。

何か…お花畑で来夢に投げられたような気がしたのだけれど…なんだったのかしら？

「おーい、生きてる？」

私は朦朧した意識の中で悩みながら、びくびくと痙攣しているメリーのところへと近づくと、なぜか幸せそうな顔に向かって声を掛けながら揺り動かしてみる。

「ふふ…エウナさんったら…大胆なんですからー」

「起きろこの変態！」

私はそう叫びながらメリーのお腹に向かって拳を振り下ろす。普通なら怪我どころじゃすまないけれど…まあ、そうなくても仕方ないわよね。

「おうふ！」

生きてたか。

「はえ？あれ？エウナさん…服が…？」

「おはようメリー、いい夢は見られたかしら？」

「は、はい！とてもいい夢でした！」

「そう…それはよかったわね。どんな夢だったのか私に教えてくれないかしら？」

「ひ、ひい！」

私はこみ上げてくる怒りを抑えながら笑顔で対応する。服がっ

いったいどういう夢だったのかしらね？ほら、そんなに怯えてないで私に教えてくれない？

「え、い、いやー、あのー、そ、そういえば！」

笑顔でぎりぎりとメリーの肩に掴んでいる手に力を込めっていると、メリーが何かを思い出したかのように言った。

「それは夢よりも大切なことなのかしら？」

「そ、それはもちろん！な、なので！」

「なーに？」

「あの…で、手を外してもらえると…その…もう…色々外れそうにして…」

「あら？私は何もしてないわよ？それで夢よりも大切なことって何かしら？」

嫌ね、離れたら逃げちゃうじゃない。そんなこともわからないのかしら？

「あ、あのですねー。ユメさんがパンツをは…ぐふっ！」

「っ！？」

突然メリーを掴んでいた手がはずれ、彼女が私の視界から消えると壁の壊れる爆音が聞こえてきた。な、なに！？

私はゆっくりと音のしたほうを見ると、そこにはフーツフーツと言っているメイド服の少女の後ろ姿と、壁の残骸に埋もれているメリーの姿が。

「ユ、ユメ？」

私は何とか平和的に解決しようと話しかけるが、崩れて外が見える壁から空気の読まない風がひゅーと吹き彼女のスカートをめくり上げた。

「…え？」

目の前に見えた光景に思わず絶句する私。え？ということは最初の感触って…

私が混乱している中彼女はゆっくりとこちらに振り向くと…

□ □ □ □

「ここは…」

気がつくと周りには一面のお花畑、そして私の目の前で私に向かってゆっくりと駆け寄っているのは…来夢！？

「エーウーナーさーん」

「ふふ、らーいーむー」

よくはわからないのだから駆け寄ってくるのだからこちらも駆け寄らないといけないだろう。…一度やってみたかったのよね、こういうの。

私と来夢との距離が10mほどにまで縮まっただろうか、そこで彼女は立ち止まると拳を振りかぶった。彼女の後ろから生えて来ているのは土でできている巨大な腕。え？ちよつと？何を！？

「何度もこつちの世界に来ないでください！」

来夢が拳を振りぬく動作と同じように後ろの巨大な腕も拳を振り

ぬき、私を空高く舞い上げさせた。

空高く舞い上がっていく中、殴られた衝撃で私の意識は…

□ □ □ □

「はっ！」

すごい衝撃が起きた気がして飛び起きる。今のはいったい!?

私の見渡す視界にまず入ってくるのは壁際に倒れているメリー、そしてまだ飲み掛けの紅茶と本の乗っているテーブルとベット、後は本棚くらい。

何か…お花畑で来夢に殴られたような気がしたのだけれど…なんだったのかしら?

「おい、生きてる?」

私は朦朧した意識の中で悩みながらも、びくびくと痙攣しているメリーのところへと近づくと、何処か幸せそうな顔に向かって声を掛けながら揺り動かしてみる。

「ふふ、エウナさん…よいではないか、よいではないか!」

私は無言で彼女の足を持つとぶんぶんと回転し始める。

「あーれー」

なにやらメリーが言っていたような気がするが気にせず速度を上げると、メリーはだんだんと宙へと浮いていき…そしてメリーが地面と水平になったあたりで手を離れた。

「地獄に落ちろ！」

すごい音を立てて本棚にぶつかっていくメリー。ああ、本が崩れてきたじゃない。まったく、誰が片づけするのよ。

「おはようメリー、いい夢は見られたかしら？」

とりあえずきよろきよろと辺りを見渡しているメリーに声を掛ける。

「はえ？ああ、エウナさん…おはようございます。ところで私は何でこんなところで寝てるんでしょうね？」

「さあ？お酒に酔ったんじゃない？」

可愛そうに…頭を強く打ったせいで記憶が混乱してるのね。止めを刺したのはどちらかは知らないけれど。

「んー…そうなんですか…何かすごいことをされていたような気が…」

「ま、まあいいじゃない。それよりあなた埃まみれよ」

正直私も忘れられるなら忘れたい…

「ありやりや本当だ！お風呂にしましょーお風呂にー」

そういうとメリーは私を引っ張る。

「ちょっと、何で私を引っ張るのかしら？」

「えー、エウナさんも一緒に入りましょうよー。それとも…一緒に入るの、嫌ですか？」

メリーは突然止まると上目遣いで聞いてくる。はあ…しょうがないわね。

「…いいわよ」

「やったー！エウナさんったら恥ずかしがりやさん何だからー」

やっぱり断ればよかったかしら…

私が自分の選択に軽く後悔していると私の後ろから突然ユメの声がした。

「お風呂ですかー、ユメも一緒にしていー？」

「ひいつ」

「エウナ様？どうかしましたか？」

「い、いや何でもないわよ」

の…
思わず出た悲鳴を押しとどめる。この子…い、一体いつから居たの…

「お、ユメさんも入りますかー」

「はいるはいるー」

「うむうむ、一緒のが楽しいですからねー」

ユメは和やかにメリーと会話している。正直私は笑顔が引きつってないかどうか心配で仕方がない。ん？ところでお風呂ってことはつまり…

「そういえばユメさん」

「にゃー？何ですか？」

「ユメさんって下着はつけ…」

そこまで言いかけたところで、メリーはゆっくりと崩れ落ちる。

「メ、メリイイイイイイイ！」

「メリー様ったら、こんなところで寝ると風邪引いちゃうよー」

「ひい！」

崩れるメリーの姿を光のない眼で見つめるユメ。ちょ、怖い！誰この子、いつも知ってるユメじゃない。

「ユ、ユメ？」

「んー？」

私が意を決してユメらしきものに話しかけると、彼女は光のない視線をこちらに向ける。ダメよ、ここでくじけないでエウナ、ここでくじけたら来夢に笑われるじゃない。大丈夫、私はやればできる子。

見つめられてくじけそうになる心の中でそう呟くと

「メ、メリーは私が起こしておくからユメは先にお風呂行ってて頂戴」

「んー…いいの？」

目の前の彼女は首をかしげながらそう答える。その見た目はとてもかわいらしいのだが、眼が…眼が！

「え、ええ、すぐに追いつくから」

ユメは、わかりました、と言うとそのまま廊下の角を曲がってお風呂場へと歩いて行った。ふ、ふうー…これでやっと一息つけ

「ところでエウナさん」

曲がった通っていたユメは角から上半身だけを出すと私に光のない眼を向けて話しかけてきた。やめて！その眼やめて！怖いから！

「っ！な、なに？」

「早くしてくれないと、嫌だよ？」

そういつとユメは私の視界から消えて言った。

ああ、神様、吸血鬼の私が言うのもなんだけれど願わくば今日という日が無事明日という日が迎えられますように…

私は込み上げて来る涙を拭くと、メリーを起こして脱衣所へと向かうのであった。

果たして彼女はつけてい…（後書き）

これ…ぎゅっとする話書きたかったんだぜ…

だれてめえ状態ですが私は謝らない

時系列無視しまくっているが私は謝らないごめんなさい
並べる予定は今後もないので適当に脳内保管してください
ということでも楽しんでいただけたら幸いです

戦え！気力の続く限り！（前書き）

私「ネタが無いからネタ帳から好きなの選んで」

お友達「王様ゲームがあるじゃない！

これは王様ゲームで書いて貰うしかないですね！」

私「え・・・」

登場人物表

カスガ
霞日 エウナ

吸血鬼 なんだかんだで付き合ってくれるいい人 人じゃないけれど

カスガ
霞日 メリー

幽霊 遊び大好き

カナエ ユメ
叶 夢

メイド 何考えてるのかわからないとの談

カスガ
霞日 シュン

人間 普通の男子です、本当に 長期休みで帰省中

ユウカ
柚香

人間 少し変でシュンに惚れてる普通の女子です 乙女パワーがす
さまじい

ミツキ

クラゲ 愛してます

戦え！気力の続く限り！

そして柚香がシユンの手をぎゅっと握り返した瞬間、羞恥心か日ごろの恨みか、彼女の左腕が動いた。

「ぐほっ！」

「シユ、シユン君！？」

メリーの叫びが夜闇に響く中、真つ赤になった柚香の拳に顎を打ち抜かれたシユンがゆっくりと地に伏せていった。…アレはもうダメね。

「ただいま戻りました」

シユンを別室に連れていったユメが帰ってきた。ちなみに柚香も看病という名目で付いていつている。後遺症、ないといいのだけれど…。

「お帰りなさい…で、まだ続けるの？」

「当然ですよー！まだゲームは始まったばかりです！」

勢いよくそう言うと、メリーは6本から4本へと棒の数を減らしたコップをテーブルに置く。

「そう…それじゃ始めるわよ…？」

私はため息をひとつ付くとコップに入っている棒を手を取った。他の二人と1つも同じく別々の棒に手を伸ばす。確立は4分の1…分は悪くないわね。

『王様だーれだ』

□ □ □ □

テラスでお茶を飲んでみると、メリーがポーターを揺らしながらコップと棒を持ってきた。

ちなみに今日のお茶会はいつもと違って帰省中のシユンと柚香が来ている。

服装はユメはいつもと変わらずメイド服で宙にはクラゲがふよふよと浮いている。私は淡い水色のドレスにメリーは金魚の柄が入った藍色の浴衣。シユンは何も気にせずジーパンとトレーナー。一番気合が入ってる柚香は黄緑色のチェックが入ったスカートに同じく黄緑色の…たぶんシャツ？がんばっておしゃれしてきましたって感じの服装ね。

シユンはともかくとして柚香は何で居るのかしらね…？まあいいけれど。

「王様ゲームしましょう！」

真っ赤な顔をしながら必死に家に来た言い訳をする柚香のことを思い出していると、メリーが楽しそうに宣言した。うわ…めんどくさそう。

「王様ゲーム…？」

柚香がきょとんとして聞き返す。

「知らないんですか？」

「んーと…」

知らないらしい柚香にメリーが身振り手振りで説明を始める。
そつ…今頃は王様ゲームってしないのね…私もしたことないけれど
正直言つて係わり合いになりたくないの、シユンと同じく遠く
見つめながら紅茶を啜る。いや、カップの中は空なんだけれど。そ
してクラゲ邪魔よ、いちいち視界に入らないで。

…空のカップでいつまでも飲んだ振りをしているのはなかなか辛
い。

「ところでユメ」

「何でしょうか？」

私が戻したカップにお代わりを注いでくれる、ユメに暇つぶしで
話しかけてみると、彼女は人形の様な無表情のままこちらに視線を
向けた。

「あなた王様ゲームって知ってる？」

「はい、王様が命令したからには、血を吐き体を砕くようなことが
あっても実行しなくてはならないゲームのことですね」

…間違つてはない、と思う。

「そう、知ってるの。いつも美味しい紅茶ありがとう」

私がそう言つとユメはぺこりとお辞儀をして、再び私の膝の上に
乗った。

メリーの説明はまだ続きそうなので、さつきと変わらずユメの頬
を突付いたり抱きしめたりして暇をつぶすことにする。

「…お前らさ」

「…何よ」

「いや…もういいや」

そんな一連の動作を見ていたシユンがあきれた様にしてこちらを見ていた。…言いたいことはわかってるわよ。でも意外と癖になるのだからしょうがない。しょうがないわよね？しょうがないはず。

「と、いうことなのです！」

「す、すごいゲームなんだね…」

しばらくそうやって過ごしているとやっと説明が終わったらしく、メリーと柚香が戻ってくる。

「あー、メリー？」

意気揚々と1本の棒の先端を赤く塗ってるメリーに無駄だとは思っけれども話しかけてみる。

「何でしょうか？」

「私は参加しなく」さて始めましょうか」「
…」

やっぱり無駄だった。…こうなったら腹を喰らうしかないわね。何か違う気がするけど気にしないことにしよう。

「王様ゲームですか？」

「はいー、ユメさんもやりますか？」

私は強制なのにユメには聞くの！？

ユメは少し悩んだ風に首をかしげていたが、やがてこくりと首を縦に振った。

「それじゃコレで5人ですねー」

5人…？

私とメリーでしょ？あとは柚香とユメに…ああ、シュンね。どうやら強制参加者は2名らしい。シュンもその辺りは諦めているのか、特に何も言わない。

そしてさつきからクラゲが私の前で自己主張して来てすごい五月蠅い。ここは我慢よ私、相手はクラゲ何だから…何を考えてるのかどうか対話を通じるかもわからない相手に怒ってはダメ…。私が耐えてる間もクラゲは私の目の前で不思議な踊りを繰り返してる。

「ああもう！何なのよ！」

我慢できなかった。

私は叫ぶとその柔らかな体を鷲づかみにする。うわ…何この感触…ぬめってしてる。

「ミツキも参加したいらしいです」

私が手の中で自在に形を変えるクラゲと見詰め合っていると、ユメが翻訳してくれた。ちなみにミツキというのはクラゲの名前らしい。誰も呼ばないけれど。ところでクラゲって参加できるのかしら？

「ふむふむー、それじゃ1本追加ですね！」

ありがたい…

「エウナ…」

「シユン…」

「諦める…」

二人で見詰め合うとため息をつく。もう何を言っても疲れただけね…

「ではでは！第1回王様ゲーム開始しましょうか！」

そのメリーの言葉に王様ゲームが開始した。

『王様だーれだ』

その一言で一斉に棒を引き抜く。5番、ね。さてさて王様は…？

「これは…えーと…？」

メリーが呟いたが、無理もない。視線の先、王様の印である赤く塗られた棒を振り回して喜びの踊りをしているのがまさかの無脊椎動物だからだ。

皆が振り回される棒を見つめる中、考えてることは誰もが一緒だろう。

…どうやって指示を出すの？

「ユメ、翻訳してくれる？」

このままだとラチがあかないのでユメに助け舟を求めている。

「残念ですが、それは出来ません。ボクの口からではミツキが言っていることの信憑性が証明できません。ゲームである以上は平等でなければなりませんので」

…どうやらダメらしい。それじゃどうやって指示を出させるのか。まさかの1順目で最悪の王様という自体…いったいどうしようかしらね？

私たちが悩んでる間に、ユメが手帳とペンをクラゲに渡した。

「筆談…？」

その様子を見ていた柚香が呟く。なるほど、筆談なら指示も出せるわね。

問題があるとしたら…それが読める字なのか、だけけど。

私の不安もよそにクラゲは器用に文字を書き始めると、私たちに見せてきた。

手帳には無駄に達筆な字で「3番が一気飲み」とだけ書かれていた。

「へ…え？」

どうも3番は柚香だったらしく、メリーがこそこそと近寄るとグラスを渡す。それにしても一気飲みとは、意外と真面目な内容を考えるクラゲね。

「それじゃぐぐぐつとやっちゃってくださいなー」

「は、はい！」

メリーに進められるままにグラスを空にしていく柚香。

「ん…ふう」

グラスを空にした後には真っ赤な顔の柚香が。…真っ赤？

「それじゃ次行つて見ましょー！」

「おー！」

メリーの言葉に真っ赤な顔の柚香がノリノリで片手を振り上げる。明らかに様子がおかしいので彼女が飲み干したグラスの匂いを嗅いでみると…なるほどお酒、ね。

それにしても1杯であんなになるとは…柚香がお酒に弱いとは知らなかったわね。まあ、強そうにも見えないけれど。そして準備が出来たコップから棒を1本掴む。

『王様だーれだ』

次の数字は…2か…。さてさて王様は、と？

「きゃっほーい！」

メリーだった…

「なーにーにーしーよーうーかーなー」

彼女は楽しそうに赤い棒を振り回しながら考えると

「んー、まあ最初なので軽めにしますかー。

それじゃ、1番と3番は手をつないじゃってください！」

意外とまとも…ね？

どうも1番はシュンらしい。3番は…と？誰…？

「3番は？」

「ひゃ、ひゃい…」

聞いてみると柚香が真っ赤な顔でおずおずと手を上げた。2連続指名…運が悪いのか運がいいのか…。

「それじゃぎゅぎゅぎゅーっ！」

「あーはいはい、手つなげばいいんだな？」

「はう…」

コレもさつきと同じようにメリーが催促すると、真っ赤になったまま動かない柚香の手をシュンが取った。

「見てください、初めての共同作業です！」

そしてその様子を見て煽り始めるメリー。正直言って何が共同作業なのかわからないけれど、何を想像したのやらさらに赤くなる柚香。…大丈夫かしら？

「ほらほらー、ちゃんと二人ともニギニギしないとダメですよー」

「はふう…」

そして柚香がシュンの手をぎゅっと握り返した瞬間、羞恥心か日ごろの恨みか、彼女の左腕が動いた。

「ぐほっ！」

「シュ、シュン君！？」

メリーの叫びが夜闇に響く中、真つ赤になった柚香の拳に顎を打ち抜かれたシュンがゆっくりと地に伏せていった。…アレはもうダメね。

「ただいま戻りました」

シュンを別室に連れていったユメが帰ってくる。ちなみに柚香も看病という名目で付いていつている。後遺症、ないといいのだけれど…。

「お帰りなさい…で、まだ続けるの？」

「当然ですよー！まだゲームは始まったばかりです！」

勢いよくそう言うと、メリーは6本から4本へと棒の数を減らしたコップをテーブルに置く。

「そう…それじゃ始めるわよ…？」

私はため息をひとつ付くとコップに入っている棒を手を取った。他の二人と1つも同じく別々の棒に手を伸ばす。確立は4分の1…分は悪くないわね。

『王様だーれだ』

数字は3、まったく王様当たらないわね…。

「王様はー？」

メリーもはずれだったらしく見回すと

「どうもボクらしいです」

ユメが手を上げた。ふむ、まあ…特に問題はないでしょう…？

「それでは失礼ながら言わせてもらいます」

ユメはそこで一度切ると周りを見渡して、この後3連続で続く悪魔の一言を告げた。

「2番さまと3番さま、腹筋100回お願いします」

「…え？」

「はい、2番さまと3番さま、腹筋を100回どうぞ」

気のせいかと思って聞きなおすと無表情の顔をしたまま同じように告げた。…本気らしい。

「エウナさん…3番？」

「そういうメリーは…2番？」

私たちはお互い顔を見合わせると、腹筋を始めるのであった。まあ、腹筋くらいいたいたことないわね。

〈腹筋中〉

「ファイトオー！」

2度目の罰ゲームとなる98回目の腹筋で隣のメリーが叫ぶ。

「いっぱあーっ！」

3度目の罰ゲームとなる99回目の腹筋をしながら私が叫び返す。

「お二人ともお疲れ様です」

「……」

二人とも息があがってそれ以上続けられない。ふと横を見るとクラゲも腹筋のせいで地面に伸びていた。ふ、腹筋ってこんなに辛かったかしら……

「それでは、ゲームを続けましょうか」

クラゲが差し出してくる飲み物を一息で飲んでいるとユメが続きをしようとする。

「ちょ、ちょっと休ませてくれない？」

「はい？」

「……」

「……」

「……続けましょうか、メリー？」

「は、はい……それじゃ……」

決してそのときのユメの顔が怖かった訳ではない。断じてない。

『王様だーれだ』

1番、呪われてるのかと思うほど王様の番が来ない……

他の顔を見ると、メリーは肩で息をしながら棒を見ているし一番怖いユメは……無表情でわからないけれど何も言わないところを見れば違っのだろう。

そしてあえて見ないようにしているけれど、復活して小躍りする

クラゲが一匹。

「で…指示は？」

放置してもよかったのだけれど、放っておくといつまでも踊って
そうなので催促する。そうするとサラサラと手帳に何かを書き込み
始めるクラゲ。

「2番が3回まわってわん」

相変わらず綺麗な字ね。クラゲなのに。

「2番って誰…私は違うわよ」

「はい、私ですね。それではさせて貰いま」ふっ…ふっふー…」

ユメの言葉をさえぎってメリーが不気味に笑う。不気味に、笑う。
正直に言うと、息が整ってなくて途切れ途切れに笑う姿はかなりシ
ュール。

「こ、こんなこともあるのかと！」

冷めた視線でメリーの方を見ていると慌てたように何かを取り出
した。

「…何それ」

「何って、犬耳ですよ？」

「それはわかってるわ。それを何に使うの？」

私が聞くとメリーは素早くユメの後ろに回りこんで

「ユメさんにテイクオーン！」

頭に犬耳を乗つけた。意外と…いやかなり似合ってる。

「ユメさんにはコレを付けていて貰いましょうーっ！」

「…わかりました」

あ、少し反応が遅れたわね。この子が人間らしい仕草をするのって結構珍しいから少し嬉しい。

「…わん」

私がぼーっとユメの姿に和んでいるとくるくると3回まわると小さな声で鳴いた。

「っ…！」

その様子を見たメリーがすごい勢いで顔を背けて呟く。メリー…あなたの言いたいことはわかるわ…

「コレでよろしいでしょうか？」

「あ、はい。ごちそうさ…いえ！それじゃ続けましょうか」

視界の端で、ユメに気づかれないようにしてクラゲがグツと触手を差し出してきたので私とメリーは小さく頷く。今、種族を超えた何かが伝わりあった瞬間である。

「ではではー、次いつてみましょうー！」

『王様だーれだ』

3番…来ない…本当に王様が来ない…。
嘆いていても始まらないので気持ちを切り替える。

「あ、ボクですね」

「…」

種族を超えて気持ちが1つになった瞬間である。というよりコレは拙い！今度腹筋したら私は再起不能にされる！

「それでは、1番さまと3番さま、腹筋を100回どうぞ」

しかも私指名だった。…何か恨みでもあるの？

見ればメリーが絶望した顔でユメのほうを見ている。…ここは、
負けない！

「ちょっと待って、ユメ」

「はい、何でしょうか？」

「あなた同じ罰ゲームをしすぎよ！」

「はあ…何かいけなかったでしょうか？」

首をかしげてこちらを見てくる。くっ…ここで怯んではダメ！もう腹筋はしたくない！

「ダメなことはないけれど…たまには別のをしたほうがいいんじゃないかなーって…」

語尾が弱くなるのは仕方ない。というか目から光が消えてる！消えてるって！

「そ、そうですねー！せっかくの機会なんですから別のもしたほうが面白いじゃないですか！」

心が折れそうな私にメリーの援護射撃が飛ぶ。クラゲもユメから見えないところで必死に触手を振っている。今、種族を超えた共同作戦が動いた。

しかしメリーは未だに足が震えてるし（主に腹筋のせい）私はびくびくしてるし（主にユメに見つめられて）クラゲは見えないところでは意思表示をしない（たぶん怖くて）、誰もが弱腰である。

「そうですねー」

そんな私たちの努力が功をなしたのかユメが残念そうに俯く。目から光はまだ無い。すごく怖い。

「別の、ですか」

しばらくそうやって俯いていたが、やがて星空を見上げると考え始めた。

「それでは、1番さまと3番さま、ポツキーゲームをどうぞ」

へえ…ポツキーゲームねー。いいじゃない平和そうで…うん、腹筋よりも数倍マシよ。ポツキーゲームってアレでしょう？ポツキーを二人で両端から食べ合って先に離れた方が負けっていう。ん？両端から食べ合ってつまり…？

「負けた方は腹筋をお願いします」

「…」

負ける。口を離す。つまりは…ちょっと！…本気で！？

「ではどうぞ」

いつまでも動かない私たちにユメが催促してくる。見ればテープルの上にはご丁寧ポツキーがおかれている。

「えっと…エウナさん？」

「メリー…覚悟を決めて…」

私はポツキーを咥えると、不安そうに上目遣いで見てくるメリーへと顔を近づけると、彼女も覚悟を決めたように片方を咥えた。

…ポリポリポリ

少しずつ、しかし確実に真つ赤になっている顔の彼女との距離が縮まっていく。じりじりと縮まるからかなり恥ずかしい。だが私は引かない！負けられない戦いがここにはある。

そしてやがて距離は無くなり…

「ふう…こ、これでいいわよね？」

「はう…」

関係ないけれど味は甘かった。

「残念ですが腹筋は諦めましょう…」

やった！やったわねメリー！

そう心で言いながら彼女のほうを見るけれど、彼女は赤い顔のまま何処か遠い方向を見ていて反応が無い。

「それでは続きをしましょうか。メリーさま？」

「…へ？あ、ああ続きですね…それじゃ行きますよー！」

復活したメリーが勢いよく叫ぶ。

『王様だーれだ』

3番…来ない！本当に来ない！いくらなんでもこなさすぎる！もしかして私何かに呪われてるの？

「久しぶりに来ましたー！」

メリーが楽しそうに腕を振るので、王様は聞かなくてもわかった。ただ正直言つてユメ以外なら何でもいい気がする。それくらい腹筋は辛かった。インターバルで300回…どのトレーニングよ。

「それでは発表しましよー！」

ハイテンションのままメリーが宣言する。

「2番が3番に口移しで！」

また私が…クラゲ以外すべて指名されてるって本当に呪われてるのかしら…それにしても口移し、ね。ん…？

そこで気づいてしまった。この中で1つだけ無脊椎動物が混じっていることに…まって！下手すればクラゲからの口移し？冗談でし

よう!?

「エウナさんが3番ですか…ではでは2番はー?」

メリーが私の棒を見て周りを見渡す。お願いユメ、クラゲとするのは嫌よ。

「2番です」

「ありやりや、ユメさんでしたか…それじゃコレをお願いします」
「かしこまりました」

私の願いが届いたのかどうなのかはわからないけれど、2番はクラゲではなかった。メリー…クラゲ狙ってたわね。

私がメリーに対して密かな殺意を抱いていると、ユメが目の前にやってきてなにやら背伸びをしたりしてがんばっている。どうも届かないらしい。

「エウナさま、少々かがんで貰えますか?」

「ん、ああ。はい、どうぞ」

もう少し見ていたかったのだけれど、それをして怒られるのは嫌なので素直にかがむ。

「それでは失礼します」

そう言うつとユメは私に唇を重ねてきた。

「ん…んん!?!」

やがて、私の口の中にユメの舌が入り込んできた。ちょ、ちょっ

と!?

私が驚いている間にユメの舌からお酒のような物が少しずつ流し込まれていく。

「わお…」

メリーの驚く声が出てきたが、その間にもユメの舌からお酒が流し込まれていてそれどころではない。

そして含んでいるお酒も尽きたらしくユメが口を離すと、私とユメの間に細い糸が繋がる。

「ん…ユメ今のって…?」

「コレでよろしいでしょうか?」

ユメは私の呟きには応えずにメリーのほうへと視線を向ける。

「あ、はい…いいです」

「そうですか」

「そ、それじゃ…次行きましょうか?」

メリーがこっちの顔色を伺いながら聞いてくるので頷いて返す。

『王様だーれだ』

勢いよく引く。さてさて棒は赤! やつときた!

「おー? エウナさん王様ですかー」

「エウナさまが王様でしたか」

私の棒を見てメリーとユメが反応する。

「ついに…ついに王様よ…それじゃ早速行くわね」

そう笑いながら言うと、私は大きな声で宣言をした。

「ゲームセット！」

こうして、多大な犠牲（主に腹筋とか）を払ったゲームは終了し、屋敷内に平和が訪れた。ところで、その後の彼女たちがどうなったかはいう必要は無いだろう…筋肉痛である。

しかし忘れないで欲しい、このゲームの名前は第1回王様ゲームである。つまり第2回や第3回も無いと言い切れないということを！

この先、第2回や第3回王様ゲームがあるかどうかは神のみぞ知る…ということだろうかひとつ。

戦え！気力の続く限り！（後書き）

久しぶりのお友達のリクエスト回です

ちなみに百合タグは半分以上この回のせいで付けられました

関係ないですが誤字チェックして貰っているお友達のお気に入りは
メリーさん

ミンナハダレガオキニイリカナ

誰かしらお気に入りの子が居たとしたら感謝感激です

それでは、読んでいただきありがとうございます

後2話程度続きます

ホワイトデーは3倍返しと言いますが愛を3倍入れましたという言い訳は通用す
少しフライングでホワイトデーネタです

この辺りから作者が残念な状態でいつ投げるかもわからなくなった
ので半分気合と使命感で書いてる感があります

そんな裏話はいちて人物表

エウナ

吸血鬼 イベントに疎い そろそろここに書くネタがない

メリーさん

幽霊 イベントに聡い

カチエ
ユメ
叶 夢

メイド 世間知らず

ホワイトデーは3倍返しと言いますが愛を3倍入れましたという言い訳は通用す

「はい、ユメさん」

「これはどうもありがとうございます」

私はメリーとユメが何やら渡しあっている様子をすでに空となつたカップと手に持っている本を使って回避する。何：何なの？

ちらりと見るとユメはもらったのであろう猫耳を頭に装着してる。ただし、般若を被った状態で…

正直言つてかなりに怖い。何せ起きたら目の前にメイド服を着た般若の面があつたのである。何の呪いかと思つたわよ。

さらに今、般若にプラスされて猫耳が付いた訳で…メイドに般若の面、そして猫耳。何というか…ものすごく怖い。

それはもう普段の彼女ならばきつと似合っていたであろう猫耳も…般若のせいですべて台無しである。メリーもその辺はわかっていのか、ユメとあまり顔をあわせようとしない。

そういうわけで私は空のカップとまったく内容が頭に入らない本を読むことで、この奇妙なメイドに触れない用になっているのである…誰か助けて。

「エウナさま」

「っ！？な、なに？」

必死に本を読んでいる（振り）をしていると、突然般若が話しかけてきた。昨日まで小さかった無表情っ子が今日起きたら般若を被っている…この恐ろしさ、誰かわかる？

「お代わりをお持ちしましょうか？」

「え、ええ…お願い」

どうやらお代わりを入れてくれるらしいので空のカップを差し出す。今、私の武器が1つ消えていった。

私の目の前で注がれていく、茶色い何かと甘い湯気の香り。…ごぼごぼと泡が出てるんだけど…何度なのかしら。

「えっと…これは？」

カップに入れられているのは明らかに紅茶ではない。もしかして毒…？いやまさか…ね？

思わずメリーの方を見るがすごい勢いで首を横に振られた。彼女も何かわからないらしい。

「ホットチョコレートです」

「そ、そう…」

ホットチョコレート？何で？というかコレホットっていえる温度なの！？

まで…落ち着くのよ私…今ですべてヒントは出たはず！まずは日付ね、今日はたしか…

壁のほうを見ると、数十年前の日付のままで風化している日捲りカレンダーが見えた。…誰がめくってたんだっけ？

思い出そうとしてみたが、頭に鋭い痛みが走ったのでカップの液体を一口含む。

「っあっ！」

「どうかしましたか？」

「ひ、ひえ何でもないわ」

ひ、日付は諦めましょう。私は何とか平静を保ちながら思考を続

けようとする。日付がダメなら…そう！メリーがユメに何か渡してたじゃない！アレがヒントのはずよ。

何か渡す日は…クリスマスか…誕生日か…後なにかあったっけ？まず、誕生日の線は私もメリーも知らないだろうから消去しましょう。私だけ忘れているという可能性もあるけれど…それは考えたくもない。

次はクリスマス…クリスマスか…

「メリー？」

「はいはい、何ですかー？」

「今晚は、にやひケーキ？」

「…？ケーキがいいならそうしますけど…舌大丈夫ですか？」

…どうやらクリスマスじゃないらしい。となると後はなんだろうか。ああ、舌が痛い…。

「はい、エウナさん」

「…ありひゃとう」

何かを察したメリーが水を持ってきてくれたので口を癒す。ちなみに般若は地獄のような暑さのホットチョコレートを入れると、静かに部屋から出て行った。帰ってくるまで後どれだけの猶予があるか…

しかたない…一人で考えていても答えは出なさそうなので、ここは偉大な親友に聞いてみることにしよう。

「ところでメリー」

「はいはい」

「今日って何の日？」

「えーと…ホワイトデーってしてます？お返しの日の…」

ホワイトデーか！そのとき、私に電流走る。

いや、実際に走ってないんだけど。

それにしてもホワイトデーか…ホワイトデーね…うん、言われて見ればホワイトデーよ。確かバレンタインの時は…

『ばれんたいんちよこです』

思い出そうとしたら脳内で舌つたらずの声がした。うん、確かに貰ったわね。うん…そういえば忘れてたわ…

「拙い！」

「ど、どうしました！？」

思わず声が出る。というか何も用意してない！コレは拙い…何が拙いかわからないけれども色々と拙い。
かくなる上は！

「メリー！」

「はい！」

「今何時！」

「そーね、だいたいねー」

カップが割れた。

「…大体1時です」

1時か…お店は仕舞ってるわね。いや、待つのよ私！ホワイトデーは12時から…つまりまだ明日の夕方がある！

「明日チヨコレート買いに行くわよ!」

「はあ…チヨコですか…」

「まだホワイトデーは終わってない!」

そこまで叫んだところでユメが帰ってくる。ふふ…原因がわかった私にもう恐れるものは!ごめんなさいこつち見ないでください怖いんです。…ここががんばらなくていつががんばるのよ!

「ゆ、ユメ!」

「はい、何ですか?」

「明日チヨコレート買いに行くわよ!」

言った…私はついに言った…

「そうですか」

アレ?反応が薄い。アレ?どうして?

「あのー…ユメさん?」

私が固まっているとメリーがユメに話しかけた。

「はい」

「ホワイトデーって知ってます?」

「はい、聞くとこころでは般若の戦いが起きる日だとか」

誰に聞いたそんなことを。

「そ、それじゃそのお面は?」

「…??ホワイトデーとはこういうものではないのですか?」

「
…」

私の今までの葛藤は何だったのよ…

「どうかなさいましたか？」

「ユメさん…エウナさんはちょっと疲れてるんです…そつとして置いてください」

「ですが…はい、わかりました…」

無言で空を仰いでいると、そんな会話が聞こえてきた。

□ □ □ □

何はともあれ次の日の夕方、チョコレートを買いに街まで来たのだけれど…見事に閉店ぎりぎりね。

見ると他の店はシャッターが下りているし目的の店も明らかに元気がない。

「やってるんでしょうかねー？」

メリーも同じ考えなのか首をかしげながら店のほうを見ている。

「やってるでしょ…たぶん」

私はそっぴいながら店の扉を開けると、ユメがトテトテと小走りでショーケースに近づくとにらめっこを始めた。ちなみにユメは般若だけ外した状態で来ているつまり猫耳メイド…また無駄に似合っている。

「まだやってる？」

カランカランというドアベルの音を聞きながら声を掛けると、定員の子が慌てたように顔を上げた。

「も、申し訳ありませんが…本日は…」

「そう…それは残念ね」

うーむ…やっぱり遅かったか。しょうがない…お返しは何か別のものに…

「！？あ、あの！」

「ん？何？」

私がメリーに説明しようと振り向くと定員が何かに気づいたように声を掛けてきた。

「えっと…もしかするとエウナ様でしょうか？」

「え、ええ…そうだけれど」

私…何かしたつけ。

「知り合いですか？」

「知り合い…なのかしらね？」

メリーが不思議そうに聞いてくるけれども、私には覚えがないから何もいえない。

「て、店長から聞いてます！その節ではお世話になったそうで…」
「そう…なの？」

本当に昔の私は何をしたのだろう…？

私が本気で悩んでいると裏から気の強そうな女性が出てきた。あ
… 何処かで見たことあるような。

「ちょっと何時まで！… ってエウナ様ですか！？」

「ええ、久しぶりね」

とりあえず微笑んでやり過ごす大人な対応。

「覚えていたのですか、てっきり忘れてるものだと思ってたのです
が…」

私がそついうと涙ぐみ始める彼女。

（ちょっと… エウナさん誰ですかあの女）

メリーが服を引っ張りながら小声で聞いてくるけれども、身に覚えがないわよ。

（エウナさん… 聞こえてるんですか？ エウナさん…！）

「あ… チョコレートがほしかったのだけれど… もう閉店だったみたいね」

とりあえずメリーは無視して聞いてみる。

「そんなとんでもない！ エウナ様の言うことなら何時までも開きますとも！」

「そ、そう… それじゃ少し買いたいのだけれど」

（へー…私の知らないところであんな綺麗な人とコネ作ってたんですかー…そうですかー…）

…徐々にメリーの力が強くなって肌に食い込んでくる。アレ？私悪くないよね…？

「ゆ、ユメ？」

「はい」

「ほしい物は決まった？」

（応えないってことはそういうことなんですかー…ほー…そうなんですかー…）

このまま話を続けていると大変なことになりそうなので、さつきから商品を見つめていたユメに聞いて見る。お願いだから早くして…メリーの指が痛い…。

「はい、ボクはコレがいいです」

「えっと…本当にそれなの？」

「はい、コレがいいです」

ユメが指差したのは1ホールのチョコレートケーキだった。…1ホール、円形のアレよ。カットされてないアレ。

（…）

メリー…そろそろやめて…。

「め、メリー？」

「はいー、何でしょうかー」

…笑顔が怖いと思っただのは久しぶりよ。

「あなたも何か買っ？」

「え…？」

痛みを堪えながら聞くときよとした顔になって聞き返してくる。ついでに指の力も弱くなってやっと一息。

「いえ…ユメも買っのだからあなたもどう？」

「えーっと…」

何やら悩んだ顔をしているメリー、そしてなぜか私の腕に抱きついて無言の講義をしてくるユメ。…何なの？

「私はいいですよー」

「そ、そう？遠慮しなくてもいいのよ？」

「遠慮なんてしてないですよー、それよりも今晚お酒に付き合ってくれるだけで満足です」

「そう…それじゃコレももらえるかしら？」

要らないと言ってるのだから無理にいう必要もないでしょう。ということで、ユメの選んだケーキを買って戻ることになりました。

「そ、そんなお代だなんて！」

…なぜか顔を赤らめてそう言っただとたん、メリーの指が私の腕についてユメの抱きつきが強くなった。それに伴い私の腕が臨界点を

突破して素敵な形になるまではあとわずか！

「いえ…いいのよ商品を買ったら代金を払う…その辺はきっちりするものでしょう？」

ああ…骨がぎしぎし言ってきた…コレはかなり拙いかも。

「そうですか…それではありがとうございます…」

何とか代金を渡すてユメとメリーを引っ付けたまま外へ出ると、二人とも静かに離れた。ああ…自由って素敵。

「エウナさま」

「ん？何？」

私が自由を謳歌しながら手を動かしていると、ユメが空を見上げながらいった。手にはどこから出したのか、水晶があしらわれている杖。

「いつもの感謝の気持ちを返そうと思ひまして」

「…？それってどういう…」

『わが名のもとに命ずる』

私が全部言う前にそんな呪文がユメの口からこぼれると、彼女から光の柱が空へと上っていった。

「へえ、時星術ですか…珍しいですね」

その光景を見たメリーが隣で面白そうに言っている。え？ナニソ

レ？

混乱しながらも、しばらく光の先を見つめっていると空から何かが降ってきた。えっと…これは…雪？

特に冷たくもない、季節外れの暖かい雪。明らかに自然の産物ではないそれは静かに降り注いでいる。

「コレが…ボクからのお返しです。気に入ってはもらえたか？」

うん…正直言っただけ原理とかはまったくわからないのだけでも。

「雪の降るホワイトデー…ですか」

「へえ…素敵じゃない。そうと決まれば今日は宴会と行きましょう。理由はもちろん！」

今は大きな奇跡を起こした、小さな魔法使いを称えましょうか。

ホワイトデーは3倍返しと言いますが愛を3倍入れましたという言い訳は通用す
たとえどれだけ人気がなくとも！

読んでくれている人が居る限り私は最後まで走り続ける！

泣いても笑ってもつまらなくても誰も読んでなくても次ラストです

ということでも少しもお楽しみいただけたら感謝感激

旅行に行こう！ はじさよさよはじ（前書き）

ホワイต์デーに2発ばなしてみる

ということ宣言どおり最終回です

例によって例の如く作者が残念な状態で半くらはへんじがない、ただのしかばねのようだになりつつあるので内容がおかしい場合があります

ご了承ください

最後の最後で前作、くらげって可愛いですよーを知らないとかわからない内容になってます。

知らない方は先にそちらを読んで頂けると感謝感激

と、いうことで

人物表

エウナ

吸血鬼 長生きです

メリーさん

幽霊 時代を先取る最先端技術複合

叶^{カナエ}夢^{ユメ}

メイドさん 秘密がばれる！ 世間知らず

巫女さん

巫女さんです 名前はあるけど公開しない 世界保健機構？^{ダレダロウ}

海月^{ミヅキ}

クラゲ 個人的なヒロイン

あ、いつもより長いです
レシゴ

旅行に行こう！ はじさよさよはじ

「はじめまして、今日からお世話をさせていただくことになる叶夢と申します。以後よろしくお願いします」

一連の騒動の後、彼女は私の目の前でぺこりとお辞儀をした。…
どういうことかはわかったけど…まずは…ね？

「とりあえず…服を着なさい」

□ □ □ □

宿に着いた後…まあ、お風呂で色々とおったけれども私たちは本来の目的である海辺へと無事たどり着いた。

「ユメ…あんまし走ると転ぶわよ？」

嬉しいのかどうか、海を見たとたんにな言で駆ける我が家のメイドとおまけ。あなたってそういう子だったっけ…？

「エ…エウナさん…ちょっと…ま…」

ユメの姿を見ている私に近寄る虫の息の背後霊。何百年と除霊から勝利してきた悪霊も、今なら楽に成仏させれそうである。

やがて背後霊はただの霊となると、大量の荷物を地面へと置くことによって得た安息を私の隣でかみ締めている。…あなたは何時までも変わらないのね。

「あなた…いい加減に学習して荷物減らしたら？」

このまま放っておくと彼女自身も地面に潰れそうなので救いの声を掛けてみる。私の方に来たら面倒じゃない。

「エウナ…さんが…持って…くれたら…」
「…」

彼女がこの先も救われることはなさそうなので駆け出したまま戻ってこないメイドの方へと視線を向けて、彼女が私へと向けてくる捨てられそうな子犬の視線をやり過ごす。

「それにしても夏なのに人が居ないわね…」

ユメとおまけ1匹以外他に誰も居ない浜辺を見てポツリと言葉が漏れる。夜だから…って言うのは関係ないでしょう、たぶん。

「えっと、夏…ですか？」

私の弦きに対してかどうなのか、やや戸惑ったようなメリーの声の下から聞こえてきた。相変わらず復帰が早いわねえ…

「ん？夏って海に行くものじゃないの？」

どうも反応がおかしいので私の記憶違いかどうか聞き返してみることに。

「あ、あー…そうですねー…夏ですねー」
「…どうして視線を逸らすのかしら？」
「え？えーと…アレですよ。夜桜が綺麗だなーと」

…今考えたような言い訳ね。まあ桜が綺麗なのは認めるけれども。

「突然ですが！季節当てゲームをしようと思います！」

私も彼女にならって桜吹雪の散るさまをぼーっと眺めていると、彼女から声を掛けてきた。

「1月の季節は何時でしょう！？」

「…それって私が言わなきゃダメなこと？」

「正解者にはお酒が出ます」

「春ね」

「ふむふむ…」

メリーは私が即答すると何かを少し考えてから続けた。…不正解なのか正解なのかは言わないのね。

「それでは第2問！」

「正解か不正解かはいわないの？」

「10月は何の季節でしょう！」

無視しやがった。10月…10月か…1月からだから…。

「…冬？」

「なるほど…」

彼女はそう呟くとまた長考を始める。…そろそろ飽きてきたわね。

「…それで？」

「ん…？」

「クイズの判定は？」

「あー…正解…でいいんでしょうね…たぶん」
「…ずいぶんと自信なさげなのね？」

まあ、正解なら別に何でもいいか。

私たちがそんなバカなことをしていると、いつの間にかユメが私のところまで戻ってきていた。

「ん？もういいの？」

「はい、ミツキはもうしばらくは居るらしいですが」

ミツキ…クラゲだっけ？

見ればなるほど、確かにクラゲはまだ波と戯れている。ところで私は今までアレが水を被つてるところを見たことがないのだけれど…海水平気なのかしら？

「ふっふっふー！」

そもそもどうやって宙に浮いているのか、というクラゲの神秘について悩んでいると、今まで蹲つてごそごそとしていたメリーが不気味さを演出しようと笑い声を上げる。当然スルーする。大体めんどいことが多いし。

「ところでユメ」

「何でしょうか？」

「ふっふっふ…」

「初めての海はどう？」

「そうですね…しよっぱいですから水鉄砲が強そうですね」

「水鉄砲…ね」

「ふ…ふふ…」

「はい、いざというときは武器として使えそうです」

「武器…ね。それはまた…「無視しないでくださいよ!」」

ついに耐え切れなくなったメリーが叫んだ。五月蠅いわね…

「それで…何?」

私の楽しみを奪った代償は大きいわよ。

「ふっふっふ…」

私が聞くとメリーは再び笑い始めたので、放っておいて楽しみの再開といきましょう。

「ところでユメ」

「はい、なんで…「聞いてくれるんじゃないんですか!」?」

「五月蠅いわね…何よ?」

「うっ…エウナさんが冷たい」

メリーがそう言った瞬間、なぜかユメが私に抱きついてきた。

「な、なに?」

あまりにも突然のことだったので軽くよろけながらも、ユメの体をしっかりと受け止めて聞いてみると、彼女は私の胸に埋めていた無表情を私へと向けた。

「冷たいと言っていたので暖めようかと思ひまして」

「そう…」

まあ…それならそれでいいわね。別に困ることもないし…私

も幸せ行動したユメも幸せ、みんな幸せ万々歳。

「無視しないでくださいよ！」

…五月蠅いわね。

「…何？」

私の幸せを阻害したのはそれはもう重大な用なのよね？

「…花火しませんか？」

私が軽く睨みつけると、メリーは色々諦めた様子で手に持ったものを私のほうに差し出してくる。んーと？

「花火…？」

花火…よね？たしか火をつけるとアレがああなるアレ。うん、知ってるはず。

「皆でしようとかと思って持ってきたんですよー」

「へえ…いいんじゃない？」

ユメも私の腕の中でこくこくと肯定してるし。

「よーし！善は急げ、早速しましょうか！」

メリーは張り切った様子でシートを敷くと、びりびりと花火の詰まっている袋を開けて中身をあたりにぶちまける。

元は固まっていた色とりどりの花火がばら撒かれるのにユメの好

奇心が刺激されるのか、じたばたとして私の拘束から逃れると花火へと向かっていった。・・・泣いてないわよ。

「コレは何でしょうか？」

「それはロケット花火ですねー。こうびゅばーんって飛ぶやつです」
「ふむふむ」

ユメは興味津々という様子で気になるものを手につてはメリーに聞き、その内容を手帳に書き込んでいる。後ろからちよつと覗き込んでみたけど『ロケットびゅばーん』とか『ねずみはじける』とか書いてある。・・・それでいいの？

ちなみに花火にユメを取られた私はというとその様子を寂しく見つめるしかなかった。だから泣いてないって。

・・・どれくらいそうしていただろうか、急にぽんぽんと肩を叩かれた。

無言でそちらを見ると、私の目の前でミツキが寂しく頭を横に振っていた。ああ・・・あなたも私と一緒になのね・・・。

今、クラゲと吸血鬼との間で静かな友情が生まれた。

「ミツキ、そんなところに居ないでこっちにきてください」
「・・・」

ユメに呼ばると嬉々として向かう刺胞動物。・・・友情って・・・儂いものよね。

「・・・ということなのです！」
「なるほど、それは楽しみです」

二人の楽しそうな声が聞こえる中、私は涙を吞んで空を見上げる。
嗚呼・・・今日はこんなにも星が綺麗。

□ □

わたしがおそらにきらめくおほしさまをかぞえていると、ちかくのしーとからこえがしてきた。

「エウナさん…？エウナさん？」

ああ、わたしをよぶだれかのよぶこえがする。

「エウナさま、どうかなさいましたか？」

「ん？もう終わったの？」

私は何処かの旅から無事帰還して見てみると、どうやら蠟燭も用意して花火の準備は万全らしい。・・・ん？

「ところでメリー」

「んー？何でしょうかー？」

「マツチはどこにあるの？」

「…」

「…」

沈黙する二人。

静かに握られる私の拳。

刺激しないようゆっくりとバケツの位置を確認するメリー。

「つまり…？」

「マツチ…忘れてました」

夜の海岸にバケツが炸裂する音が響いた。

「「……」」

思わず音のほうを見る私とメリー。

すると何と！そこにはバケツのあったであろう地面に短刀をふかぶかと刺している、無表情なメイドの姿が…！

これは…ヤバイ…！

そのとき、この場に居る全員の思考がシンクロした。

（ま、拙いわよメリー！）

私とメリーの間で目による緊急会議が発動！

（そ、そうですね…このままだと、間違いなく殺られます！）

（こうなったら…）

（（何とか火を付けるしかない！））

無言のまま二人で頷きあう。この間1秒未満である。

「ま、まあ…マッチがなくても火はつけれるわよね」

「そ、そうですね！マッチがなくても火くらいどうにでもなります
！」

「…さいですか」

静かに短刀を引き抜くユメ。ゆ…ゆめさん？言葉が少し違いますか…？

だがしかし、そんなことは思っただけでも言葉に出してはいけません。誰だって命は惜しいのである。

そして何よりも行動で示さなくては这个世界は生きていけない。
なぜなら…彼女は未だその小さな手から短刀を離してないからだ！

「ユメ…少し海の方を行ってきたら？その間に火は何とかしておくから…」

「そうですね…わかりました」

「一人では何だしミツキも行ってきたさい」

ついでのを装ってクラゲを連れて行かせることで時間を稼がせることも忘れない。よし！コレで少し時間が稼げる！

「メリー…道具は？」

「は、はい…」

メリーがかばんの中身をぶちまけていく。中は…お酒と花火…そして紙！

我々はコレだけの内容で火をおこさなくてはならない！

「あなた魔法で火とか使えないの…？」

「少しは出来ますけど…こんな水の近いところで火を起こすのは無理ですよ…」

「そう…」

メリーがそういうなら魔法の線は消えたわね…私はまったく知らないし。

お酒…お酒か…

「メリー！」

「はい！」

「一番度数の高いお酒持ってきて」

「わかりました！」

メリーがお酒を探している間に私は花火の解体をする。欲しいのは火薬！

「どうぞ…」

解体が終わると同時にメリーがお酒を持ってきた。後はコレを紙に染み込ませて火薬を…

「えっと…エウナさん？」

「…何」

「それってかなり危ないと思うんですけど…」

「…やっぱり？」

「はい・・・下手すると大惨事ですよ？」

しかしその程度で止まっては居られないのである。もしも失敗したら摩擦で起こすくらいしか手がなくなる。

…何よりも火が起きなければ手が吹っ飛ぶ以上の大惨事が起きることは確実！

そして私は火薬へと拳を思いっきり叩き付けた。

□ □

「おお…」

楽しそうに花火をしているユメを二人で眺める。

「何とか…なりましたね」

「ええ…何とかなったわね」

そういい合うと私とメリーはお酒の入ったコップを力チンとぶつける。

結局、火は付かなかった。そもそもあんなもので付いたら苦労しない！だがしかし、別に摩擦で火おこしなんてしていない、大前提として悲しいことに二人とも方法をしらなかった。

ならばどうしたかというと、答えは簡単で、私が宿まで戻ることになった。それはもう…持てる限りの全速力で…

私が火を取りに行き、メリーとクラゲでユメをとどめる。それはもう流れるような連携がそこにはあった！

まあ…あと数分遅かったら惨劇の場になっていたのではないかと思っくらい拙い状況だったのだけれど…

今こうしてお酒を飲める。それが何よりじゃない！

「そういえばエウナさん」

「ん？」

「明日お祭りがあるらしいですよー」

「へえ…そうなの」

お祭り…ねえ。あんまし人の多いところって苦手なのよね…

「よければ一緒に行きませんか？」

まあ、特に断る理由もないしいいか。

「…いいわよ？」

「ホントですか!？」

メリーは早くも酔いはじめているのか、ほのかに赤い顔をこちらへと向けて乗り出してくる。どうでもいいけど顔が近い、そして酒臭い。

「ええ、ユメも喜ぶでしょうしね」

「え…？」

ん…？私何か変なこと言った？

「どうかしたの？」

「え…い、いえ！何でもありません…」

聞いてみてもそれほど要領を得ない返答ばかりする。ふむ…？ついに電波の受信に成功したのかしらね？

「お祭り…楽しみですね」

「ん…ええ、楽しみね」

よくわからないけれど…まあ本人がそういうなら何でもありません。本当に電波受信とかされると反応に困るし。

そう結論付けると、さっきと同じように楽しそうにはしゃぐユメの方へと視線を送る。…この子、無表情じゃなければ完璧なのになえ…

「あ、そういえば夜桜を…ん？」

「んー？どうかしましたか？」

「あ…いえ、何でもないわ。皆で夜桜見に行かない？」

「夜桜ですかー、いいですねー」

「夜桜？」

「ええ、行きて咲いてたけれどちゃんとは見ていないでしょう？だ

から花見としていい場所があるから明後日辺りにでも行かない？」

「ふむふむ…それは楽しみにしています」

「楽しみにしておいて頂戴」

私はユメにそういうと再び海辺の方を見る。

どうも見間違いいではないらしく、いつの間にかそこには赤いコートの下に巫女服を着た女性が立っていた。

見ようによつては少女とも取れる彼女は私の視線に気づいたのか、振り向くと微笑むとゆっくりと何かを口ずさんだ。ふむ…？

『じんじゃであいましょう』

読唇術は苦手だけれど…大体こんなものでしょうね。

ところで彼女…誰かに似てる気がするのよね…誰だっけ…？

「エウナさん、ぼーっとしてどうかしたんですか？」

「ん…いえ、あの子が…あれ？」

メリーに言われて彼女が居た辺りを指差したときには、すでに彼女はどこにも居なくなっていた。

□ □ □ □

浜辺を1人のメイド服を着た少女とクラゲがゆっくりと歩いている。

少女は海のほうを眺めながら転ばないようにゆっくりと歩いていたのだが、やがて何かに気づいたかの用に視線を前へと戻した。

いつの間にか少女の目の前には巫女服の上に赤いコートを着た女性が1人いる。見ようによつては少女とも取れる彼女は、シヨートにしている黒髪を風になびかせながら遠く海のほうを見つめていた。

「こんばんわ」

「こんばんわ」

まるで旧知の仲のように挨拶をしあう二人。

「あなたがここに居るということはそういうことですか？」

メイドが聞くと。

「はい、ボクがここに居るということはそういうことです」

巫女服が答える。

「そうですか…やはりしないとダメなのでしょうが？」

「それをあなたが聞きますか？」

柔らかく微笑む巫女と、硬く無表情を保っているメイド。

二人とも顔や服装、髪色は違えどもしぐさなどの他の部分は同じで、まるで合わせ鏡のように対極的であった。

「そうですね…ボクが聞くことではないですね」

二人はしばらく無言で見つめ合っていたが、やがてメイドがそう言いつと帰るために振り返って歩き始めた。

「まあ…ボクが言うことでもないのですが」

メイドがゆつくりと歩き始めると、その背中へと語りかける巫女。

「最後までいい、自分を殺さずに素直になってもいいと思いますよ?」

その言葉を聞くとメイドは立ち止まって巫女へと振り返った。

「それをあなたが言いますか。まあ、そうですね…どれだけ出来るかはわかりませんが、そうすることにします」

「それでは、御機嫌よう。あなたに幸せが訪れることを祈ってます」
「どうも、御機嫌よう。ボクは今のままで十分幸せですよ」

そして二人とも少しの間見つめあうと。

「「それでは、今後二度と会うことがないように祈ってます」」

二人は同時にそういうとそれぞれ歩き始めた。

メイドは自身を待つ、主人の方向へ。

巫女はメイドとは逆の、誰も居ない方向へ

□ □ □ □

着くや否や人々の喧騒が辺りに散らばり、お祭りへと来た私たちを飲み込んでいく。ちらりと露天へと目を向ければそこには、食べ物やお面、射的などといった定番から、占いとかよくわからない胡散臭いものまでさまざま。

まあ…何やかんやあつたけれどもお祭りである。

「ユメ…あんまし離れないようにしなさいよ?」

「はい、わかってます」

気になるものがあればチョコチョコと動き回る浴衣姿の少女を見失わないようにと目を向けながら、メリーと並んで歩いていく。…

本当にわかってるのかしら？

今日はお祭りということで全員浴衣姿、さらにユメの頭にはお面屋で買った狐のお面が乗っかっている。

このお面、かなり出来がいい分値段もそうとうだったのだけれど、悲しきことに彼女はお面を見つけるや否や心を奪われその場から一歩も動かなくなった。…その結果は泣くに泣けない私の心象と寒さに震えるお財布が物語っている。

「メリー…後どのくらい残ってる？」

まるで蜜を集める蜂のようにあっちへこっちへと動きまわるユメを見失わないようにと気をつけながら、小声で聞く。

「私は…まだ平気ですね」

「そう…それじゃ私が無くなったらお願い…」

「わかりました…」

お祭りということで、普段のお小遣いのほかに軍資金をメリーから貰ったのだけれど…コレは切ない結果に終わりそう。

夏草や兵どもが、夢の後。

まあ、そんなバカなことはいいいとして楽しんでもらえて何よりである。

例え私の持つお財布に永遠に開けない冬がおとずれても、楽しめているのだからそれでいいんじゃないかしら？…それでも考えないとやっていけない心境なのよ。だが私は泣いていない！泣いてはいけないのよ…

その辺りで経済的な思考は断ち切り、適当なところで買ったたこ焼きを口へと運ぶ。

「あなたもどう？もう冷めてるけれど」

「…いいんですか？だってエウナさんもうおか…」

「ああもう！」

なにやら続けようとするメリーの口にしたこ焼きを放り込むと続ける。

「今日はお祭りなんだから細かいことは抜きにしましょう？」

そう言っただけで笑いかけて私もたこ焼きを口に運ぶ。うん、冷めてておいしくない。そういえばお祭りの食べ物って美味しくなくても問題ないらしいわね？リピーターが要らないとかで。

そんなこんなで3人でぼんやりと歩いてると、神社へと続くであろう石段が見えた。

その石段を見たとき、ふと昨日見た女性のことを思い出す。そういえば…神社で何とかかんとかって言っていたわね…

「メリー、ちょっとユメと居て貰っていい？」

「んー？どうかしましたかー？」

「ちょっと神様に挨拶してくる」

「一緒に行きます？」

「いいわ、すぐに追いつくから二人で廻ってて」

「はいな」

メリーにそう告げると人の流れから外れて神社へと向かう。あんまし騒ぎにはなりたくないのだから空は飛ばず、普通に歩いていく。

「エウナさま、どうかしたのですか？」

「んー…何でもエウナさんは神様に挨拶するらしいですよー」

「挨拶…ですか？」

「はいー、私が睨むところ恋愛成就ですか！」

後ろでメリーがユメに説明している声がしてくる。…私がいなかったらずいぶんと適当なことばかり言うわね。

やがて、長い石段を昇り終わると境内へとたどり着いた。そこには神社のほうを見ている赤いコートを羽織っている少女が一人。

「寂しいとこね…あなたの神社？」

気づかせる意味もあつて声を掛けると、彼女はこちらへと振り向いた。

何処か懐かしい、不思議な雰囲気にする黒髪の少女。

「いえ、少し借りては居ますけどボクの神社ではないですよ」

このとおり、中は巫女服ですから。そう言つてこちらへと微笑みかけてくる。

「それで…私を呼んだのはどういう用？」

「呼んだわけではありませんよ、あなたが来ただけですから」

そこまで言うと思議な雰囲気彼女は空を見上げた。彼女が動くたび、微かに血の匂いが漂ってくる。

「あなた、怪我でもしてるの…？」

「怪我…ではないですね。コレは…んー、呪いみたいなものです」

「呪い？」

「まあまあ、そんなことはどうでもいいじゃないですか、今はあなたがここに来た用件ですよね？」

「ええ、あなたが私をここに呼んだ理由、ね」

そして彼女は真剣な顔をして私の顔を見ると、その言葉を告げた。それは今までの幸せが終わる一言、欠けているものを取り戻すための、そんな言葉。

「あなたは何時まで幻想^{ユメ}を見ているんですか？」
「どういう…っ!？」

意味を聞こうとしたが、頭に鋭い痛みを感じて最後まで言うことが出来なかった。

そして思い出される、忘れていた思い出とあの子の言っていた事。

『エウナさん…あのね…ボクが死んでも…笑っていられるように…』

私の脳内に死ぬ直前まで笑顔を保っていたあの子の姿が出る。え…何…これ？

『笑っていられるように…記憶を…凍結しますね』

そして私はすべてを思い出した。

「エウナさん！」

「メリー…」

「ユメさんが…ユメさんが…倒れました!」

私は境内に走りこんできたメリーが抱えている子を見て目を見開く。うそ…だってあなたは…

「エウナさん…?どうしま…え…来夢…ちゃん？」

呆然としたメリーの眩きが聞こえてくる。
あなたは…死んだはずでしょう…来夢…？

□ □ □ □

彼女が死にました。

ボクは無言で彼女の死体の横に立っているだけで、他に何もありません。涙すら出ないんですから…なんともいえません。まったく、困ったものです。

最近の夢の終わりはいつも同じで彼女が死にます。それがボクにとってどういう意味なのか…今更説明されることはないでしょうね。してくれる人ももう居ないですし。

彼女は夢の中で何度も何度も死にます。

それはすでに彼女の死が確定しているということをボクへと言っているかのように…諦めるわけにはいきません。

彼女を守ることが出来ないのなら、ボクは何のために生き残ったんでしょうか？

もう大切な人が死ぬ姿は2度と見たくありません。まあ…ボクが
いえたことではないと思いますが…

この先も彼女が笑っていられるというのなら…ボクは何であろうと差し出しますしなんであろうと実行します。たとえ、それにどのような犠牲が伴うとしても。

□ □ □ □

「…それじゃ、少し出かけてくるわ」

「はい…行つてらっしゃい、エウナさん」

私はあの晩からめっきり起きることが少なくなったユメの頭を撫

でると、屋敷から夜空へと飛びたった。目指すは祭りの夜、すべてが終わったあの場所へ。

神社が見えてくると、彼女は相変わらず巫女服と真っ赤なコートのまま、境内を手に持っている箒でのんびりと掃いていた。

「意外と早かったですね」

私が彼女の後ろに音も無く降り立つと、まるで来ることがわかっていたかの様に手を止めて振り返る。

「…まるで私に来ることがわかってたみたいな言い方ね？」

「こう見えてもボクは時見ですから、未来がわかるんですよ」

自分のことはからっきしなんでしょうけどね。そう言つと彼女は何処か嬉しそうに笑いかけてくる。

「そう…それじゃ話は早いわね？」

「あ、その前にお茶でもどうですか？ボク入れるの上手いんですよ」

「」

「要らないわ」

「…そうですか」

私が断ると少しだけ残念そうな顔をしたが、すぐに真剣な顔になつて続けた。

「あなたにとつては辛い話になりますよ？」

「それでもいいわ…どうして私たちにはあの子…ユメが来夢に見えるの？」

「正確には見えているわけではないんですが…わかりました、では

では不肖ながら私がネタばらしと称しまして、この物語に終止符を打つことにしましょう」

彼女は手に持っている簞を一振りしてペンダントへと変えると、自身へと付けて話し始めた。

「あなたは、生き物が死ぬとどうなるか知っていますか？」

「…死んだらそのままじゃないの？」

「そうでもないですよ。輪廻転生、という言葉の通りに生き物は死んでも次へと転生します。まあ…彼女はそうはいかなかったからこくなっているわけですが…」

本来、生き物が死んで転生するには『何か』でなければなりません。たとえばそれは獣であったり、人であったり、魔物であったり…まあ、それは様々です。つまり、生き物が何であろうとも、転生する以上は『何か』でなければならぬわけです。

しかし、彼女は人という存在をやめたままで他の何にもなることはなく死んでしまいました。

通常なら、そのまま消えていくだけだったでしょうが…幸か不幸か彼女の魂をこの世に繋いだものがあります。

それが、あなたたちです」

彼女はそこで一旦切ると、こちらの様子を伺う。

その様子はまるでこの先を言っているのか悩んでいるかのようで…だから私は…

「…続けて」

先を促す。

「…命を終える直前、彼女はあなたたちの記憶を凍結しました。

それはあなたたちに自身の死は忘れて笑っていて欲しい、という彼女なりの願いだっただけでしょう。ですが…それによって彼女の死は『世界』に認識されなくなったのです。

『世界』…別に神だろうと何だろうと名前はいいいんですが、彼らは生き物が他の生き物の死を認知することでしかその存在の死を認識することが出来ません。ですが、彼女の死は記憶の凍結ということであなたたちに認知されることはなかった。

よって、彼女の死は彼らに認識されることがなく、消えていくはずだった彼女の魂はこの世へと繋ぎとめられたのです。

当然、いくら繋ぎとめられたとは言っても魂だけでは何も出来ませんが、彼女に器…存在を用意したものが居るんでしょう。

それらによる様々な事実によって、彼女は再びあなたたちの前へと現れた」

境内はとても静かで、まるで私と彼女だけがこの世界から取り残されたかのよう。そして私にはなぜか、静かに話す彼女がとても寂しそうに見えた。

「つまり、今あなたたちが見えているのは彼女自身の姿。あなたたちの記憶が戻った事で彼女を認知出来るようになった幻の様なものです。ですから、あなたたちには記憶が戻った後、今まで見ていた器のことが彼女であるように感じたのでしょうか。」

そして、その彼女が床に伏しているのは…」

そこから先は言われなくともわかった。

「私たちが記憶を取り戻すことであの子の死を認知したから、ね。」

…最後に1つだけいいかしら？」

「何でしょうか？」

「あなたは…どうして私たちの記憶を戻したの？」

「…それが、彼女にとっても幸せになると思ったからです」
「その結果として私たちに恨まれることになったとしても？」
「それは…」

そう聞くと、彼女は私から視線を逸らして少し躊躇するような、何か嘆いている様な素振りを見せたが、すぐに私の方をまっすぐと見つめると。

「大切な人が自身との思い出を忘れたまま、というのはあまりにも悲しすぎるじゃないですか」

「…そう、話してくれてありがとう。…もう行くわ」

私はあの子の代わりに頭へと乗っかっている狐のお面を手直ししながら、彼女に背を向ける。コレで聞きたいことは全部聞いた、なら…これ以上ここに留まる必要はもうないわね。

「私からも1ついいですか？」

「…何？」

振り返らずに答える。

「あなたは…私を恨んでますか？」

「…それ、本気で言ってるの？」

私は彼女との距離を一瞬で詰めると、その柔らかい首筋へと爪を当てる。

カランカランと手に持っていたお面の落ちる音が私の立っていたところから小さく聞こえてきた。恨んでいるか？恨んでいるかだつて？

「…あなたは私が恨んでないと思うの？」
「…」

ゆっくりと、自分を抑えるようにして聞くが、彼女は答えなかった。やがて、力を入れすぎたのか、彼女の白い首から1筋の赤い雫が垂れてくる。

「…帰るわ」

しばらくそうしていたけれど、何とか感情を抑えながらも彼女から背を向けゆっくりと歩き始める。

「殺さないんですか？」

私の後ろから彼女の声がしてくる。

「殺さないわよ…今、ここであなたを殺したら、あの子に顔向け出来ないでしょう」

「そう…ですか」

私は自身に言い聞かせるようにいいながら、地面へと落ちた狐のお面を拾って頭に載せる。ああ、そういえば…

「あなた…誰かに似てると思ったら、あの子に似てるのね」

殺さなかったのは…それもあるかもしれないわね。そう呟いてから、私は神社を後にした。

「ボクは…何時までも待っていますから…」

私が飛び立った後、神社の方から小さく声がした気がするのだけれど…振り返ったときにはそこには誰も居なく、無人の境内が寂しくあるだけだった。

□ □ □ □

屋敷に戻った私をメリーが無言で出迎えてくれた。

「どう…？」

表情から大体は察することが出来るけれど、万が一ということも会って聞いてみるが、彼女は無言で顔を横に振るだけ。

「そう…まだなの…」

そしてメリーに神社で聞いてきた話を伝える。

全部話し終えた後も彼女は何も言わずに、私も特に何も言えなかった。

このままこうしていても仕方がないので、ユメの寝ている部屋まで二人で歩く。

『おはようございます、エウナさま、メリーさま』

扉を開けたとき、そんな声が聞こえてきたのだけれど、幻聴だったのかユメはまだベットに寝たままで起きてはいない。

「ただいま…ユメ」

「エウナ…さま？」

私は近くの丸椅子に座ってまだ起きていないユメの頭を撫でてい

ると、彼女はぽつりと呟いた。

「…全部知ったのですね？」

ユメは私とメリーの様子から何かがわかったらしく、薄く目を開いて私の方を見てくる。

「ええ…」

「そうですか…」

そこで切ると彼女はゆっくりと体を起こそうとする。しかし、思うように動かないのか、すぐに力尽きてベットへと倒れこむ。

「そのままでもいいわ」

「申し訳ございません…」

私は倒れたユメの体を優しく撫でながらそう伝える。

「エウナさま…メリーさま…少し、お願い事があるのですが…」
「…なに？」

メリーに代わって私が聞く。

「ボクが消えたら…この器に残った子を…お願いします」

私は何もいえなかった。

「器には…魂が宿りますから…私が居なくなれば…この子のことを…」

そこまで言った辺りで、突然咳き込んだユメの体を優しく撫でる。

「わかったわ…だから無理はしないで」

彼女が咳き込むたびに残される時間はもう少ないんだと嫌でも感じる。ああ…そういえば前にあったときの最期もこんな感じだったわね…

「家事の…方法とかは…メモにあります…から…それを…」

それでも彼女は少しずつ話し続ける。後わずかしかなに残された時間を自分のためではなく、残された他の誰かの未来のために使い続けていく。

「ええ…ええ…わかったわ…」

私はそれが悲しくて、けれども泣くわけにはいかない。私が泣いたら彼女は慰めてくれるだろう。でも、その分だけ彼女の時間は減ってしまう。

「エウナさん…」

「なに…？」

もう上手く呼吸も出来ないのか息も絶え絶えで呟くように話すユメ。

「夜桜…ちゃんと…見に…行きたかったですね…」

「いい…のよ…そんなことは…」

今、私はちゃんと笑えているだろうか、泣いてないだろうか。

「エウナさんは…やっぱり…やさしいですね…」

彼女はそう言うと、ゆっくりと目を閉じた。

「今度は…見つけてくれますよね…？」

「ええ…今度は…私から見つけるわ…」

滲む視界の中、私は彼女の体を最後まで撫でつづけている。
そして…彼女はやがて動かなくなった。

「ユメ…さん…？」

「メリー…」

私は泣きじやくるメリーを抱きしめながら背中を撫でると、目を
閉じたまま動かなくなったユメの頭を撫でながら呟く。

おやすみなさい、来夢。

□
□
□
□

「んう…？」

ベットの近くの椅子で本を読んでいると、今まで眠っていた白髪の少女が目覚めます。

「おはよう」

「あなたは…？」

彼女は私のほうをぼんやりと見るとそう呟いた。

「はじめまして、私はエウナ、こっちはメリー」

私は込み上げてくるものを何とか堪えると先を続ける。

「そしてあなたはユメよ…我が家のメイドの」

「ゆ…め？」

「ええ・・・叶　夢　あなたの名前よ」

□
□
□
□

月明かりに照らされるテラスで金髪の女性が本を読んでいる。彼女の髪は背中まであるロングで、頭には似合っていない高級そうな狐のお面。

やがて、読書を続けている彼女にメイド服の少女がティーポットとカップを持って駆け寄って行った。彼女はショートの綺麗な白髪を揺らしながら満面の笑みで女性へと近づいている。

「エウナさまー！」

「…何よ？」

私は紅茶を持ってくるや否や抱きついてきたユメを受け止めると

「一応聞いてみる。…どうやら読書はここまでのようね。」

「んー…何でもないー」

「…何でもないなら離れてはもらえないかしら？」

無駄だとは思うが一応お約束として抵抗してみることも忘れない。
続き、気になるし。

「やー！」

…どうやら無駄だったようなので強行手段をとることにしましょう。
う。ということでユメをくつつけたまま読書の再開。

「エウナさまエウナさま」

「何？」

顔をあわせるのがめんどうなので視線は本から離さずに対応する。
まあ、放っておけばメリー辺りが来るでしょう。

「そのお面…いつもつけてるよね？」

「ん…」

不穏な空気を感じたので頭を逸らしてお面に伸びる手を回避。

「コレはダメよ、大切なものなのだから」

「むー！」

私はなにやら膨れている彼女を横目でちらりと見ると一人ため息をつく。
…これは理由を説明しないとダメそうね。

「コレはね。私の大切な人との約束の証なの」

「やくそくー?」

「ええ、約束」

いつか必ず見つける。その約束を忘れないためにも、無くすわけには行かない。

「どんなのどんなの?」

「どんなのどんなの?」

どうやら好奇心旺盛な我が家のメイドにとっては興味津々の内容だったらしい。ああ…やっぱりめんどうなことになったわ。

「そうねえ…」

月を見上げながら彼女の入れた紅茶を飲む。うん…まだまだ勉強不足ね。

「おいしい紅茶を入れれるようになったら、教えてあげてもいいわよ」

それはあの子が居なくなっってからも続けられる、そんな日常。

□
□
□
□

そこでは誰もかれも騒いでいた。

今日は無礼講、人も人外も妖怪も、誰もが関係なく騒げる日。

ユメが目覚めてから数年がたった今、誰がどう変わったかという
とそんなことはなく、シユンと柚香は進学してからも相変わらず進
展はないし、メリーも変わらずに数々の酒豪を飲み倒している。一
番変わったのはユメで、今までショートだった白髪を伸ばしに伸ば
し続けた結果、今は腰辺りまであるので水色のリボンで縛らせてい
る。そろそろ切らせないと…

当の本人はメリーにくつついて就寝中、幸せそうな顔でどんな夢
を見ているのやら。

私はそんな騒ぎを少し見つめてから、大きく赤く咲く桜の下まで
歩く。そういえば、桜の木の下には死体が埋まっている…ね。

そのおかげなのか関係ないのか、その桜は他のどれよりも綺麗に
大きく育ったご様子。

しかし、私の目的は桜ではなく桜の下に居る赤のコートに巫女服
を着た、あのときから変わらない彼女。

「こんばんわ、綺麗な月ね」

彼女は私が声を掛けると驚いたように振り向いたが、すぐに納得したような顔で微笑んだ。

「そうですね…ですけど目の前に私という名のもっと綺麗な月がありますよ?」

彼女はおどけたようにしながら私に笑いかけてくる。

「ええ…本当、あなたは月みたいね」

「おやおや?これはまさかの反応、コレは私の隠し切れないびばーがなせる業ですか」

五月蠅い、自分で美貌とか言うな。舌回ってないし。

「手が届きそうなのに届かない、って意味よ…おかげで苦労したわ」

まさかこんなに近くに居るとはね…

「それはそれは…ご苦労様です」

「本当よ」

そして二人で笑いあう。そして私は彼女へと全ての始まりの言葉を告げる。

「初めまして、でいいのかしら?」

「初めましてでいいんじゃないでしょうか?」

「そう、初めまして、やっと見つけたわよ」

「これはこれはどうも初めまして、やっと見つけてもらえましたか」

そこで切ると、私は少しだけ桜を見上げてから彼女へと視線を戻す。

「それで…今度はなんて名前なのかしら？」

旅行に行こう！ はじさよさよはじ（後書き）

デデーン！

おまけはけされてしまった

…と、いうことで前作からお付き合いしていただけた方も近作からお付き合いしていただけた方も読んでいただきありがとうございます
少しでも楽しんでもらえたのなら作者としてコレ以上の喜びはありません

それにしても第1話で44人居た読者が次の週には11人になった
のにはたまげたなあ…

作者が残念なことになって予定の半分の長さになりました本シリーズですが、無事完結することができたのは読み続けていただけた方が居たからです

ではでは最後として

こんなだらけたあとがきまで読んでくれる人にも、あとがきは
すつとばした方にも感謝のことばでメようかと思えます

皆さん本当にありがとうございます

それでは、また縁があったら会いましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4413q/>

さよはじ はじさよ

2011年9月3日22時41分発行